

山陵見奉る 後光殿院 小松院 圓融院なり、其しなり、けふは三十年ばかりむかしのこどもも  
餘は九重寶塔にていませるよし、是は見奉らす、 出て  
松の間よりはのかに見参らすのみなり  
さ、なれし軒の松風今も猶

生しける草の葉末にれく露を

むかしの音はかはらざりけり

玉のうてなど見るかなしき

もみちをむかし植ゑさせたりしが今も色づきたる

雲龍院より三つのみねなど見ゆ、ほど、ぎすなき

がをかしかりけるに

てすぐ、

西にのみそめし心のいろをさへ

しのひつゝ、なのりもゆくか大内の

のこしてみする庭のみち葉

山ほど、さすなれし昔を

有栖川の老女二人來て、こはよき御みやげなるを

廿三日講釋、廿四日はやすむ、華頂山影堂御廟並  
に大僧正墳墓へも拜禮す、忠次郎めしつれ、將軍  
塚へ一見、山の上五六町のぼる、松五七本雜木生  
しげるに、竹の垣しまはしたり、めぐり廿四五間  
なるべし、京中眼下にみゆ、廿五日講釋、廿六日  
やすむ、聖臨菴にて大僧正の御供養せるよしにて  
ゆく、此尼公はもとの信行院せの、ゆかりの人に  
て、今も有栖川の宮御方にて見あつかひたまふよ  
とわりはさることなれど、きのふまでも、ものい

(五十六)

(五十七)

ひなせしけるをど、れもふにもいとわはれにて、  
其夜(二十)五條より歸りにどふらふ、はや棺にい  
れてけり、念佛して歸る、通夜のものに菓子やる  
あづかりものゝことゝも納所の上人に申傳ふ、廿  
八日、けふはかう釋ひる前にすむ、五條にて御滿  
中陰つとむとて又人につとふ、勢至堂に  
まわり御はかにゆく、法立法師湯たて、  
ゆあみさす、めぐらしければよめる

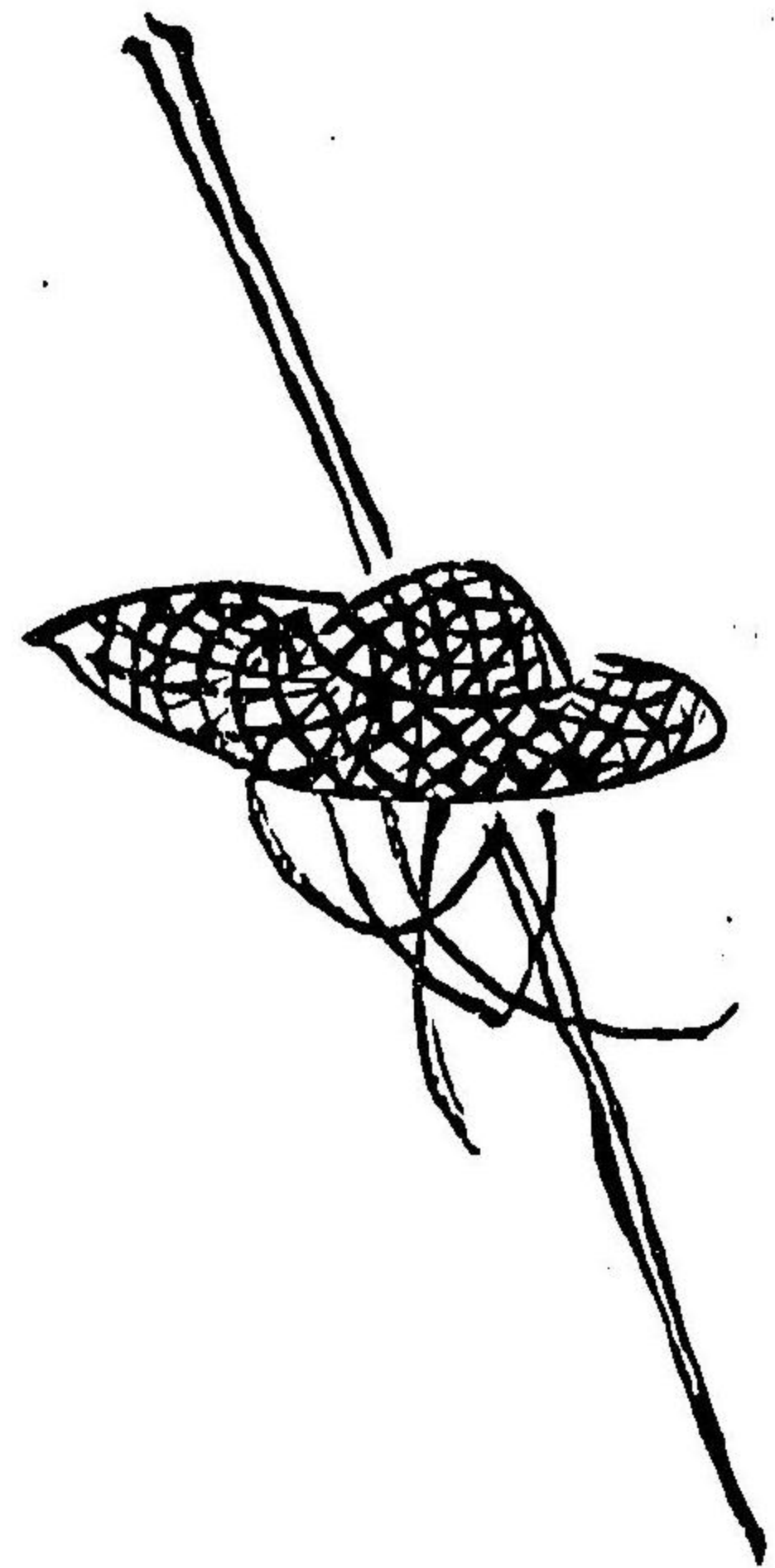
いつのよにむすひねさしか岩かねの

いけの吉水かゝるちぎり

岩かねにかゝるかけひやこれそ世を

かけはなれたる水の音かな

其夕輪岡上人の館をどふらふ、入信院の



主へ白毫光院に謁す、法の物かたりかすゝす、  
一枚起請の奥書の事わけつらふ、さる事はむかし  
の人をもさゝく申さずなんこたへ給ふ、ことしは  
諸山の寶物どもの内、御直筆のみ見奉らばやなど  
六月朔日、から釋やすむ、天氣よしけふは氷室な  
れども氷もくはず圓通尼寺にゆく、故僧正の御追  
善なりと御齋供養丁寧なり晝後しばし念佛して、  
加茂吉田真如堂見巡らんとてゆく、けふは谷某の



脚のかきたる御繪傳を見る、裝飾の御されは、先帝の御衣なるよしとかしこし、二日けふは大佛堂の別時なりなぞ申す、天氣よしかう釋す、此頃はずべてあつし暑中めきたり、さのふ圓通寺より歸りたれば、慈念院のもとより文こそ、江戸も事なきよしねんごろにいふ、京にのぼりては此文ぞ江戸のこといへるははじめなり、ゆづらかにればおけるに

れどつる、門のくひなのそれならて

こはめつらしき雁の玉章

ことしは都にてかゝる志うけんとはねもひの外なり、夕方雨、三日晴あつしかう釋す輪間の墓まうです花備ふ、心眼院にゆく人々ともいふめしくふ、淺井の老女とふらふ眼やみていとくるしきをどらせ玉ひけるうれしさにいたみやみさといふもれかし、しばらく物がたりす母の最後のことなぞ申すをばりなみだりを念佛せよかしなぞす、ゆ夜に入

りて歸る、御廟參の折は必ずきたらせねはしませかしなぞ聞ゆ、四日仁右衛門と淺井に文つかはす、かう釋す朝の内なり、あつし加茂の社にまうでなかれての末の世までもひすふ手に

濁らぬものはかものみたらし

かも山はすしかりけりねひしける

みかきの榊庭のみたらし

今宵四條にゆく道にてむかしの友靈忍上人にあふ夜中なるをものいふ聲をさしりて思ひよらずどはれしなり、五日はれあつし靈忍上人とふらふ、今は大津の花階寺に住持し玉ひけるとぞ、講釋、隨喜聽もんしてひねもすはなしす『唱へたくみな光に露の身はさぬてそ蓮の玉となるへさ』とよみてれこせたまふ

消にしかどはかり思ひしはちすはの

つゆのたま〜あふかうれしさ

ひねもすものかたりて申のこくばかりに歸る、白

(三百七十五)

(三百七十六)

川のはしのはどりまで送る、六日はれてあつし、かう釋す大雲院よりあすのまつりにとねもひ玉ひしを、奉行參るよしなればけふ物參らすべきをこよといひてねこそ、申のこくばかり天性寺の主と供なひてゆく、一心院の住持にあふ、亥のころまでかたらひて背山みんとて歸る、七日はれてあつし、さのふ夕つかた江戸よりかたびらなぞねこそ、事なきよし此よりの文とゞきたるよし申す、御幸町の茂助かもとへ、地藏尊のこと無能寺よりとて文こそ、けふは朝かう釋やすみて祭り見に永養寺にゆく、伏見の寺の人々にあふ、赤飯くふ、午のこくばかりに歸る、夕へつるめすみにゆく、十人ばかり武者出づ、八日はれあつし、午のころ雨すこしふるかう釋す、成願寺上人手つくりとなづけゝる菓子一箱『玉川にさらす手つくりめせやめせふるさ昔にかへる世なれば』といへる歌をへたり、是は千種三位の君なごのよめりしにや輪岡師

遺物ならさらし一反ねこそ、九日はれあつし、けさ講釋す晝より夕たち雷つよくなる夕かたはれ、月よしすし

をどめ子かすしのもするふさかへし

ふさかへすなりかもの川風

十日はれけふもあつし、輪岡師二七日なればとて華頂の心空院にゆく花なぞ備ふ、十一日はれあつし、かう釋やすむ夕立す、めさむ、

れちたさつ岩かね枕をさつ

みし夢さます軒の夕立

十二日けふもあつし、かう釋しまひて西山の俊風上人かへせたまひたる多きもよむ學信上人信岡上人なぞ物とひし宿老なり、澄月上人とは和歌の友垣むすばれしよしなり、千首ばかり歌しるしたり、いづれもたゞならずなんみゆる、道のいや高きに此道をさへかくものし玉ひしなんいとく才力のすぐれ玉ひけんをたしはかる、夕妙花妙定とめし



くひけるとゆめにみしが、やがて夜わけけるに

心にも物ねもひ草しけるらん

夢にそみゆるむさしの、原

今日定海上人歸京のよし傾崑老もて申す、今日住

持の上人と宵山みんと町へ出づ、十三日晴あつし、

かう釋今日にて至誠心を講じをはる決疑抄會本第

三の巻終ふ、悟眞寺福田寺あつさあたりにて不參、

今朝氷さど一箱定海上人にねくる、歸京のよろ

こびなり、船中よりせん痛にてつかれてまた參り

えずとなん申しこさる、仁右衛門今夕五條にゆき

定海公にあふ、十四日はれ今日は祇園のまつりな

りどて干切やにゆく、かう釋はやすみ十五日はれ

あつし、かう釋、悟眞寺上人入來、十六日はれあつ

し、かう釋のしまひとる雨ふる、ひるからもす

し、むさしの、人々にかきてやる、

ひとつの道わかれ〜てはちすはを

ねなしうてなにもみるかわひしさ

老ぬれはいと、ねろかになるみくの

せみも梢になくかどそさく

心にはかゝるとすれど今日も猶

よそによ川のみねのしらくも

なにことも難波の浦のあしどさく

世にもつらしなよしといふ水

(是は吉水をよめるなり)

此歌ども遺す所、妙行かたへつかはす、御比丘尼

へみせん料なり、見性院のかた、久留氏、いと

う氏、宗仙父のかた、鈴木母子、多きかた、

十七日今夜清水へ參る、かう釋、あつし、十八日

今日もあつし、かう釋、十九日けふも、廿日けふ

も、廿一日けふも、廿二日けふも夜すし、廿三

日けふもかう釋、御所女中三人まうづ、廿四日け

ふ決疑抄第四のまきをばる、けふは東寺御す、み

どなづけて大師御影供あるよしなるをとも西福寺

にゆく此和尚と同道なり、大師並に御寺みなく

まゐる、大通寺へも詣づはすめし夜食福田寺にて

したゝひ、夜に入り歸る、御寺へ今日は二度詣づ、

蓮花さかりなり、御堂三つあり、南は藥師中は大

日不動北は千手の觀音四天王地藏文殊なり、廿五

日はれあつし、かう釋やすむ、和尚とふ二人にて

蟲拂所々みる、二條ひの口善導寺佛牙の舍利作り物にて十六ら

かん三十三身のゑ見ととなり善導大師唐西十佛を吐

法師の像なるべし今日盧山寺なし淨華院唐畫のかも此にて

しはみな導師の影さす神宮寺にて一枚起請開扉とねもひしになし、此

に一枚起請ありしを、いかにしたりけん、ほしな

寺六尊金佛の根本太百萬遍一枚起請文手奥書の事御語け

いかくありていかにか有けんとねほつかなし、さ

れば御傳にはなきをいかにして此寺などには書加

へられたりけん、黒谷のはけふはみすいかにやあ

るべき、もし奥書むかしよりあらば何として御傳

和語燈錄などには漏けんいぶかし、識者にさかま

はし、此には源智上人の添書もありけり、是もうた

がはし、此に五祖の像あり能の面五六枚あり、大

師の御負御りんなど御念持佛のよししかく品か

すねほし、あつければ本堂其外の所にもみなやす

みてねるもありめしくふいろく、吉田より眞如

堂義政公の寄付の御壺あり高さ三尺あまりなるべ

し、鳳龍のほりあり水かめなるべし、○○○夫人

荆王夫人中將姫の軸あり、笙一管ありかろきこと

紙の如し、銀の口慈覺大師の獨鈷鈴、黒谷蓬池院

へよる、若王寺瀧三筋永觀堂蓮池あり、南禪寺佐

久間玄蕃勝之寄進の燈籠棹二かへに一尺あまる

臺石、六角一方五尺づつ、廿六日から釋、あつし、

晝より少しくあつさにや打ふす夕かたようなる、

さ船にてよめる

わすれすは法のなかれにかけやとせ

さ船の神よもとのちかひを

さ船川なみにかはりてしら雲の

岸のあなたをたちかくすなり



き船はくらまの山につゝきたる所にて、いと木ふなん道も遠しとてみず、樓の下の方に坊どもあり  
かき所なればなり、此よりゆき道を東にたどりて又門あり、其うとに茶屋とも四五軒ありて、此に  
くらまの僧正谷にのぼる、十町ばかりもあるべし、てめしくふ、未のこく前にたちて山くだりあつし  
けんそなり、僧正谷は峠にて三尺ばかり石一つか上かもにゆく、此御社はきしにましてねこそか  
こひしてたてり、うれば舍那王丸のむかし、けんなり、松のなみき一條今出川より一里ばかりつゝ  
法傳へし所となん申侍る、くよし、御車の道とぞ古風いはんかたなし、此よ  
る紫野大徳寺今宮に詣づ

まはしとてあとをくらまの山かつら

くたく薪やこゝろなるらん

けきは月わかりにて山さしてきにければ

ありわけの月かけうすし山の名の

くらまはたどる道にうありける

坊どもみな嚴肅なり、廿とせばかりむかし本坊は、  
やけてなし、今は山門の樓に毘沙門天をまつる、  
僧正坊の影、辨慶のたち、義經の野太刀などあり  
四尺ばかりなるべし、けふは竹さりとて山門の兩  
方に青竹六七本づつ、よこにわたして垣やうにし  
たり、申の下こくばかりなるよしなればまたくれ  
さ山みね二つ見ゆ、茶亭金しり二疊家作じさの上段あ

紫野いつくと問へは一本の

わふち花さくあたりとそいふ

今宮いと美麗なるしきなど長々し、かもとくらぶ

り、勝手へついで床南天たなのはしら萩一尺金う  
しろに主人上り口水やつく、

今もさすきぬかさ山の夕付日

むかしのかけのゝこるをを見る

高どのにしては合はせしここのねの

なこりさひしき松の夕風

廿七日から釋例のあつし、悟眞寺入來ものがたり  
す、松室氏せんさいもち出來しよしまねく、ゆく、  
時子のむすめの爲たる所なり、廿八日から釋例の  
あつし、今宵五條へゆく、廿九日ももる、むまの  
こくすぐるころより雨ふり風すさまじ、昨夜えい  
山に火あけたり、雨乞なりとぞ、このころ雨たえ  
てふらざりければ所々の山々にて火炬あけたる、  
わけてえい山のはいつもまゑるしありとぞ人はいへ  
る、ふしぎなり、今日はすしければし、か谷に  
ゆかんどいひければ風つよくゆかず、

袖ふきはらへかもの川風

どかきて順堂沙彌に扇やる、けふはすししくてし

ばしうた、ねす、尾花に風ふくところを夢にみる

初尾花なひくをみればむさしのも

けふか秋風ふきそめぬらし

むさしの、尾花風ふくゆめもはた

みなれしよりやみゆるなるらん

七月朔日朝はれ、獅子谷へゆく、本尊拜す、隠居  
と銀かく寺へまうづ、慈照院殿の山莊なり、ちい  
さけれとれかし、御像とも有り、今日典壽律師の  
御所持起信論かる、教理抄惠遠の別記二卷海東の  
別記一卷かる、たどさくふ、歸るころ九つ時すき  
なり、野中にて雨にあふ、晝後から釋、夕かた入  
信院の院家來り玉ふ、法のものかたりとぞもして戌  
のこくすぐるころ歸る、けさ

夢もまたれどろかれけり秋さぬと

つけの枕のあかつきのかね



越後國かしは崎極樂寺弟子二十學問にとて華頂入  
 信院に寓す、先日よりかう釋き、に來りし、けふ  
 は夏手ぬくひ一すぢをもちておひに出たり、越後  
 の國に下りたまふともあらば、願はくは我寺にき  
 たり玉へなせいふ、いとす勝なり、いろく遣し  
 てかへす、二日、はれあつし、ひる後かう釋す、  
 入信院より起信亭録如切又一さつもたせつかはす  
 夕刻入信院にゆく、法話、院家曰、今日三州より  
 二十ヶ條ばかりを問難す、宗名は何に根據せりや  
 雑袋を脱すること十疑論に義林章を別る、事、亥  
 のこくのころ歸る、三日くもる、少々涼し、五條  
 より侍一人江戸へあすゆくとていとま乞に來る、  
 筑前の届け物書状もち來る、少林寺よりねこせし  
 かは帯を天性寺の主にやる、こは京にもいとまれ  
 なるもの、よしなり、和州石光寺より定阿がかき  
 たる文こす、吉野葛の菓子一箱、やき豆一袋めづ  
 らし、太子の御廟入の事申しこす、頓阿上人の一

我はまたけふも願のいとのすぢを  
 佛の御手にかけてこそ見れ  
 女のてふをみる處、  
 うさこもうれしきこともさめてみよ

さゝにこてふのゆめの世の中  
 明年明年のと並せも、うたへるをさゝて、  
 こんどしの秋の契りをまてとさく  
 ろの曉やわひしかるらん

七日雨ふる、晝後かう釋、

天の川雨にもほしやわたるらん

ね戮かさましかかさままし

世にすめは同心かさゝかにの

くも、願ひの糸やかくらん

此夕、かも川に出る水ましていとすし、まばし

すみして歸る、今日まで三日こ、ちあしくてあ

んまさすらす、少々そこなひし氣分なほる、八日

あつし、けふもかう釋、かう釋今少しにてはてな

んどせるころ、にはかに目まひす、あしたよまん

をみなく次のまにていこひ玉へといふもくるし

うて其まゝねる、聴聞兼あきれませふ、酉すぐる

ころもどに復す九日はれ、あつし、けふはきのふ

のくたびれにてねる、未すぐるころ嵯峨清涼寺の

大和尚さませり、ねきてあふ、たにさくたまふ、

例のをかしきはなしどもに氣分あどなくなほる、

やかてかう釋の人々きたるに、けふはたふれたら

ん時の用意にとて、ぬまにてかう釋はじむ、清涼  
 寺上人もよき時にきたれり一席聴聞せんとて、ゑ  
 んがはに衣めしてお玉ふ、すみてそらめんなどい  
 だして酉のこくばかりに歸らせ玉ふ、其夜はよく  
 やすむ、十日かう釋後、故大僧正の御はかにまう  
 づ、

恭謁故大僧正莊譽大和上之廟飲一偈和祐厚法師韻

烟嵐深處石爲床。 拜趨無人水繞堂。

寂滅道場何所示。 只令松籟說無常。

かう釋はけふまでにてやすむ、十一日朝廣大寺に

ゆく、此寺は秀吉公の御臺所の廟なり、すぐに歸

る、けふは氣分あしく終日ねる、大雲院のあらは

せる御傳辨釋四卷をよみをはる、

さらにまた心細くもみゆるかな

旅寐の秋の三日月のかけ

草枕むすふ日かすもれく露も

かきりなきまで秋はなりけり



大賢坊のもとにやる、(大賢坊は白山と云ふ所にするなり)

身を捨しむかしのあども有ものを

つとめてのはれ雪のしら山

蒸麩坊のもとにやる、

あつめてし窓のはたるも秋ちかみ

光薄くやなりまざるらん

此法師、道に志しうすかりければ、いさめにもど

れもひてよめるなり、十二日けふもいくたひか雨月を、

ふる、心ちすがしからで、ひめもす寐る、十

三日晴、夕方御廟參、十四日晴、十五日晴、氣分

わしくてねる、十六日晴、から釋、十七日晴、か

う釋、十八日晴、から釋、十九日晴、から釋、廿

日晴、から釋やすむ、五條子時念佛、故大僧正百

十日なりとてひめもす念佛つとむ、花献る、廿一

日華頂常稱院にて別時なり、御廟參、廿二日晴、

獅子谷戒難師入來、今日から釋、廿三日、はれあ

つし、から釋、夕方地藏參詣、十ヶ所へまうづ、

十輪に表せるなるへし、廿四日はれあつし、けふ

は別時とてから釋やすむ、雪の歌よむ、

ふみわけてあども人もなかりけり

身をすてしてふ雪の山道

花を、

なか／＼に手をらはちらんさくら花

梢なからをたひけたらなん

我心かたむくかたにいるみれば

ゆみはり月をわはれなりけり

かきて傳導寺上人にやる、

我袖も露はれさけりむさしの、

草の葉末にれとりやはする

廿五日はれあつし、今夜起信論上册終講、廿六日

朝攝州尼ヶ崎在等覺寺圓靈入來、西の宮西安寺弟

子靈願初登山頼み、廿七日晴、今日伏見花火これ

あり、朝より和尚と同道にて行く、途中稻荷山三

(書六)

ヶ峯中山五百羅漢石像寶塔寺瑞光寺參詣瑞光

寺は元政法師が開基にて今に律場なり、脩竹翠松

森々、殿堂蕭寥たり、日蓮宗の如くになし、廟所

に詣づ、土饅頭に小竹三本植たり、前に板屋しき

瓦あり清寧感ずるに堪たり、

一時法雨潤三千。此地那伽滅盡窟。

曾有真人清氣存。松聲竹韻徹人骨。

其よの法の光をぞ思ふ

藤の森御香の宮拜禮、伏見西蓮寺へ行花火見る、

退屈生して夕剋獨歸る、いさゝか心地をこなひて

武兵衛のやどに泊る此ゆきかへり天性寺の犬一ツ

どもしてけり、歸りたるころはつかれたりや、す

くに打臥したるわはれなり、道の程六里なり廿八

日朝雨ふる、今日も一日ふす、今夕寺に歸る、其

夜もねつ出づ、廿九日晴、今日も一日ふす、ねつ

さむ、江戸より書狀來る、法類中より天性寺へ換

抄、處辭院代筆にて用向申越、瑞真院十五日より

平臥のよし速に歸府すへしと申す、さらは紀州と

高野のみにてすみやかに歸らんなきかたらふ、今

日悟真寺へ書狀つかはし、大坂の寺の名さゝにや

る、旅の丁度もとふ、晦日はれ。

八月朔日はれ、二日晴、今日悟真寺主案内にて大

坂にくだる、夜舟にのる、三日天氣よし、八軒屋

につく、道頓ぼりに上陸、生玉寺町大安寺につく

此寺にどう留、天王寺五重の塔にのぼる、一心寺

清水參詣、翌四日雨ふる、高津明神へ參る歸り路

持病さし起り寺よりかおにて迎にこす、歸る、や

すむ、翌五日發足の心得なりしに病によりて一日

逗留、六日早朝發足、天王寺にて悟真寺にわかれ

住吉社にもうづ、松の風景よし御社だんだんなら

ず高燈籠にのぼる、堺の町に入り、はさみなどか

ひ其夜は橋本にやせる、翌七日かこにて高野にの

はる、道けはし、きのふの道にて持病れこりしに



こりてかおにて女人堂までいたる、此にて下乗し  
て清涼院にやどる、今夕大師御廟所拜禮、入定の  
所いどく殊勝なり、雨すさまじくふる、諸家の  
廟所れびたし、此曉普賢行願品一卷よむ此は佛誓  
天性寺よりしてゆきてよむなり生他  
平等三會の結縁むなしがらすとなりあかつきかたかねのな  
りけるに。

像、西行のこけ清水みる  
あはれそのしつくはかりも古の  
人の心をくひよしもかな  
よしの山峯にのこれるしら雲や  
其世の花のかたみなるらん  
祐善にあひて。

ゆめさます其曉のかねの音に

よしの山花みるよりもめつらしと

かはらぬ音をさくそうれしき

ねもふはかりの人みてしかな

此寺を出て南谷舎那院にまうづ、此は鈴木氏か牌  
所なり、檀上にまうづ、大塔はやけてなし、本尊  
五鉢出來たる、金堂廣大なり、孔雀堂多寶塔など  
これあり、西大門二王拜してすくくたる、やたて  
に晝飯くふ、其夜ははし本の豆ふやにやどる、今  
夕藏王權現にまうづ、九日今日も雨ふる、十日吉  
野山巡拜かおにていたる、今夕座王堂のもとにや  
どる、十一日天氣よし、山内巡拜楠正行卿髻塔、  
後醍醐天皇御陵、貞院藏王權現、役行者の御母の

（御母の御母の）

る、念佛院善導像如意を得玉ふ、和州添下郡南郡  
三里に、中の川〇〇寺南郡金額面實範筆寺破壞額は  
り丑寅實範舊跡念佛院の話、十四日天氣よし、上太  
子に詣づ、太子廟入窟七間ばかり陵中に入る御燈  
三點つく殊勝なり御陵山八十間廻り弘法大師の石  
塔を沙字を寫して沙かくのこどく結めぐら  
す、近來此御塔垣くづれたりとて難波珂然法師石  
に三部經をゑりて結ひめぐらす、瑪瑙石の碑銘并  
御廟縁起など珂然の石を建つ、御碑は疑はし、御  
門外下乗二天門太子堂十六歳御像  
御髮を生ふ幼稚の御像もあり  
二重多寶塔三十五歳の御像堂、經藏、本地堂、如  
意輪堂不動大  
意輪堂いさく四天王淨土堂弘法大師百  
日々參の所忠禪上人塔。  
十五日はれ、南都崇徳寺へゆく、駕にてれくられ  
其夜月なし、十六日朝南都名跡拜禮興福寺、春日  
東大寺、法華寺、二月堂感應院、大師指圖堂眉間寺  
舍利元興寺やけあど、今夕雨ふる、十七日崇徳寺よ  
りかおにて西の京をみる、招提寺鑑真和上 はか



居たるに逢ふ、申の刻歸る、廿三日晴、廿四日晴  
廿五日晴、建仁寺堆雲軒を訪ひ榮西國師の御廟所  
を拜禮す、菩提樹を獲たり國師宋朝より持渡られ  
しよしなり、叡山傳教大師の御廟所も此種をわか  
ちしとぞ、此御廟前より獲たりしかば菩提心をさ  
づけ玉ふやうにねもはる、祇園社へ參る在京中の拜禮  
此日きり

みたまひつるよしなれども、何といへる寺にすみ  
たまへるやらん知らずといふ、うれしうも其所は  
えられたり、とかうして、新在家いづくどきさ  
さ、ゆく道に、とある辻堂に觀音菩薩た、せたま  
へり、此に詣でわに口なぞ打て、我たづぬるひじ  
りに逢せたまへかしなぞをがみものせるに、格子  
の戸に縁起めける一紙のものあり、取て見るに其  
御堂の大悲の御ゆるよしをえるるなり、其言葉  
かきさま尋常の人のあみ作れる文にあらず、扱こ  
そ此縁起は此ひじりなぞの作らせればすなるべし  
さらば此あたりにてこそ問ひたづぬべきなれと思  
ひて、其かたはらの枝折、やをらおけて見れば、  
ちがやす、さみだれ生しけりて道もみえず、され  
ど其奥に入るべきほどの菴あれば、ほどくどた  
たき、たれかれはすぞ物申さんと音なひ侍るに、  
内よりすさまじき大聲にて戸た、くは誰ぞといは  
れたるが、耳をつらぬくばかりなりけり、いとれ

### 口阿上人を訪ふ

京にすみけるはど那羅の里に口阿上人とて、世に  
たときひじりましますよし承り侍るが、いかなる  
所にすませたまへりともさくもらしつれど、さる  
人は人もまゝつらんを、いざたづねばやとれもひ  
たちて、十六里ばかりの道、朝より夕までにある  
きてまづ那羅のさどにはつさぬ、こゝにて承はれ  
ば、其人はならのはどりなる新在家と申す所にす

と一聲よびてやがて歸らる、寺の人々は世にれど  
るける顔にて、老人は此とし數十年此寺には來た  
まへりしこともあらぬを、こは珍らしといひつ、  
懇ろにいたはりて其夜はそこにふしぬ、其わけの  
どし二月の末にや、あまりにまはしくて又御菴  
を訪ひ申しぬ、去年の末の秋ちりこみし紅葉も  
其ま、菴のすみに風にまかせて、はきよせたらん  
やうにうづ高くつみたり、めし物は木綿のきたな  
き垢じみたる白衣一つに、くふものは釜の中より  
ねどつひおろたきたらんとれもふ飯をさらくど  
めす、其日もいろく世にめづらしき御物語さ、  
て、其夜は奈良の旅宿がり歸り、あけの日は興福  
寺、大佛殿、春日の御社をはじめ大かた見めぐらし  
侍りて京に歸る、あけのとし冬のところゆくりなく  
此ひじり京にのぼらせればしける時、ふど知恩院  
の門前の澤田と申す書肆にやせらせたまへるよし  
人のつぐるともあらでまらせたるに、ゆきてあひ

をろしくて我は此あたりには口阿上人と申す人やあ  
るまらせたまはくと申もあへず、やあ其口阿とは  
此老僧なり、何の用ありやどのたまへるあまりの  
ことにきもつふれてねづくはひこみて、まづ三  
拜して我は行誠と申すみれんの修行者なるが、大  
名をまたひて訪參むらせたるなり、あはれ御かた  
はらにさしたれたらんに、火たき水くみてな  
りとも仕ふまつらんをどこひ申しけるに、たのれ  
はひさしうひどりすみぬれば、今さら弟子さした  
かんもうるさし、今宵はとくめたければ夜のもの  
もなし、くふべき食もなしなとのたまひつ、さま  
さまのたうとき御物がたりどもかすくさかせた  
まひける、神光禪師の嵩山の達磨大師に瀆したま  
ひけんも思ひ出られ侍りき、日もくれちかきを我  
あないせん、西蓮寺といへる寺は我弟子の末の坊  
なれば、これにてやどりてはや京に歸れとて、杖  
つきて其寺にゆきて庭の口より此坊今宵やどかせ

つきて其寺にゆきて庭の口より此坊今宵やどかせ



申侍りき、後に承れば一日吉野川にてこりとり舟かよふと申どころにゆきぬ、色川母子、つちやて御經卷をも人に取らせやがてやすらかに命終したまへり、今の世には是ほどの隠者もいとまれなるを、幸に三度まで見へ申たるも宿縁にやあるべき、其ころのこといも後に思ひ出て

猿澤の池のまし水それよりも

心の月やすみまざるらん

乙亥十月、紅葉うめはじめたる窓のもとにて沙門行誠齡七句

もりてこそと昔よめりしに似かよひしとて笑ふ、五ツ目の末より兩岸の所々にさまざまの花もさけり、櫻なども色めきたるねはし、めづらしをか

房總日記

十六年といへる四月廿日前九時ばかり芝をたつ、貫光教正貞門法師、某講義、某沙彌隨行す、誓願寺住職は十七日より佐倉へゆきてまてりときこゆ、今日は朝より春雨しめやかにふりていふせくみゆれとよも辭かに寒きこともなければ、大橋の行徳

翠柳紅桃又白櫻 両涯春色送舟行

行人不是思郷客 半弄吟情半醉情

に洒水す、式終りて説法す、無上甚深の文をこうす、名號はとす、今夕は圓遊翁の隠宅に宿る、及川の翁とふらひく、歌などもかきて出す風體もよし、

紅々白々又青々 奇草珍花滿花局 樂水樂山還樂醉 古稀之客古稀亭

廿一日雨やむ、所々よりかきもの申出たるに筆そむ、九時過に此巻を出づ、雲され青空みえわたるうれし、上尾(五)にて晝飯す、此より四里ばかりにて佐倉の城見ゆ、町はづれに講中寺院も待て禮儀あり、是より前薄井印傳と申す所寺院二人待うけず、六時ごろ清光寺に入る、庭に大木の櫻あり、

瓶に櫻、山ぶきをさして出したるを、授戒の本尊に手向け奉るとかきつけてたる

れもふまゝにはびこりぬ、いとめづらかなり、法の會もかをりわたりてなにしあふ

櫻の花を今さかりなる

たゝならぬ御法の花もふる寺の

櫻よりこそ匂ひそむらめ

先に行徳の圓遊翁と申すは篤信の人にて、たとゝしの五重の時もきてやどりかしたる人なり、庭に

床に九十九翁可菴幽清と記したる獅子を畫きたるに詠す、

妙吉祥家知者誰 五臺雲卷石橋危



水晶巖下瑠璃地 遊戯金毛獅子兒

人をしみれはうれしかりけり

桔野の女郎花を、

ちりはてし後に思へはなひきしと

みしも夢野の女郎花かな

田家花、

めて、見る人もあら小田すきかへし

すきかへすまに花やちるらん

廿三日晴、此寺の前々住貞存尋ね來る、昔の書狀もちて三十二年ふりなりしとぞ、今は世になき人とのみ思ひたりしを珍らしうてさまざまのものがたりす、

此世にあらしと思ひし人みれば

さなから夢の心ちこそすれ

といへる歌一首をかきて品々遣はす、今井村のむら親子成田へ參るとて詣できたる、是も思ひかければ、

見なれざる旅寝の床に見なれたる

(五百九十九)

廿四日晴、八時おろさくらを發足す、町はてまで住持檀方數人ねくる、成田新勝寺へ詣づ所々拜禮す、本堂は大こまなり、人多く詣づ、門前の旅宿松田屋にて飯す、此にて貞音小泉等三人むらも千住齋願寺もわかる、芝山の仁王へ參る觀音寺と號す、大なる仁王門あり仁王を安す、此より車をかへて蓮沼へ參る、道二三里ばかりなれども、田間夜に入り大にむつかしかりき、車にゆられたるにや氣分あしく、蓮沼の新島に入り、伊藤十左衛門宅にて休息す、寺よりかま迎ひにこす寺に入りしは十時過なるべし、月、中天に近づきたり、少し寒し、其夜はゆに入りしまゝ臥す、かゆをもくは

(五百九十九)

住職茶を好みて庭に茶室も作られたり、むかしは大地なりしも、一とせ旋風によきやぶられたり

とて、今はかりたらなり、三疊じきの茶室に休息せしむ、いろくの花などをならべてみ所ありけり、

天台宗藥王寺武射郡親島村住職鈴木觀應而誦、八仙女の

齋をねくる、作夕藥王寺住職及ひ同宗光福寺住

職蘆川文融、武野里村池邊榮榮迎ひとして伊藤氏

の宅まで出らる、午後説法一座、書き物數十枚認む

藥王寺觀應阿闍梨贈仙女之圖

蓬萊闕下八仙女、玉蕊背花臨玉泉、

歌舞且休閒我説、長生不死大因縁、

吾大仙人耆闍會、會演淨樂我常幽、

長生不死妙眞訣、不在三山與十洲、

はす沼の里人いとす勝に見え侍るによめる、

濁りなき人の心やはすぬまの

花にはちすと見るへかるらん

今夕藥湯たつ、けふはさまざまの書どもかく、歌

旅路に花を見て

さきのこる花はあれども旅衣

たちとまりても見られさりけり



旅宿に梨の花さけり

ゆきくれてやどをかり寐の軒ちかみ

さひしけにさく妻なしの花

牡丹を見て

みつふたつさきかゝりたるはつか草

はつかに見るもぬにしなるらん

此上總の東金あたりは大かた日蓮宗ばかりにてか

ためたる所にて、世に七里法華と申所なりとぞ、

ひかし領主の日蓮宗に歸依して他宗をみなこぼち

しども申す、かゝるとになりゆくも他宗の人のれ

のづからのれこたりなるにこそあるらめ、此ごろ

は演説と申ことも流行すれば、それらより少しづ

つ眞の佛法説かんはいかにと住持に申侍りしかば

住持もかねてさることも思ひしなり、つとめてな

と申たりき、

あらばれ王へる御像なり、よきとくらし

もささのこりていみしう句ひけるに

此あさけ岸のあらしはよき絶て

残りて匂ふ山さくら花

旅 夢

見なれたる人を見る夜は草枕

むすふ夢ともれもはさりけり

海邊殘花

めつらしき磯山櫻しは風に

からくも世にものこる花かな

廿八日すこし曇る、門中の寺院とも絶えずとひく、

旅宿曉鐘

草枕いかに結ふと人とは、

寝ぬ夜をさますわかつきのかね

山館殘月

さゝなれぬ岸の嵐に夢さめて

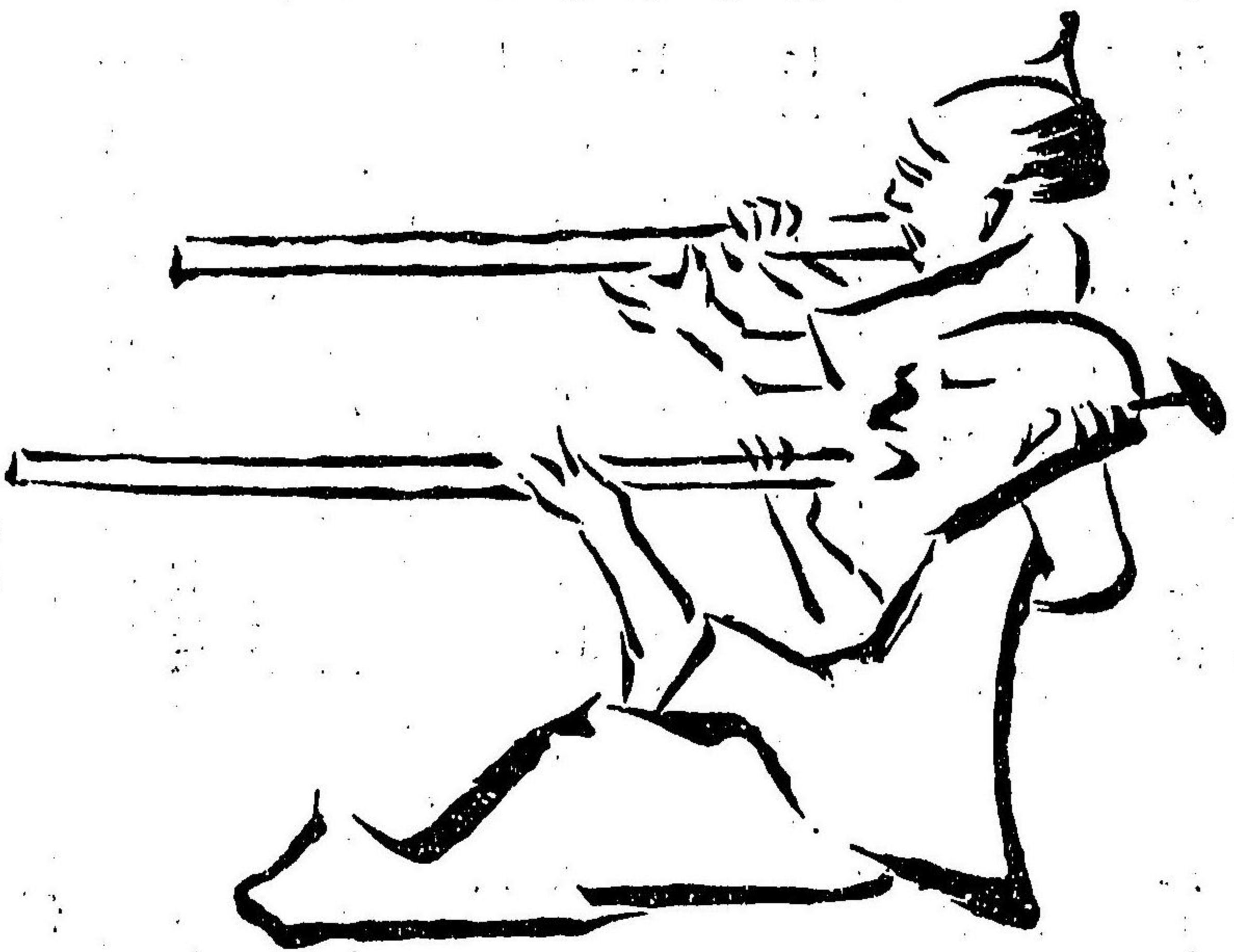
枕にのこるありあけの月

上つふさの國千田稱念寺と申寺の本尊を  
齒吹如來と唱へて、彌陀の打るみて御齒

伊勢の本居の翁の古事記傳の説ことをはじめ、玉  
の緒其餘くささの文をも見るに、よくもく  
むかしのふることをかくまでにしらべ考へたるも  
のかなど、れどろかるゝまでになん有ける、此國  
の古事どもは守屋の亂に大かた焼うせたる以後は  
いさゝか傳へ残りし唯今の古事記どもなるべし、  
されば猶是にてふる事物たれりどもればえずな  
ん、こは我國のみにかぎらず、もろこしの秦火の  
災、天竺にも惡國王ありて佛經などやきたるよし  
傳へたれば、末の世となりては、大かたいづくの  
國も人の心けはしうなりて、さまゝのあどわら  
はるゝなん、れのづからのれもひきなるへき、此  
おろは西洋の人々のいろゝ工夫ともして、さま  
さまのをかしう、れもしろきまわざもなし出た  
るを開化なりとて、上下ともてはやし我れどら  
じとて、さそひものすることの流行する世とはな  
れりけり、其人々のいへるむかしは、人れろかに  
智もたらず、何事も迂遠のこのみなるいと便な  
し、これを野蠻といふ、されば人も其祖は猿にて  
やあらんなど、いひさわぐを實にさることなりと  
て、此合榎うちて古聖普賢をあなづりものいふ輩、  
をちこちにさこたたるは、一わたり理りめかした  
るやうなれど、ものゝもどすゑのわいだめにうと  
しとやいふべからん、そは世の事くはしくえらざ  
るものゝ、今をのみ又なきことにして、れもふまゝ  
に申したるにぞ有なる、西洋に創世記といへる書  
あれども、いとくあはくしきものにて、みる  
にたへず、我國の古事記なぞこそ、やゝふるさま  
まをいさゝか見るべうさるしたれど、是はた燼餘  
の文にて千百の一つにやどればゆ、佛教のみは、  
佛の宿命通くはへられしさまなれば、大よそには  
大古の事もえらるゝなり、是は人間の傳への外な  
れば、たゞ人には疑はるゝなるべし、抑むかしは  
男女のけじめもなく、自他のわかれもあらず、自



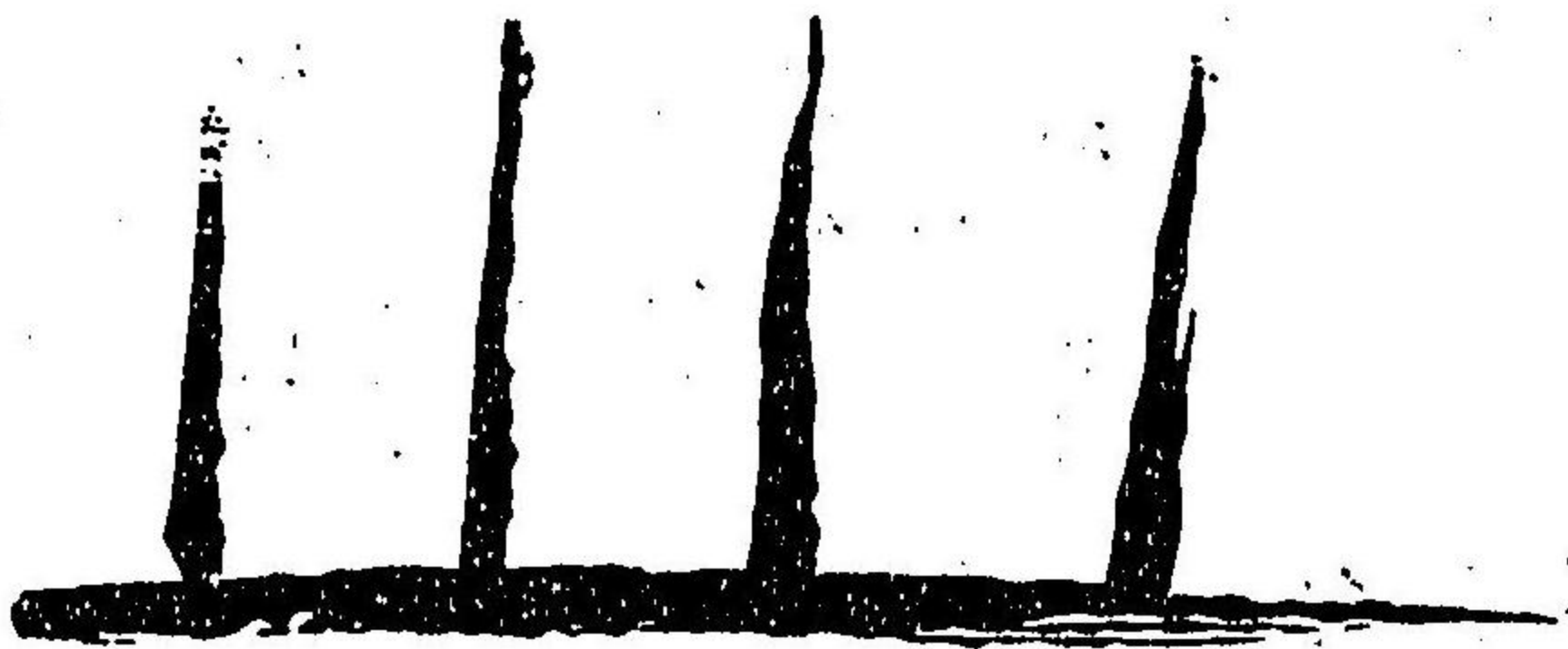
上人自書賛(七)



然の衣ありて、物くはでも、いけるとし長きは光  
 遠天の果報のこりたるなりけり、終にもものくふや  
 うになりて、男女の形わかれたるより、れのづか  
 ら、果報つたなくなりさがりて、草衣穴居なとい  
 へるむかし語も出来にけるならし、末の世になれ  
 るまゝ、事もねはく、わざもしげくなりまざりて  
 けるより、君臣四民などの差別もいできては、自  
 他の執情やむことなくて、いつしか軍陣攻伐など  
 やうの事もねこりて、それが器械なぞねはく出来  
 つるなり、近きころ、としごと此等のもの、各  
 國にいできて、此に戈あれば彼に盾あるやうにな  
 りゆさぬ、此後はいかさまにかあるべき、御經に  
 は取る者皆刀劍となると見えたるは、さるべき事  
 にこう、扱も人のこと葉なども、もと光遠天は言  
 語なき國なり、此に下りては少しく言もわれども、  
 いとくすくなかりけん、ものゝ名などもねはく  
 はなかりしなるべし、耕作の器もなく、舟車臼杵

GENJI

もなしとは易にも見ゆ、此らは  
 ふるめかしき説の残れるなり、  
 されば古はことば少きより、正  
 しさことのみや申たりけん、後  
 世ことばのねはくなれるにつま  
 て、いつしかいひあやまり傳へ  
 たがひて、扱今の世とはなりけ  
 らし、古事記の歌どもはたゞよ  
 みて陀羅尼などやうなり、註釋  
 ありてやうく其よしをるべ  
 く、おなじ人の此國の言葉の、  
 今昔どかはりゆくさまあやしき  
 まてなりけり、中昔の源氏もの



なそろしき地こくの底の鬼とて

これのか吹きたすものさしらすや



がたりなごさへ、註釋の書凡そ二千巻ばかりもや  
 ありつべし、扱も昔の語はたゞしう、うつくしう  
 て今の語はひなびて、いやしげなるぞ、世の末に  
 なりたるさまいはでも其けじめをらるべし、さる  
 を昔は野蠻なりなごいへるは、今をもてむかしを  
 はかるのみ、かへりて野蠻流とやいはれぬべき、  
 心をたいらかにして考へなば、今の世のむかしに  
 くらふればいかに恥かしきことこそ、心のなま



さかしきどもがら、さかしらにひかしをわなづり

旅 柴人もつりするあまも海山も  
見なれぬをのみ見るたひ路かな

未の四月上總の國千田の稱念寺に寓して、いさ  
さかたもふことありて筆はしらす、

題行山願海之語贈晃榮上人

今日夕座説法の後、みなへ名號施さんどて高座の  
前に老若大勢立ちしに、名號わたしつるうち其所  
一間餘方はど板しきぬけて、十人ばかり一度にぬ  
ん下へ落ちたり、みなく驚きこれをたすけ上げ  
たるさま、いかにもいはんやうなし、やがて所を  
かへてはどこし畢りつ、堂内四百人餘なるべし、  
怪我人は一人もなしとぞ、賽錢箱のわどかりそめ  
に張りたるよしなれば大勢にふみぬきしなり、あ  
やうきことなりかし、後々の寺にてもかゝること  
を傳へよと申ける、

行山願海語尤奇、百劫三祇是可期。  
立雪童兒求半偈、出波龍女獻摩尼。  
一杯汲處潮初滅、一篋覆時旣嶮巖。  
鶯嶺法門無別説、願爲苦海渡魚師。  
廿九日朝より少々雨ふる、今日極樂寺和尚、笠森  
寺觀音へ參詣するよし賽錢つかはす、  
御影 供物 田樂一包名物のよし  
昨日天台宗三途臺長福壽寺住持權大講義平林晃榮  
入來、弟子兩人召連十念受度由なり、額面三枚詩  
一律書て遣はす前に見ゆ  
今日當住職弟子の内入弟願出、兩人弟子剃度式一  
人を行進十四歳一人を行嚴十と號す  
三十日朝より曇り、九時おる此寺を發足す、住持

海邊月

月やとるわら磯なみのかけみれば  
ねもひくたけぬ宵々そなき

月やとるわら磯なみのかけみれば  
ねもひくたけぬ宵々そなき

并行進途中まで送る、晝後三時過より雨ふる、五  
時おる姉ヶ崎へ着、同所瑞安寺住職宿屋まで來り  
寺へ請待す、舊藩五十嵐老婆迎て寺へ參る、

二日天氣くもる、九時發足、人々見送る、三里ば  
かりゆきて休息、其家の小女病氣のよしにて三歸  
十念説教少しきかせ遣はす、明日は選擇寺にて施  
餓鬼願ふよし申す、午后木更津選擇寺へ着す、此  
近邊村々みなきれいななり、貧村はすくなきさまな  
り、木更津はよき町なり、此にて三百人ばかり五  
重願ふ、けさは一里ばかりも五六人迎に出づ、  
ば、どもはまろき手ぬぐひをくびにまきて出る、  
田の中四五町はば、ぢゝにてつゞきくくる、町  
町にてもみな出て見る、珍らしげなり、此寺の本  
尊靈佛なり、庭に牡丹ははくさけり、打開きたる  
庭にて見所あり、犬二ツる尾をふりてなづく、  
三日曇り雨になる、檀中門中面會、午前岸東寺へ  
請待法要午后某氏施餓鬼會、兩人へ剃度式授與説  
教一座、  
四日曇風いみしう吹く、ひる前傳法要偈式、ひる  
後剃度式をはりて、夕刻檀方稻次氏へまねかれ誦

見なれてし人をしみれば姉か崎

やとる施子の夢かどを思ふ

ふしかねのみ雪のかけやうつるらん

白くそたてる安房のうらなみ

族孫どもしらすや夢の花見客

山かこやあしはあたまの上になり

本堂の瓦の鬼の目に涙

こはすれば、のこゝろかあゆし

打まかす苗代水に聲立て

所得かほになく蛙かな

四月一日晴、晝後參詣人へ剃髮式を授く、説教名  
號はどこす、今日はふるき人々大勢入來、夕刻ま  
ではなしなぞす、面々へ目録なぞ遣はす、當時み  
な窮迫し侍る者なればなり、

後剃度式をはりて、夕刻檀方稻次氏へまねかれ誦



經非時有之、十時歸る、五日朝より雨、弘法大師筆不動尊を寫す、金五圓此寺の修覆料として遣はす、今日發足すべきところ雨中につき、梁師、富津大乘寺へ先驅し、餘はみなく逗留、晝後説教剃度式等あり、夕刻雨やひ入浴、葛蒲湯なり、

詠牡丹。(二首)

沈香亭北草芊芊。萬里橋邊落日懸。

唯有斯花真富貴。至今千歲保輝妍。』

魏紫蜀紅何比類。天香自染舊袿裳。

栽培未聽祇園發。元是沈香亭北花。

六日好晴九時發足周准郡富津大乘寺へ參入、途中送り百人ばかり。迎の者所々待うけ濱傳ひ田道山村等うち過ぎ、富津の町入口寺門これあり、門前溺死五十三人の墳、コレヲ病死者石塔等これあり本堂左右梁上千躰佛座鋪むき奇麗、即其外新規建設す、住持よく勤行するよしなり、

木更津をたつ時かきれく、

發足の時刻れくる、牡丹かな

住持隱居其外門中三四名富津まで送る、木更津より此まで四里餘りのよし、途中農家より土瓶茶出す、名號やる、大勢なり、

此日、午後近村眞言宗住持六人來訪、

密家各寺へかきてやる

信爲能入

まことある心にきけは入相の

かねの音にも驚かるへき

待 曉

高野山たかくものれほど、さす

其曉をまつ人のため

玉 川

玉川のなかれにやとる月見れば

いまも昔の姿なりけり

八 葉

高野山やまにはあらて運葉の

花さかのほるけふのうれしさ

無 礙

ねのつから松の嵐やはらふらひ

月にさらぬ峰のうき雲

發善提心

埋火のきゆるはかきもねこさなひ

ねこしかたきはほたい心かな

今日説教一座、

七日晴、八日晴、晝前放生會溺死者回向、晝後一切經供養附一座、一切經演説、一同へ御經をいた、かせ畢る四時なり、剃度三百人、五重四百人、金十圓一切經購求の扶助として遣之、

春夕聞鐘

けふもまた霞のよりにき、すてつ

春の野寺の入相のかね

山吹隨水

ゆく春もちる山吹もどくめあへす

かひなきものや井出の柵

猴猿捉月

かけそとも思ひよらざる涙の上の

月どり〜にまどふよの中

九日、よべより空少しくもる、けささき雨ふる、

九時ころ發足道のはど雨や、まされり、天羽郡佐

實阿部郡駿河守領地一万六千石、花香谷村の勝隆に著す、十一時雨

ゆゑ鹿野山參詣延引にて此寺に止宿のつもりにな

り、此寺四面岡山にて竹林あり、庭に麥の穂出た

る畑もあり、小野寺なりせばけれどもとりしき

り坐所を設く、小手まり花、赤さつゝ多し、

こさうすきわかみどりして見わたせば

翁さひたる山のはもなし

午後雨はれたり、參詣人大勢來る、勝隆寺は慶長年中、松平出雲守勝隆本醫院院主、寛文六年二月三日没年七十七と申人の開基なるよし、其後阿部家の寺となる、



村しくればれての後もふる寺の

ふることさけは袖はぬれけり

萬代はまたほと遠し我法は

けふそさかりにひろむへき時

右書て住職にやる、

十一時過湊村天神山湊濟寺に着午飯、花香谷村の送り十餘人、いせの濱と申所にて、

いせといふ濱のはま萩折しきて

おはの海いつる月みつるかな

けふはひねもす雨ふりて道ぬかる、みなわらぐつはきてまくり手にてゆく、かごもゆれかちなるわ

びし、くるし、川の所の向にあまた人なたり、道

者なと渡しにまつにかとれもひたりしに、みな迎

の人ども三四十人ばかりなるべし、真言宗華藏院

住持、川ばたまで迎に出る、あすなん詣でんとて

手札わたす、七條かけ加法のさまなり、こなたは

雨したくなければ毛ものかぶりなとて、何とも

名つけんやうなし、世に恥かまじきことにあゐる。

夜も猶小雨ふる、旅ねの床眠りがたうてねきて茶

などのみたれば、ますくねられず、みやこの友

垣たれかれのこと思ひ出られたるよ、さすがに旅

人の心はまぬかれがたしや、筆とりて歌なきかき

けれど、くたぶれてければ、やがてする人の面か

たどもみたりよたりかきてみれば、世に似ざれば

これもやめたり、あもかきたきものなり、むかし

筆取らざりしを今はくやしうなん、

大文字と申人の山路菊「我親に見せばやつどにか

さしもて思ふ山路のさくの一木」かへし、

千代までと我たらちねのためにこる

薪にそへし菊の初花

真言宗二軒尋問せらる、面會す、

飯田傳治といへる人、むかし十二と申すとしより

東京湯島の山がやに奉仕して、廿と申すに此に歸

りて呉服の商方して、よにゆるらかにすめるも、

ひとへにむかしの主人家のあつさめぐみなるから、さる心の歌一首給へと申しさこゆ、いと殊勝にねばへてよめる、

いにしへをしのふか岡の櫻花

みしよは今もわすれかねつ、

十二日はれたれば濱見物に出る、某家にて茶のむ舟を出して十二天の山へ上る、氣しきよく、ふじは

のくど見ゆ、あにうつす、晝後、五年前まで東

京大坂町根本治助方にむたりし竹か岡の人角之助

其節は久米次郎と申者(廿三歳)尋ね来る、其母にも

あふ、十念授け名號やる、翌日舟に乗りて金谷ま

で送る、

十三日曇りたれども、ねだやかなり、松翁院檀頭

岩野氏より大船出して八反の帆をかけ、金谷へむ

けのり出る、波静かに風もなし、船中法語した、

ひるほごに、三里の海上金谷につく、浦の見わた

し寺あり、本覺寺といふ、住持は東京下谷の榮正

寺兼務にて留守のよし、留守居へ遣はし物あり、

同檀方の内渡邊孫八といへる漁家あり、今朝網に

かゝりし刺銘石一個献るよしなり、石上に枝立つ

こと十四五莖、各小枝を生じさながら珊瑚の如し

海神の供養にやなせいふ、其報せよとてこれを収

む、岩野氏世話して東京へ送るよし申出る、寺の

右に入幡宮左の高所に淺間の社あり、皆ゆきて拜

す、浦のあま多く出て掃除なせまかなふ、夕刻説

法名號施す、剃度二十人ばかりあり、當村華藏院

權訓導黒川圓隨うかゝひとして入來、巻きもの遣

はす、金谷の浦人漁業の御歌給へと申けるかきて

やる、

浦人を救はんとのすさひかな

南無あみた魚の昔語りも

十四日雨はやみたれど猶くもれり、道なごあしか

らんを、けふは御どう留にもやど人々申す、けふ

は舊の四月八日にて御たん生會なり、甘茶なども



のす、本堂に小燈もらはやくきたれりといふ、よき  
夫氣につき梁師は先に發足す、浦へ出る岩野氏案  
内其弟の宿へ立よる、菓子等出す、よき宿なり、  
家内に十念授け名號やる、保田より迎僧兩人來る  
午時なり、

り雨ふる、田路をへて久枝村蓮臺寺へ着す、明定  
院の法類なり、丁寧に奉事す(遷出以來の馳走)よき寺  
なり、藥師秘佛一鉢あり、五分ばかり惠心の作か  
縁起わからず。

十五日朝晴、金谷發足、れくり十餘人、總房國界

十六日朝晴、晝後曇る、參詣あり説教一座剃度貳  
百餘人、

にてわかる、者は岩野氏なり(名號船取共に)餘は

十七日少し曇り、蓮臺寺發足、八時おるより雨ふ  
り出づ、つよからず、午後平郡多田莊船形村光勝

みな送る、保田岩戸の觀音行基大士の作などにも

山西行寺に着す、此寺は慧心僧都の開基にて西行

やとればゆ、御丈は一尺餘り古像なり、岩をくり

法師所任の由緒ありといふ、今日開帳の寺

わけ籠とす、老婆とも六七人通夜なしたるなり、是

平郡金山村興禪寺濟門行基作 同郡青木村真

より羅漢山嶮しき所なり、此山中にも、亦觀音堂

勝寺眞言宗海中出現と云、

あり、是は五尺ばかりの古像なり、日本寺の本堂

此邊の寺々觀音の像數を見るに大かた名作なり、

修復中なり、本房にて齋食す、金谷より辨當まは

當西行寺にも小像あり、蓮臺寺にも名像あり、拜

る、此にて金谷の送りにわかる、山中所々巡拜、

禮寺にも並ばせ玉へるなほし、竹か岡には三十三

大佛尊は御首を損してをかめず、保田の町にて別

跡を別所に安置す、四時船形山觀音參詣、此寺大

願院といふ寺による、加知山村淨蓮寺に毘沙門の

地なり大福寺(慈覺大師の草創)といふ、眞言宗(新義)下より

開帳あり、又濟門長谷寺に觀音開帳あり、此あた

一百七十段ばかりをのほりて、大巖石ははひたる  
やうなるに御像系り出づるなり、行基の作といふ、  
ことしまで一千一百六十七年なり、堂は瓦ぶきに  
て五間ばかり、三方赤きらんかんのえんあり、滄海  
を見渡す、不動尊等種々あり、西の方に諏訪の社  
あり、土屋の頼かく、今日は大漁ありとて濱にゆ  
く、いはし多く沙の上にはせり、塵し、多かた歸  
る、沖に島見ゆ、鏡かしま、沖のしま、鷹のしま、  
手にとりて見るはかりなるわさもこか

北條村を経て大綱大巖寺に着、此寺は靈巖上人開  
基の名地、浴室新規、此寺の住職は廿年前深川に  
て大存と兩名にて論注講釋を願ひし者なり、其こ  
ろ月のみさきに夜行して歌をいた、けりとして、昔  
語りあり、絶てわすれたるかさらは昔なじみなり  
とて笑ひけり、寺に願義の古判木あり、靈巖上人  
の直筆と申傳ふ、四枚すりの板一枚ばかりありと  
いふ、二枚すりもまじれり、めづらしきものなり  
一枚すらせてもたらず、

鏡の島はなとくもるらん

けふは野へあすは山邊と浮雲の

なみの上にたかくうみゆる鷹のしま

行へもしらぬ旅衣かな

我さなれし名にもあるかな

旅衣きてみるべくもしらざりき

十八日曉天寺を出で、那古の觀音參詣、眞言宗に  
て大地なり、本堂は、十間ばかり諸堂多し、本尊  
何れも多作也、金臺寺にて中食、蓮臺寺の檀方小  
澤仲右衛門宮澤清兵衛兩人追かけ來る、書さもの  
願なり、三時説教名號施し出立、途十三町ばかり、

波の上なる安房の遠山  
遠くも我はさつるものかな  
ゆきくらしあまのたまの草枕  
濡す斗りに浪の音する



草枕つゆにちぎりむすふ夜は

月を今宵の合宿りなる

寶松院へ

まつひどにはつ音きかせよ吐鵬

旅ねの床は鳴かぬ勝れり

明定院へ

きくなれぬみねの嵐に夢さめて

枕にのこる有明のつき

廿一日好天氣並前かきもの

「浮陀羅久山觀自在大菩薩三十三所拜禮の言

葉」と申を冠にねきて、三十三首の歌讀て結

縁の爲めに奉る(四季、神祇、傳、

大教正行誠

春

ふかくしもけさは露のたち籠つ

沖の小島も見へぬ斗りに

たちかへる春の印をうぐひすの

初音にころは今朝は知らるれ

らきにたもたへぬ袂を春かせの

吹けばわやかに散る櫻哉

くもや花はなや雲かどみ吉野の

峯も麓もはるは分れす

夏

せを淵にかはるあすかの川波に

うつるを見れば今日は卯の花

ひかし誰かすみつる宿そたひ衣

花橘の香にそまみつる

くちまざる賤か垣根も珍らしく

匂ひ初めたる夕顔の花

わき出る岩もど清水おとせすは

むすはて過ぎむ旅の衣手

秋

むしのねもまた初秋のすゝき原

亂るゝ迄は聞えざりけり

のりみや安く渡る浦人

さはべなす神はあり共世を守る

神の力に豈しかめやも

むかしたか植し櫻そはることに

ふりては見えぬ古の玉垣

しも白くれくかど見れば有明の

影残りたる月よみの宮

釋教

ふたらくの岸打波を安房の海の

なこの浦邊に今日さける哉

さくら花匂ふ吉野のやまなから

我御はどけに奉らなん

むつの道今はたどらじ一すちに

西へと急ぐ我にしわれは

まはしどて影は見ぬても濁江に

濁りもはてぬ花迷かな

戀

まみて身にねはゆるものは旅衣

秋風吹て露のわくなる

さらぬたに結ひかねたるくさ枕

そをねて聞と小鹿鳴らん

いつしかど秋も末野になるこ繩

又引き替て音を淋しき

冬

たまさかに残る紅葉を木枯の

誘ひねはせる冬の山里

いはやすく夢も結はゝ結びつる

氷の床や池のをしかも

はのゝとねく霜白く見えつるは

氷れる月の影にぞ有ける

さしてゆく方もあらしを一年の

今宵斗りと急くなるらむ

神祇

つりはりを龍の都にもどめたる



よひのまと言しを人や忘れけん

さぬくならぬ鳥の鳴也

はてしなき戀に身をや盡し舟

こかるとしもは人はしらしを

いつれの世何れの人かいひ出て

戀といふこと教へ初けん

れいの音鐘の響きもさかぬ

耳を戀にや潰れたるらむ

無常

いのちをばのふと云てふ樂さへ

なのみ残れる世にそ有けれ

のちの世を願ふ人こそ悟るらめ

千代も八ちよも定めなき世と

この身さへ有てつましき習とは

亡なる人を見ても知らなん

どに角に定めなき世に生れきて

千代と祈ぞ恐なりけり

祝

はてしらくとこよの山に巢立つ、

往きはて歸る和歌の浦鶴

大巖寺觀牛牛音

從作草細穿鼻身。犁耕難脱幾多春。

對君適憶前生事。我亦掌纏金紫人。

里眺望

くれ竹の伏見の里にみわたせば

霞にわかす八幡やま崎

廿二日朝より小雨ふる、晝後大巖寺發足和尚世話

人いとま乞、平郡海老敷村正林寺に着、田畠の間

に驟雨あり、風もあり、此寺にて廿四日まで授戒

式あり、小寺なり普請よく出来、一切道具とも新

調のよし、庭なども少し出来、山中にて不自由なり

正林にて善導大師の一千二百年行しに

唐土の山のわたの夕日かけ

千とせの後もさす光かな

廿三日晴、朝看經、

ゑひしきの里を寂しき山畑の

麥のは末に月さしのほる

廿四日晴、午前授戒一百餘人、度者三十人、午後

せかき、善導大師一千二百年忌供養回向畢、

古寺の浴室す、し夏木立

水仙や保田の羅漢の花供養

旅硯今宵の題は隔戀

富山にて

犬たてや伏ひめのあと思ひ出し

廿五日快晴、今日は左の寺へ參詣、前日大巖寺より

り申入置、

本織村延命寺 長谷大棟

右里見代々の寺とて樓門經藏本堂庫裏盛大なり、

衆僧送迎懇懃なり、餅を出す、本尊虚空藏觀音開

帳あり作者不知靈屋は開山堂なり、彩色あり、里見代々

の像六七体衣冠の像なり、寶物里見の鎗、細身二

尺五寸ばかり、裏にひあり、こみは一尺六七寸、

銘あれどもよめず、古法眼の廿四孝彩色畫帖、

四時前大巖寺に歸る、かみそる、休息にて三輪明

神に詣づ、此邊皆石山なり、洞口所々にあり、今

日五惡段一卷授終、

竹外斜陽赤。半窗松嶺親。

授書終一卷。不似客中人。

廿六日曇、少さむし、大戸村大回寺に至る、授戒

あり、明教新誌一千五百三號明治十六年五月十八

日の誌に、續日本高僧傳作者、大講義竺道契和尚

の傳を出す見るべし、美作愛染寺沙門照南撰は此

人の弟子なり、師字は天靈飯瓦は別號、備後安那

郡神邊村の人姓は黒瀬氏、明治九年七月廿二日を

以て寂す、齡六十一、著、般若心經一滴讚、密宗

祖影贊、保國篇、同續、關邪大義あり、右の人は

早く故舜統上人より傳聞したり、僧傳の篇述は是

非なければならぬものゆゑ、己れもいろくの傳



記數十部を集め、兼て心がけたりしを、此人にして果して此舉ありしを竊に賛美して、予が筆記も少々なりとも贈りてんなど思ひしかども、既にかく物にまぎれてさることも得果さでありしぞいと残りねはき、願はくは賛成して此十二卷なりとも上木させまはしうなんねぼゆ、今日此傳を讀て頗る懷舊にたへず、

癸未五月寓房州大戸大圓寺植木復軒

寄詩乃和韵

鐵錫草鞋已兩旬。雲烟堆裏謝紅塵。  
寒村叩鉢朝求食。古渡無人夜駭神。  
愧對總房山水美。未能詩句詠吟頻。  
適聞玉韻金聲響。明鏡浦邊知有隣。

書晴耕雨讀四字示植木復軒

出養田園入養親。紅花翠柳幸爲隣。  
未知官海波瀾嶮。閑屬晴耕雨讀人。  
今夕植木氏にやどる、とは供入浴、この宅地柏多

し、前山白旗山といふ、今日終日雨、ことに風つよし、夜に入はれ、  
廿八日晴風つよし入浴、朝物かき遣はす十一時過寺に歸る、

田家

人入養皇以上班。地隣孤竹探薇山。  
五風十雨固無怪。擊壤歌存田圃間。  
堯圃舜田山下阿。老翁何事笑呵呵。  
城中絲竹春如涌。未聽一聲擊壤歌。  
廿九日快晴、大圓寺發足、道中二里、此間觀音菩薩開帳二ヶ所、青柳村長泉寺に着、説教一席名號はぞこす、出野尾村小網寺三十二番行基菩薩作、此にて東京豊島町老婆にあふ岡田屋はさわり、

雨のふるに

旅ねするかやの軒はの雨の音は

つねにさくよりさひしかりけり

登大莊嚴寺大悲閣

(六百七)

(六百七)

あらしをなみの音にゆつりて

なみの音にねのか嵐やゆつりけん

静かに千代をまつのもど

房海之濱夕日輝。適看松樹十餘圍。

鐵鱗不動醉龍臥。抱石横崖伏虎威。

三日晴、八時過發足、送り百人ばかり、夕五時磯

村森巖寺着、寺の庭すぐに荒磯なり、

四日石火堂觀音開帳に付拜禮、名號施し鱒魚三百

ひさばかり放生會、

座しさの罌麥を見て

塵の世のちりもすねしと御佛の

ねはしたたてたるなてしこの花

五日晴、

鴈

かりのよそかりの宿りそかりの身を

とばかり鴈の鳴きわたるらん

山園三密寺。松響五智聲。

曳錫初瞻仰。千光照衆生。

今日授戒并剃度式、此寺深廣山長泉寺從來院名無之につき無涯院と額書さて遣はす、

三十日天氣よし、長泉寺を發足す、十時安房郡笠

名村安樂寺着、蘇鐵多くある家を見たり、

三十一日晴、午前授戒午後發足館山三福寺着、二

百人餘紅白旗立て迎に出づ、樓ありよき寺なり

旅夢

打どけてねられぬものを草枕

何結ふらんふる里のゆめ

あふとしも見しは夢にてあはの海の

波の浮艇の有明の月

六月一日曇、説教、

二日晴、午前授戒、午後法要、

汐見松

静かにも千歳をしもやまつならん



ちらぬ里かけかたふかぬ山のはに

月と花とをまかせたらなむ

西にのみ心ひかれん幾よくに

めぐりあひたる法の小車

六の道引なかへしそたまさかに

めぐり合たる法の小車

夢昔

ふたゝひは見えぬ習の昔をも

又みせつるはゆめにそ有ける

旅夜

なみの音に打さまされし後も猶

ゆめかと思ふ磯枕かな

海上月

さし出るあまのつり舟かけみよと

又さし出るなみの上の月

六日終日雨ふる、授戒式、剃度式あり、

七日曇、安房郡須賀村秋山源兵衛宅へ一宿、願に

因て隨行五人、右秋山從來信者にて、慶應元年八月房州路廿四所観音開帳につき接待所を設け施行明治三年及び十六年又接待施行す、

八日九時出立、車にて館山へねもむく、旗たてねくる、

降魔相を咏す

こりすまにうちばよせても岩か根に

れのれくだけて歸る白なみ

秋山氏の家にやせりて

やどれるはひと夜なれども吳竹の

ひとよにはあらぬ契なるへし

卯花

おもしろくさくを見るまにちりぬるを

あなうの花と人やいふらん

細者曰、上人、館山に登り玉ひし時の詩あり左に録す。

金環鳴絶頂。合掌似前身。香散花千

片。燈殘月一輪。虎巖疑長嘯。龍松

(六十一)

黒鐵鱗。靈山高萬仞。踏雲再拜真。

九日十二時館山より汽船に乗りて六時東京に歸る

海上浪風しづかにて、いとれかし、かねてはらそ

こねたれば、酔もするやと、さのふよりものくは

でけれど、さしてはしどもれもはず、よこ濱にち

かくなるをさきて、初てすし二つくふ、

しはしとてとまりもあらぬなみの上の

船やうき身のたくひなるらし

(六十二)

廿一日栃木縣下の町なる善野氏と申にやどる、此

やどにて、廿九日までとどまる、近龍寺と申に授戒

式行はるればなり、此やどは驛中にての藏家にて、

茶室二ヶ所までつくれり、主にはとゞきすはなさ

つるかど問ひしに、此里にはさる鳥はなかずと申

に、

さくなれし郭公さへ音せざる

旅寐わひしき夕暮のそら

其家のうらに巴波川といへる一すしの川流る、月

をうつまきて流る、川の月のかけ

末いかならむ波にやどれる

また旅もはじめなれば、其日そこをたつ、みなく

涙なぞれどすにれのれも

七月一日、雨ふりたれど、今日はとて日光山にの

ぼる、神宮の御莊殿ともさくしにまざり、目れど

ろくばかりなり、祠官案内、御殿中央に坐設けて、

東行日記

六月廿日東京發足の後、あの日は晝後雨ふりて竹の塚と申所は、車の輪七八寸もうつもれて、車やりかね侍りき、されは道はかきらで、幸手と申所のあやしき宿りにとどまる、

ふるさとの戀しとまてはあらねども

旅寝となればものそわひしき



此にて念誦す、御廟をも案内してねがます、二百級ばかりのぼりて、御門拜殿とも御本殿にねどらず、御廟は鐵門鐵碑ありて目もあやにみゆ、其の日は雨まどいつよくて、うらみがたき、かんまんの淵だけはまひてゆく、瀧いとめづらし、されど山けはしうて、老人には困じはてたり、やゝ、のぼりて高きより岸にいたるに、瀧はるかに見ゆ、從者のいへる、此れよりさきは路もあらねば、こゝにてとゞまらせ玉へかし、たのれらは岩根つたひて、うら見に參るべしといひすて、ゆく、やがて瀧のうらへにゆきかへりするを見る、かれがゆく所、ゆかれぬ所はあらじとど、れもひたしてひとりくんだりみるに、石うぶさ泥なめらかにして、いくたびかたよるべうもればゆるを、つとめて瀧のうしろに出ぬ、づさら、ほめたへたり、たきは十丈ばかり、かしろの上よりれとしてしつくはわりもどにしたる、勢は龍のくだりのむがごとく、音



(四百十二)

上人自畫贊(八)

はひわたる真葛藤原ふみわけて

うらみか瀧をみるもめつらし

夜、螢とびたるを見て、

とひわたる螢めつらし玉くしけ

みつよつふたら山すげのはし

山すげのはしは朱ぬりにて、たゞ人はわたさぬ御はしなり、下は谷川すさまじう音して岩ほの上に、石のはしらたてたり、開山勝道上人塵沙大王の手中の靈蛇ふたすぢをなげて、此はしどなしてはじめて渡らせ玉ひし古跡となん、満願寺にて弘法大師の銅版の中興縁起を見る、石本一冊をみやげにとて出さる、此碑もと中禪寺にありしを、神佛引わけ玉へるころ、石よりぬきてもてねろしけるなり、あつさは三分ばかりなるべし、長さは五尺ばかりなるべし、

二日雨ふる、三時ごろうつの宮につく(此所に授法ありあど)清嚴寺にとまる、此寺むかしは大寺なりし

酒はもくめもつきのものなれど

かれ金山と相たんたしろ





を兵火にて本堂ともみなやかる、今は再建中なり  
同寺の隠居の室あり、風雅につくりたるに宿る、  
鑑真開眼の薬師のかけ佛をみる、中尊寺などの芥  
本にやればゆる、田うちいねうゆる所を、  
ひこはしのあふといふなる今宵たに

大かたのやとはとさして田のくろに

ひるかれひせぬ村里そなき

此所の郡長某の、物かきてよと乞はれしにかきて

やる、別記にしるす、

五日雨、今夕喜連川にとまる、

六日晴、那須野の原を經、其夜は蘆野と申所にや  
ゆる、

ゆきくれてなすの、原の草枕

結ふとすれば狐なくなり

此までを下野の國といふ、今日は坂道ねほし、廿  
三坂ありといふ、或處に力併としるしたる店によ  
りもちくふ、一昨夜よりはらわしくてけさもくは  
す、ひるはやき飯二ツくふ、されははらすこしへ

白川の驛はよき所なり、城はすべてこはして石垣  
は櫻田あたりの様にそひえたり、此邊兵火にやか  
れしとて、家どもみなわたらし、戦死者の墳所々  
にたつ、ことしは十三年なりとて塔婆もたてた  
り、いとわはれなり、矢立かい出して題す  
丈石屹然戦士墳。 舊苔緑々草芸々。  
店頭欲問當年事。 古木鴉鳴落日曛。  
安達郡とて此邊を安達原と唱へ、黒塚のわともあ

(CASHIHO)

りと、

みちのくのあたちか原にきてみれど

人には鬼もなき世なりけり

二本松の里にて、此處は縁とるわさ家々につとめ  
ていそがはしげなり、

わきて此里人みればたかやども

こかひいと取いとまなけなる

二本松の善性寺にて中食、此にて桑折の無能寺の  
和上出迎はる、夕刻福嶋の驛をすきて上飯坂村の  
温泉にゆく、道に雨ふる、今夕は飯坂の堀江氏の  
宅にてやゆる、温泉は氣しき箱根に及ばず

九日晴、終日入浴

櫻上眺望

連山凸凹唯青緑。 溪水潺湲澗崕峒。

淡々濃々雲斷續。 眼中殆對画屏風。

此温泉村をさること半里ばかり、瑠璃光山醫王寺

といへる寺あり、佐藤家一族の古墳あり、嗣信、  
忠信の墓もあり、近き所に其城山もありとぞ、辨  
慶の笈も、筆跡の古經もありとぞ、其れは見す、  
堂前の櫻木の下に翁の碑あり、  
十日晴、今日直心の甥の女、機嫌伺とて入來す、  
珍らし、短冊かきて老父にやる、午後發足一里半  
にて無能寺に着す、此寺は無能上人の開基にて、  
大庭にはあらねど、奥羽に聞ゆる清淨地なり、此  
寺につくころ、東西内役寮の手紙つく、郡司平六、  
伴兵助兩戒名あり、此寺にて見るもふしぎなれば、  
やがて和上にたのみて回向す、而靈此にきて待ら  
けしたる心地す、群參の念佛よき追善なりけり、  
今夕一泊、

十一日晴、群參また本堂にあまる、説教歸路の授  
戒を約す、

十二日晴、今日發足す、暑氣つよし、初めて單物  
をさる、五六里行て白石驛當信寺 無住檀家の請に



よりて今夕此にやせる、きたなき寺にてせばさ坐しきとも也、坐敷は古つか原にて草いとしげし、見るもいふせし、此夕此古つかの亡者どものため

に施食して供養す、

草しけさふるつか原の草枕

結ひにけるも契なるらし  
雷なる、此はどり不信心のもともねはかるべく

みゆ、或人にかきてやる、

此世のみよとなれもひそ後の世も

その後の世もねなし世なるそ

此白石の驛に志賀團七の墓、百姓興茂作の墓もありと云、

十三日、六時發足仙臺にゆく、途中まし田の里と申所に、菊池氏といへる家に圓蓋松あり、すきし頃御巡幸の砌、御駐登にて衣笠の松と申名つきたりとぞ、

さね笠にさなから似たるみどりこそ

御幸をまつの心なるらめ

かくよみてたくる、薄茶菓子など出して十念うけてわかる、仙臺より三里前ばかりに、善導寺門中檀那のものとも上下清服にてまち請、晝食せしむ、善導寺に入は凡そ四時おろなるべし、蚊ねはし、

床の間に少將綱宗朝臣の維摩の像あり、此寺は仙臺の第二代の唐あり、むかしは七十石の寺領あり、

十四日朝雨、今日本願寺代理月地重誓訪來、吐龍齋古山訪問、今朝布薩獨勤之、

十五日晴、今日令公邸へ尋問、公園地城山等一見

みやきのやめくみの露やしけからん

昔も雨にまされりとさく

他日令公へ一見せしめよとて月地へわたす、

さくやきのはし、名取川、あふくま川、白川の關、

これらはしたしくゆきてもみねば歌もなし、

十六日、授戒、東京へ書狀出す、

十七日晴、五重式有、今日監獄署官員水野重教入

來、(此人以金澤八郎次男)明日監獄來訪說教依頼懇勸に頼置

ためなり、松島瑞巖寺入來、鼻紙一束持參、松島入來候得者寺に逗留あられたきよしなり、齋食供してわかる、

十八日晴、監獄署へ出頭す、官員たち門外まで送迎の禮いとねんおろなり、高樓にて菓子二種氷水なぞいだし、案内して囚獄總開所へゆく、高座か

ざりて男女坐をわかれてただやかに聽聞す、あはれなるさまなり、金三川布施物として出す、其夕刻水野氏挨拶として來る、今日月地重誓も來りて

聽聞す、夕こく大町鈴木氏の宅にて供養、

十九日、今日土用入、晴、あさの内、寺のうらに光照寺とて日蓮宗の寺あり、夫のかは原に政岡のはかありとさきて、露をわけて四五町尋ねゆく、

今は神道祭にて鳥居たつ、三澤初子墓と銘せる石の玉かさ結まはして嚴重にみゆ、前に燈籠二基あり、十時のころ此寺を立てつゝ、じが岡をすぐ、こし、

こはむかしの春望行樂の地にて、幾里ともなきみやぎの、原を見わたし、櫻の大木、もみぢなどあまた植られたり、春はいかばかりかをかしかるべき、夫より五里ばかりにして壺がまの浦にいづ、雲上寺と申寺にゆく、說教并剃髮式ともあり、夕こく壺がまの社に詣づ、表の石壇は三百餘といへる、うら手はなだらかにて此よりゆく、本社は二神(志波彦神)合殿、別殿としてしほがまの社を安ず、拜殿本殿古風森嚴なり、内本殿の階下に牝牡の鹿を作る、尤古作なり、頸に瓔珞をかけたたり、本殿にもこれあり、また獅子もあり同作なるべし、泉三郎親衛献納の銅燈あり、銘あり仙臺政千代の献燈もあり、大なるたら葉樹あり、祠官案内す、山下に勝面樓と云へる亭あり、もとは眞言宗の寺なり、維新のはじめ寺を廢して旅亭となせしと云へり、をしきことなり、松島の眺望よし、此夕月よ



あまかたくすくもの烟夜は消て

月にくまなき塩かまの浦

其夜は雲上寺に一泊す、

旅寐よりたひねかさぬる草枕

ひすふか上にひすふ露かな

此里何となくゆたかなるさま也、よき家ども、み

廿日よく晴たり、舟にて塩かまの浦をいづ、塩か  
ま人大勢ねくりて酒など舟に用意してあり、島根  
にて人々くみかはす、かきてやる、

塩かまのかまどの烟にきはひて

うらさむしくはたぬ浦風

こゝにて人々わかる、仙臺の鈴木の老母も此にて  
わかる、仙臺一人ねくりて島々の間をめぐりゆ  
く、半ごろ夕だちす、またあるしまかげにて雨を  
やむ、

しまか根の松の嵐に夕たちの

音をのこしてふるしづくかな

やがてはれて松島の瑞巖寺の表の湊につく(海上三  
里中は

なり)島々の左右背其趣をことにして、絶景いは  
んかたなし、瑞巖寺にいたる、大門より本堂まで  
二十丁ばかり、山かはに杉の並木各大木なり、も  
とは此両かはに末院十三軒ありとぞ、金山岩山に  
て書院の庭さき三丈ばかりの岩ほそばだちてめづ  
らし、此寺に伊達政宗の像あり、甲冑の像なり、  
いけるがごとし、此寺の莊嚴全美を盡したり、光  
堂は秀衡の建立と聞けど、それよりも一層入念せ  
られたるが如し、後に光堂を見てねもへらく、さ  
らしにまさるは松しまの寺、さしに及ばざるは  
中尊寺なりと申侍りき、此陸つゞきのしまにをし  
まど名つくる所あり、むかし見佛上人と申が法華  
六萬部を讀誦したまひしとなん、龍天鬼神の給仕  
もありしとぞ、後鳥羽のみかどよりも勅使くださ  
れ、かまぐらの二位の尼御前よりも文はせありて

(四百十七)

(今瑞巖寺)舍利をねくられたることども申傳ふ、廿  
一日の朝さりのまぎれみんとて、源法寺其餘の僧  
ども具して此にゆく、はし(はし)ありてわたる、小堂  
あり、さか佛を安す(こはれさせ)見佛の堂もありて  
けれと今はなし、明の寧一山の雲居禪師の碑あり  
(後にすりて使僧して石の  
まきの寺にもたせてこす)

まさかへす御法の聲や今も猶

たえすさこゆる岸のまつ風

昨夜月にわたたりし五大堂に又詣す、はしの板五寸  
位づつをわけたるを、長さ三五間もやあらん、此  
海水のながるゝか見ゆいとわやうし、本尊は慈覺  
大師の五大尊なりとぞ(此は眞言寺にてもちしが、先ころ  
此堂を村にてもちせ、此寺廢せられて還俗したり、今は  
鹽のまにもさる寺一軒あり)瑞巖寺住持眞壁大陽禪師は、  
もとよりしれる人なれば、此三日とまりてたつ、  
舟までれくらる、廿一日にたゝんと申たるを、一  
度結縁に説教を乞はれたれば、さて廿二日にはた  
つことになれり、老男女五十人まうでたれば、三

音をのこしてふるしづくかな

ならび、横に縦に、起きたるも、臥したるもまじ  
りていとをかし、奇景といふべし(此處二  
字不明)里に舟

つ、ひるとさくひて仙臺人神孫子氏にわかる、  
是より車にて石の巻へゆく、三四里なるべし、雨  
ふり風も寒し、二里ばかりゆきて西光寺の住持檀

方等まら迎ふ、此寺の本尊海中出現とて近ぶるま  
で御身に貝がらなせつさむたりとぞ、此寺はせば  
くわつかりき、されを坐しきども予がきたるにつ

きて新造せしとぞ、授戒五重あり、

廿二日夜月よし、寺の後に日より山と申て春日社



あり、眺望もよしとさしてのぼる、五六丁もたか  
し、松のもとに草しかせて月みしに、かたはらの  
茶まねらせんと申にやがてゆく、二階などあけて  
此に月をみる、しばらくして従者どもみなきたる、  
今日關本寅娘さまをつれて來訪す、めづらし、い  
つ此地へと申に、先月きたると申、扇もやる、  
其わけの口もきて、支那竹の線香入をねくらる、  
かきものいろくやる、羽後の國本庄大法寺は亡  
父の墓あれば、通らせ玉は、十念玉はれといふ、  
さすが孝子なりとてうけがふ、當寺の檀家木むら  
氏の娘十七歳にて没したるを下炬くだし遣はす、  
戒名もさづく、因縁ある人なるべし、

廿四日晴、授戒五重

廿五日、説教

廿六日午後雨、所々坂あり、高清水にやどる

廿七日雨多からず、一の關にとまる、ひの木石  
に化したるを見る、(松しまにて松の石に化し  
たるを見るになしはと也)前澤の専

念寺の住職訪ひ來る、明日の請待なり、

廿八日、一關發足前澤へゆく、みち義經をみる、  
道より二丁ばかりをゆきて小堂あり、義經甲冑の  
像あり、其下きりきしにて衣川の流さくら川とい  
ふとぞ、是よりしばらくゆきて中尊寺へ入る、山  
下なり、天台僧一人山下へ迎に出て案内す、山を  
のぼる四五丁地藏堂あり、此に辨慶七ツ道具負た  
る像あり、五尺ばかり、太刀のつばあり、さしわ  
たし五寸あまりなり、南無阿彌陀佛の六字を環刻  
す、古筆見所あり、龜井、片岡などの負といへる  
ものあり、光堂は此より三町ばかりゆく、正殿は  
三間四方なり、けたる木までも金色のこる、その  
昔はいかにうつくしかりけん、鎌倉の親王惟康此  
堂の雨露にさらさるゝことをたしんで上屋をつく  
り玉へり、此上屋は尋常の木材どもなり、本尊は阿  
彌陀の三尊、左右壇佛像あり、此より經藏をみる、  
文殊菩薩の獅子にのりしを天童のひくの像を本尊

(四百二十一)

(四百二十)

とす、御經圖には青貝にて妙法華經瓔珞經など申

文字をよこにかく、御經は紺紙金銀泥、一部金泥

紺紙なり、宋本の御經一部あり、秀衡の寄附なり、

辨天堂あり、安あみの作と申、此に金剛經のまん

だらわり、經文は支那人なり、粉色の經圖あり、

此は秀衡の筆なりと申、各所法師出でてかたる、

歸路中尊寺本坊にゆく、今の住職の僧にあふ、比

叡山より來れりと申、一山みな寺領なりとぞ、此

中尊寺の上よりのぞむ、向に高き山あり、ひろき

川ながる、むかし此山、櫻あまた植てければ、よ

しの山めきたりとて、さくら山、櫻川となんなづ

けたるよしなり、

なへてみなさくらと見ゆし山川も

今はむかしの春の夜の夢

金銀經を題にてかきて中尊寺の住持にやる、

かく文字こかねしろかねか、やさぬ

これや御法のたから成らん

みせよとてかきはかかしを巻かへし

よむ人もなき世にも有かな

秀衡君のかけると申金剛經に題す、

ますらをの弓やとる手に筆とりて

うつしてみする菩提心かな

ちかころ巡幸の時、金三十圓をたまはりて寺門の

守護を命せられしとぞ、たどき叡慮なるかな、前

澤専念寺にひるのころゆく、とまる、

廿九日晴、説教、今日西盤井郡中尊寺村坂本作左

衛門祖母はつといへる老嫗一百歳と云(ガッ)十念

を授け念珠名號黒本尊地藏尊寒さらし粉一袋つか

はす、目はよく見ゆる、喜ひし氣色なり、中尊寺よ

り使僧兩人、伽羅二片、山茗一斤、氷もち五箱も

たせ遣はす、住職即眞明滿、燒物を題にて、

極樂へゆきたき物とねもふにも

つくりし罪をまつくゆるなる

廿九日晴又雨、前澤へ又とまる、



卅日晴、あつし、暑百度といふ、前澤を發足す、二日朝少曇、結縁受戒二百五十人、剃度式三十名  
 中野真城寺休息齋食、立て北上川をわたる、大なる河原なり、大井川にまされり、茶をある家にて  
 ふ、盲人の旅人にうちはやる、是より岩屋堂むら  
 ○○寺にゆく、禪光明寺三好知玄日蓮宗積田知吾入來面す、此寺の住職實隆は三十餘年の住職にして、  
 類焼後再建の功あり、今度も本堂あらまし再建し  
 て、れのれの來るをまちしに、先月廿九日はから  
 ず命終す、けふは初月忌なりとて其夜は法事一座  
 つとめて遣はす、檀中みなよろこぶ、

よの中はまつかひもなしまつといは、  
 かならずあはん花のうてなに  
 一文字某といへるもの歌乞ひければ、  
 ひとつらの文字こそみゆれらす墨の  
 タのそらを渡るかりかね  
 八月一日晴、花巻廣隆寺にゆく、七里坂三四あり、  
 北上川あり、暑氣つよし、

用があげれば少し涼風のよし故、東京の様には有  
 之まじく候得共、随分毎日の車行なかくくたび  
 れものなり、「赤とんぼやたら立たり泊ッたり」と  
 口すさみ申候、少し歸りたくなり申候、是から外か  
 濱、恐山へのぼらるれば、此には地獄かあるをふ  
 じやから、一見可申と存候その様のことかたのし  
 みなり、名所は大てい仕舞なり、昔年せめて浮世  
 をそとの濱風と申歌をよみ候は、今日の前兆とみ  
 へたり八戸天照寺にて授戒五重仕舞、五日の朝晴  
 五戸専念寺へうつり、今日授戒善導忌勤之、明日發  
 足のよしなり、盛岡にて四日より廿一日まで留錫、  
 廿二日晴當所發足其日は山坂いくつもあり、最も  
 甚し、其夜は沼宮内といへる所に旅泊、廿三日晴、  
 今日も山坂、其邊蠅の多き所、福岡といふ所に宿  
 す、行在所にて廿四日半日雨、三戸本陣旅舎、廿五  
 日同所長榮寺、悟真寺説教、剃度願ひのもの一百  
 六十人餘、長榮寺にて一泊、廿六日八戸來迎寺に



ら此吉かん寺へ着、餘ほよき寺にて芝などは耻  
かしく候(遺恨なき)、住持三十年來住職、當時庫裏  
修復中大書院にて取扱に候、本堂もわたらしき幢  
旛などかけ申候、庭も廣き造り、湯殿便所其外今度  
の用所總して新規なり、和尙七十、よき人なり、  
すべて大泉寺の末寺中故、どこでも都合宜し、瑠  
宏法師の取扱ずんと行届き感心に候、隨行中山一  
人風邪昨今引込薬用、さしたることなし、外みな達  
者、今日は雨ゆえ冷氣にてあはせ下に單ものを着  
候、ひる二時間ほどは天氣なればあつさを覺申候、  
大分度數も違ひ候故なり、途中七草盛なり、何か  
しらぬ花もさけり、

見なれざる人はかりかは名もしらぬ

花も匂へる秋の旅路か

九日小雨、前十時授戒剃度式二百人餘、十日晴、  
海中寺發足横濱驛へゆく、五里ばかり、途中風寒、  
二時同所西福寺へ着す、杉山と云旅亭に一宿す、

五時入寺、十念結縁のみ、三十三観音あり、其夜  
下痢あり、十一日晴、氣あしき故先行を進め十時  
おろつとめて此宿を出づ、後四時田なふ村常念寺  
に着す、十二日晴、授戒式行之、午前未快平臥薬  
用、此横濱より田なふへ行海岸通日本一の牛産の名所なり午後  
五時過より授戒式剃度式三百餘人、つかれて休息  
し又始む、本堂より下る道にて吐す(水ば)、平臥薬  
用按摩(あんま)十三日晴、常念寺を立て大平村願求  
院へゆく一泊、其夕授戒人三百餘人十四日朝雨九  
時より晴、願求院發足、今日宇曾利山登山(俗に慈  
云慈覺大師御作地)此住持馬上にて先進登山(願求院より  
磁尊六尺ばかり)此住持馬上にて先進登山(願求院より  
棒かごを出して登山す、山中甚難所なれば歩行せばやき思へども  
風氣不快故無嫌乗駕、五丁道三里の上り、途中は水流れて川を  
渡るなり、しりし牛馬はよふよし、此夕山上の菩提寺と云に一  
泊す、風終夜寒し、熊谷善應と云僧は吉祥寺の所化にてもまより  
しり人なり、此寺の弟子)十五日曇、温泉に入る、地藏  
六尺は 拜禮し、地獄めぐりす、金石みないわうの氣  
にて朽て三年はもたぬと云、石もみな焼石なり、  
後十二時過發願のぼり下る 大畑心光寺にゆく、途中

雨しばし、寺より半道ばかりの所に、山上は同  
行ば、ども、をわかし辨當用意して待うけす(生か  
たる心)やかて高張をどもし數百人迎のもの出つ氣  
分大に快方なり、地藏尊の利やくなるべし、下痢  
もとまる、心光寺着六時過、

十六日快晴、氣分益快然、風刺全く癒ゆ、今日本  
寺にて法要相すみ、大畑村戸長大場小兵衛妻五ヶ  
年來中風にて平臥故十念願申出る、寺より半町ば  
かりの所故ゆきて三歸十念說法す、落涙涕泣す、  
翌日の授戒には病人こと一生涯の終に寺にて受戒  
うけたしと申て、やうやくに人人扶けて本堂に床  
をしき其上にて式をうく、剃度式をもうけたり、  
己れが居間へもつられて出來り、ゆるく話など  
して大に快き趣にて歸宅す、翌日は家の前に席し  
かせて出て十念うく、殊勝のことなり、かねてたく

はへたりとて古金二圓を布施物として出す、此日  
松前善光寺の世話人泉藤兵衛といへる人訪ひきて

同しく授戒剃度式をうく、此人観音の靈告を得た  
ることありとて落涙して話す、何の告なる  
なまきらす此朝同寺  
檀頭北村作左衛門宅にて小粥供養水瓜を出す  
日蓮宗  
本門寺と云老僧 七十  
六歳 出迎ひ并送る一書贈る 此書中に  
遺はすことあり 十八日朝寒しあはせ二ッ結  
り後に記す 合羽報國寺をたつ、  
駕にて海岸所々十念、又横濱の旅宿へやどる、十  
九日晴、馬門遍照寺に一泊、廿一日授戒剃度式ね  
びたし、午後此寺發足、小湊淨林寺につく此寺き  
寺なり、六尺ばかりの彌陀の像  
あり、古作とみゆ、おみたらけ 今夕一宿のみ、此寺傳來ら  
こみへて檀家二百ばかり眞實宗にさられたり、廿二日晴、  
今の住持其中間に申、此地眞實の新地三軒あり、廿二日晴、  
昨夜青森正覺寺檀家兩名御迎とて出來る、歌一首持  
参返し遣  
すは午時久栗坂 市  
観音寺にて齋食供養、此にて外  
か濱を見わたす、  
ゆき倒はやと思ひし外か濱

茶たはこ菊味豆腐吸もの

大勢出來り正覺寺も出迎ひ御相伴等にぎやかな  
り、道も新海道にて平らにて車もただやかなり、



又一里ばかりゆき野内淨土庵と云に小休、大勢來り十念授く、四時を青森町正覺寺に着、町のさまにきほし家造りたひならず寺には兒天童十人樂人衆僧まぢかまへたり、木堂は八九百人はかりの群衆さもがつぶれ候、此に七日ばかり留錫なり、

九月廿三日此日は終日風あらしなり

こからしとはかりに音のきこゆるは

都にしらぬ外の瀧風

此地は歌よみどもの少しある所にて、三五人歌な

どよみてれこす、みな返し遣はず、今日は縣令山

田秀典邸へ尋ぬ、翌日禮として入來、(一人たちにて手輕のし)今日剃度式うくるもの二千百人と云、(供もなし至極のなり)

廿六日雨要儀式、午前剃度式うくるもの一千三百

と云、

廿七日晴、五重傳法一千餘人、

廿八日晴、施餓鬼剃度式百名餘、午後濱邊にてせ

がき、天童十人僧徒廿人結縁數千人、

卅日晴、青森出發諸寺院同行天童小兒ども一里ばかり送る、今日津輕坂とて一里ばかりの時あり、

波岡とて石垣の金光上人の舊跡の寺あり參詣(東奥念佛道場云へる額をかきて遣はず、金千匹寄附)御像の姿元

祖の御像に似たり、眼は徳本行者に似たり、一尺

ばかりの像なり、黄昏黒石來迎寺に着す、此邊お

くて稻かり時なり、

はてもなき旅寢に秋もふけにけり

みちれくのての稻はかるまで

青森より老女三人名をりをしみて此寺に來る、(青森より九里餘)

十月一日朝寒、わた入四ツさる、剃度式願三百人、

二日朝雨、當寺開山二百五十年忌法要、剃度式願

又三百人餘、授戒式九百人、

三日朝發足、四時頃より雨になる、午後雨ますますつよし、坂あり夜に入て三里をゆく困却申す

ばかりなし、夜十時總澤法王寺に着す、

(行三十七)

(廿八日)

四日雨すすくふる、風加はる、剃度式五百人、(七)此ふしん半ば天

四日半夜より風雨甚し、明五日に發足すべきのと

ころ風雨のもやう中々に晴れさうなければ一日逗留。

午後雨晴れたれど風つよし、

六日曇、今日昨日つとむべき授戒式行ふ、六百名

餘、

七日晴、朝發足夕刻弘前貞昌寺につく(准檀林なり大地なり)

青森よりしたひ來れる老人達も此まで供してく

る、日蓮宗日照歌一首、洞門大心詩一首、各返し、同行は澤山あり、感心のことなり、九時頃此を發

遣はず、いはしやよりの達書にて弘前竹内和吉と

いへるもの(主人はるすなり家内舎弟上)

八日晴此地とも多し、樂人もよくできる由にて琴

など加へて法要入樂ありつるを見て、發足の前夜

樂人をよびて二曲ほを所望す、樂人もよろこび

明日わかれの人々にもきかす、みな喜ぶ、

九日晴、授戒、今夕奏樂、

十日晴朝剃度式百員、九時發足、樂人奏樂して送



十二日朝雨、終日右の法要をもつとむ、  
十三日晴、一心寺發足米代川舟行(十六)十里ばかりにて日暮れ二井といへるに旅泊す、  
十四日又舟行(六)此間山水奇且妙なり、川は清淺風もなし、波も平かにして、午前能代西福寺につく、此地信心の人多し、山門本堂満足す、よき寺なり、剃度式三四十名あり、午後放生會あり、明日授戒、

十月十八日、南秋田港といふ所善導寺と申やけ寺にて午飯供養、初て松たけ吸物出す、昨日よりたべもの江戸向きなり、是まで大ていかゆ、雜すい、やきみそのみ、此地大港にて繁華の地なり、午後二時久保田里誓願寺着、市中二千軒往來、十念拜受跪坐合掌の人多し、十九日晴、請に應じて門中の僧徒に緣山法語を講す、法の灯の歌十五首をよみて遣はす、法師ども此より一同志に法の灯か、け可申など申す、午後布薩式三歸說法、夕刻

縣令石田英吉訪問、廿日禪衆多く入來る、中前天

德寺舊佐竹梵隨禪師日課を受けんと請ふ、平田篤胤の引導師なり此寺に廿一日晴、午後剃度願六七十人、令公石田氏入來、夕刻又港善導寺へ行一泊、廿二日晴、午前剃度式二百人餘、廿三日曇、又剃度式兩回、夕刻

出立又久保田光明寺釋迦堂へ着一泊、廿四日晴、朝同所當福寺へゆく、各宗寺院迎として隨行す、此日秋田郡阿仁金山專念寺といへる僧各宗一十六員を誘ひて活字一切經購求の舉を啓白す、感心の餘り閱藏案一冊をつゝりて遣はす、各宗に閱藏をすすむるの書なりよみかゝるもの廿五日晴、剃度式瀨川氏合家剃度式授戒式結縁あり金十五圓布施夕刻瀨川宅へ請待美を極めたり鑿勝の内七升入の盃を出す一同大歡、昨廿四日育兒院獨立開院式、會長濟門禪宗全良寺は類焼に付き當福寺にて式を行ふ、縣令始め諸局總出席新聞や法中にて三通の疏文をよむ、令公及諸局長祝も來る文、演説は頓野馬彦と云ふ人師範學校を長なり此母は授戒に入る令公

の奥向も剃度式參入あり、滿堂群聚立錫の地なし、赤飯を施す、縣下一般殊の外ありがたかりし趣なり、此一式すべて琇宏のさし圖にてあちらの宗の祝文までも書て遣はし候など、諸事ゆきゆき、無滯、一同も喜ひ候よしなり、廿七日晴、朝當福寺發足し又港滿川寺といふにゆく、此寺にて五尺八寸ばかりの地藏菩薩新造立、館山氏といへる人は代々善根家なり、此主人大工なれども自ら地藏尊を彫刻し、それを開眼すとて請待なり、過日湊へゆきしころはいまだ全備せざる故に今日に及びしなり、開眼後一席の説教す、歌一首遣はす、午飯後此寺を發足して廣面村本念寺郭堂の寺なりにゆく、觀音大士慈覺大師開扇導師剃度式一百名餘一泊、廿八日朝平田篤胤の墓に參る天德前住禪師案内此寺今は眞言宗寶幢寺なる山上よ

ぼどのぼりて鳥居立たり、平田篤胤君墓と書す、近來廢佛の祖師にて維新全國殆ど僧界を驚かしたるの首長なれば、逆縁回向の爲めにどてなり、佛

法廣大の慈心ならではないかで此に及ばんとて、禪師もけしからず稱せられたり、歸院後此より發足して山を越え、水を渡り開拓地の土族の家にて、湯を乞ひ午食す、雨ふり出て夜に入り境驛田畑といへるに旅泊す、

からにしきさらさぬ峯もなきまてに  
染つくしたる木々のもみち葉  
寺につきて住持に遣わす歌、  
法のためわたるいく瀨の思ひ川

わさくは人の思はさらなん  
此寺もかなり到大寺にてよき寺なり、和尙はつんぼ、

三十日朝より雨風雪あられ、寒きこと極寒の如し  
みやこにはまた初霜もふらなくに

雪ふりつもある角館の里



(本紀行文は上下二冊なりしが一冊は何れにか失せたりとていと残念ながらこれにて了る)

補遺

左の一編は彼地本間信導氏より報道せられたるものなれば掲げて以つて補遺とす

上人青森正覺寺より南津輕郡黒石來迎寺へ移らる(里程十里)

途中同郡浜花村字北中西光院(金光上人入寂の地)へ御參詣あり

左の顔面と短冊を認めらる、今に同寺の什寶たり、

額 東奥念佛最初道場

短冊 金光上人の遺跡をきこえし西光院に詣でて

なかれては千年に近き吉水の

すめるを見るにさしくまれば

來迎寺にて認められたるは

黒石の來迎寺にて受戒の人九百員剃度式う

けしもの六百ばかりなるめつらして

くろいしの黒くはあらて此その

しろき道にそねもむけるひさ

黒石より西津輕郡桑野木田村淨觀寺に移らる(里程六里)廣大

山(同寺山號)といふ大字の額を寄かる

十一月一日饒々澤法王寺に移らる(里程五里半)道すから落葉

しきりなりければ

こすゑにも心さまらぬもみち葉を

いさひかれたる人に見せばや

途中大雨ふりきてきたなき農家に獣ひ玉へるに

しばしとて雨やどりするさゝかやも

もるにもらせるたひこるもかな

道を急ぎて饒々澤の入口なる上野村の茶屋に休みける頃は日もやくれたり

ゆきくれて尾花もさに宿かれは

かたしく袖にきりくすなく

法王寺へ着かれたるは午後九時過ぐる頃なりき、二日御休息、三

日四日五日御法要、戒弟六百五十餘名なり、同寺に遺されたる

は

法王之寺臨蒼海。沙羯羅來開色空。

月照驚濤天未曉。鯨鐘聲靜徹龍宮。

洋深千里對山門。石壁十尋圍紺闥。

界内曾無塵事到。辰初持鉢繞流村。

庚辰十月當饒々澤法王寺作之 三緣老人時齡七十五

世話方中村俊吉に遺されたる

よしさらはた、す心は淺くとも

やめてちかひの海にいろへき

同じく天龍又兵衛には嶮山に鹿の齒かきて

ほん樹の犬はくゆともさら科や

姥すてやまにさをしきのなく

同寺檀頭中村喜右衛門其家傳の冬夏さいふ菓子奉呈す、上人

頗る賞美せられたり

采日法王寺より弘前眞昌寺に移らる(里程九里)途中八代忠兵衛

衛宅にて休憩(法王寺檀家にて弘前より四里手前)同家の豆腐名

物のよし上人も東京廣しといへどもまた稀なりといはれたり

眞昌寺にて樂人ともへ遊ばされたる(後眞昌寺へ納む)

緊那羅は帝釋宮の樂天部なり一日琉璃の琴

を彈して釋迦佛に供せられしに老伽葉不覺

に舞はれしこと經律に見ゆ今日の合奏にか

かる古事をも思ひいでられて

きむならの昔かたりを弘前に

けふそ見るなるけふそきくなる

同市松森町に住める岩間瀧さいふ歌人の年賀を祝して眞殿松を

かきりては千代さもいはし岩かれに

れさしうかぬ葉のないまつ

眞昌寺より秋田へ趣がる弘前より南津輕郡碓ヶ關まで七里此碓

より矢立峠にかゝる(峠三里)この麓より秋田大波まで三里なり

因に罷す上人法王寺に着せられたるは實に十一月一日にてそ

れより若干の日月を経て秋田へ趣かれたれば紀行中十月十八

日南秋田湊善導寺にて午飯云云あるは大にいぶかし其他時日

の違へるは如何にぞ

東行旅談

三寶義林(慈恩大師義林章中一科)の中三種四種の

三寶を出す、其中一體三寶なぞ云へるは、已身即

佛法僧と云へるとにて、いはゆる直指人心見性成

佛なぞ云へると同意なり、禪家にては此地位に到

るを研究すべきなり、實に向上の法門なり、此中

に在ては感音王の昔も、釋迦達磨の今も、我が喫

茶喫飯も、一体同体にて今も昔もなく、凡も

なく聖もなく迷もなく悟もなきなり、されば開覺

經には、生死涅槃昨夢の如しとも、八万の教法は

月を指す指の如しと説き、古哲は門を叩く瓦子と

も唱へ玉へり、爾れば則趙州の一無字を示し、黃

檗の三十棒なぞ云へるとも、此の地位に至らしむ

るの勝方便なるべし、而して天下の衲子此に投機

するもの夫れいくばくありや、世澆季に屬し人浮

薄に流る今日にしては大方空腹高心多く口頭三昧

に坐す、是禪家の弊のみにあらず、各宗亦同嘆を

追ふ、寧慚愧せざるべけんや、願くは住持三寶の

意を體認して泥木塑像之佛寶は、恭敬奉事して輕

心漫心を生ずると勿れ、黃卷赤軸は法寶なり、一

字半點といへども、佛陀の汗血より出づ、供養す



べし、讀誦すべし、思惟觀察すべし、講説流行すの外道見に墮すること勿れ、宗見を張る今日にし  
べし、法師功德品に五種法師を説き、瑜伽論に十て止むことを得ざるも、其實佛法一味の理教に乖  
種法行を説ける此れが爲なり、維摩經に文字性離違す、我他彼此の見より同法の中に於て勝劣尊卑  
と説き玉へるは、文字の本体不思議解脱なりと証の念を生ず、是を人我に縛せられて解脱の道に疎  
せしむるなり、文字を捨て、性離を尋ぬるには非しとす、昔は玄奘三藏法相宗を弘む、五位百法を  
さるなり、不立文字者流の人、やゝもすれば佛祖説て、教相中の傑出なる者也、然り而して我道昭  
の尼子珍製して經卷を蔑視す、抑伽葉結集の意に法師に傳るに教外の禪法を以てす(元亨釋書第一)  
背くものと云ふべし、希くは常に移めて眼を三藏勤拂拭の偈を書す、此は教内の佛法なり、禪にし  
に遊ばしめ意を三學に安置すべし、僧寶とは何ぞて教を説き教にして禪を示す、法乳一味に達すれ  
や、僧具さには僧伽と云、此に和合と翻す、所謂はなり、宗見に着して自毀他するもの、及びざ  
同見同戒の六和敬を云、方今末法稍法滅の前兆をる處なり、夫今日に在て宗見なかるべからず、而  
現す、何をか前兆と云、戒律を忽諸するなり、宗して抗を守て劔を待ち柱に漆して琴を禪するが如  
見を主張するなり、戒律を忽諸すれば、剽染名有さ、いはゆる甘露毒となることを免れざるべし、  
て實を失す、いはゆる肉妻の令を悦ぶ者はなり、知らずんばあるべからず、古に曰悟る者は法華を  
身既に俗士歸敬の心を破る、己れ人に輕蔑せらる轉し迷者は法華に轉せらると、夫つゝしまざるべ  
るのみに非ず、寺門も隨て衰頽す、あはれむべきけんや、思はざるべけんや、  
限なり、自ら三省して深く慚愧すべし、誤て邪見

西遊日記

辰のとし一月二十八日芝をたつ、觀光、大眼、通  
玄、萬里小路、正道、緣受院大賢、本誓寺順光ら  
の上人たち神奈川までねくる、永島高子荒井町妙  
觀半平山の内縁山出入のものども停車場にて別る  
神奈川高島氏を訪ふ、此にて辨當した、む、  
朝日かけさしてもあらぬ旅なれど  
わかるるときけはのこりをしかる  
梅柳霞こめたる横濱を  
よこめにすくる春のたび人  
三寶寺の辨玉老人にわたこぬぎて遣はすどて、  
よこ濱のはまの濱風寒ければ  
此はたこきて埋火によれ  
主もよろこびて歸らせ玉はんころは駿府のあたり  
より御さた有まほしなと申す、  
此をたちて榎木の家にて茶のむ、戸塚の上人たち

此に出迎ふ、戸塚の寺による、驛より三四丁北へ  
入る、此にて西連寺の檀那どもにあふ、十念授け  
て戸つかの驛にてわかる、ふじ澤まで西連寺住持  
外うばそこ四五輩ねくる、藤澤は日野清吉宅にた  
ちよる、たばこなどねこす、平塚のあみ陀寺住持は舊知也  
に着せるころは黄昏なり、同寺には男女二百人ば  
かり本堂にて念佛す、此寺住持はむかし小石川に  
て、ねのが起信論こうずるをきたりし人なりと  
て、其折のことなどかたる、夜ふけてねる、庭の  
垣ねうちこして野中の林なごはるかにみゆ、けし  
きよし、曉がた目さめぬ、夕べはふくるまで住持  
のもの語りき、てねもひつゝくる、  
まどぬせるむしかたりにわすられて  
旅ねしつどもねもはさりけり

廿九日晴、小田原大連寺に宿す、三十日晴、同所  
門中面會、かきもの多し、昨日才兵衛妻女實家親  
類所々巡回本家にて御齋、宿中所々十念相濟、夕



べ馬車にて箱根湯本へ至る、凡八時なるべし、深川荒井も来る、今夕はこの外こみ合にて何事も省畧なり、まもわろし、

三十一日晴、塔の澤もと湯に至る、才兵衛知る人なり亭主喜びて歌などみする、此宿は往年尊き人の此にてかくれさせ玉へりし所なりとて其座しきに案内す、ものあはれにて同行の僧十人ばかりは此にて讀經念佛す、乗僧に御布施物を引く、今日の齋食は此御追善なりとて晝時みなに齋くはす、其のころのしつくは今もしたゝりて

ぬらす岩ねのこけのころも手  
主のいふ、行人過橋と申御題を玉はりてよみ侍るなとききて、さらば御追善に其御題にて人々歌よまばやとて各よむれのれのは、

何にしかもかけわたすらむ丸木橋  
ゆきて歸らぬ人もある世に  
たけは才兵衛が供養するどて、心を用ひたるもの

林やす子乗運寺に尋ね来る、昔の話を、歌一首をんだら寫眞つかはす、

二日晴、乗運寺をたち、かん原にて齋食、夕尅駿府横内村の來迎院へ一宿、此寺東照宮折々成せられたる所、御屏風などのこりてあり、

三日朝發足、夕こく中泉氏吉川氏方にやどる、床上應眞の軸あり題す、

驅龍役虎固非意。 涉海駕雲不日玲。  
由除斷薩伽邪見。 被爲人天稱應眞。

四日晴十時發足、天龍川架橋を渡る、六百六十間と云ふ、本朝第一の長橋なり、橋上風すさまじく寒し、

殆似天龍横海濱。 三千餘尺架橋新。  
開明之世多馬車。 他日須爲題柱人。  
ふねとのみ思ひわたりし荒川に  
おもひもかけぬはし柱かな

此夜濱松の玄忠寺に宿す、此寺此一日より受戒の

出す、夜ふくるまで打興す、さまざまのものかく、早雲寺住職訪ひくる、

二月一日早朝發足雨ふる、早雲寺を訪ふ、莊嚴なとして五色のまんまくかけ、ふるさかけもの、かさものども多く出す、いそがれさによくはみず、庭は北條家の盛なりし頃より作りなほさずといふ、雪やふりく、四山みなさりわたりて海の如し、頂上の茶屋にて齋くふ、茶屋の主人紙を出し、ものかきくれよと云ふ、日蓮宗なりといふに題目かきて遣はす、

箱根山せきもる人もあらねども  
越やすからぬ雪の夕くれ  
三島ちかくなりて雪も雨もやはれたり、其夜は沼津の乗運寺に宿す、

函山雲湧失峯巒。 滿目殆爲望海看。  
倏有暴風吹素雪。 數令旅客拂驅鞍。  
(函山雲行)

式初りて、靈巖教正并に荒井の上人の來て、早くより待しよしなり、此前後遠く送り迎ひの人など多し、禮敬嚴肅なり、本堂にて一座法話す、受戒の人は二百名ばかりとぞ、これのれきたれりとき、にはかに五六十人ふたりと云ふ、

五日晴說教名號など多くかく、

六日雨ふる、今日は受戒あり、みなたうとび合けるは一切衆生悉有佛性のいはれればなるべし、

日課さづく、善導忌施餓鬼などつとむ、をはりて湯に入り夜食くふ、初てひまなり、道にて見聞したることなどを記す、  
木からしに倒れうなる庵かな  
濱松にて節分  
福は内どなりの店は鬼ころし  
うつ山の墜道にて  
墜道やしはしは人もむぐらもち  
ともしひをひるもかゝけてゆきかよふ

道ひらけたる世にもあふかな

四百三十五



この宿りし寺、雨戸なければ夜一よ寒かりき、  
叩くへき板の板戸もなき庵は

白玉あられ音のさひしき

此寺の住職さはめて無欲なる人にて、人にもものか  
しても取るとわする、人なり、所のもの貴びてけ  
るとぞ、僧には似合たるとなりかし、僧たちあま  
た來にけるに、さまざまのものやりてけり、

七日晴、風もなし、朝玄忠寺の檀那ども來りて、

名號頼面など乞ふ、三十枚ばかりかき遣はす、  
此を發足して又天龍川をわたり、中泉善導寺に至  
る戒弟三百名もあるべしとさこゆ、開白の式行ひ  
開眼などして一座法話す、けふは全所の吉川氏に  
やどる、

八日雨、かみそる、やがて寺にゆく、十時なるべ  
し、一座法話す、午後ものかく、夕座名號施す、  
洞家の禪僧某訪問せらる、雨しげし、車にて吉川  
氏へ歸る、今日郵書認め高橋、兩國、大内其他へ

り、來る、日坂はかぢ、

山かこのよこ竹枕旅人の

眠りてこゆるさよの中山

岡部驛誓願寺山崎華阿小休を乞はんとて來るにて  
ろびて目のわきをする、血流る、藥を遣す、菓子  
一盆を出して途中にてくるるあはれなり、さま

さま申て歸によるべしと申て別る、まゝ子にて  
寺院迎に出る午齋供養す、夕尅寶壽院へ着す、安  
部川の橋まで役僧并に報土寺住持及檀方迎に出づ  
寺は二代將軍建立の由、行と、きたることなり、

極樂はわれまたしらす此世には

こ、や寶の臺なるらむ

二十日朝曇、午後晴、午前十一時報土寺へ行く、  
前後送迎、至極暖氣にて凌よし、

南方陽暖地。到處看蘇鐵。野外鳥宜聞。  
園中花可折。風輕宿雨休。雲去前山列。  
錫杖入伽藍。僧伽亦淨潔。

(至靜岡報土寺有授戒會宿雨適霽)

出ず、十二日まで吉川氏に宿す、

十三日晴、横須賀撰要寺へ行く、

十四日晴、善導忌修行、

教也不孤弘。弘之必在人。未觀遺地境。  
寧有逸遊民。王政既如是。法門何吝伸。  
寄言同志客。願使道維新。  
かしてかる我大御世は我法の

後の世までの道もある御代

十五日晴、朝八時撰要寺發、横須賀の町所々香花  
を備へ、十念拜受の家あり、櫻ヶ池へ參詣す、松  
林梅畝の間を過ぎ切通を通り池に出づ、華表あり、  
池面一丁四而南北少し長し、櫻ヶ池より應聲院ま  
で五十丁道三里半雨ふる道惡し、深川予か車を扶  
けんとしてすべる、みなくはだしになる、黄昏應  
聲院につく、櫻ヶ池詩あり (乘林某參看)

十六日十七日應聲院授戒、

十八日晴、早朝發足、掛川迄檀方三人及天然寺送

廿一日雨、かきもの認む、  
廿三日晴、正授戒、廿五日清水港實相寺に到る、  
廿六日全寺鐘樓供養、廿八日中泉に泊す、

芙蓉昨日在前面。今日芙蓉爲後山。  
飛錫向西三百里。白圭猶望笠雲間。

(遠州途中見不二山)

三月一日朝晴、中泉發足濱松法林寺へ立寄り、舟  
にて湖水七里渡り、新庄にて午飯、車にて三州豊  
橋眞真寺に向ふ、朱網代を以て迎に來る、門前よ  
り奏樂

眞真寺に參りけるに祐嚴隠士よろこ  
びて四方をてらせるなどよみて出せ  
りけるかへし

かははりのひらめくかけはみねなから  
消ぬはかりなる雪の三日月  
ねなし時隠士の今様をよめるによめ  
る



五つの塵をふり拂ふ 苔の袂をかるけなる  
柴のどはその白雲を いつ紫となかむらむ  
かれ逆に蛙のかたを  
秋もやゝかれの、原のふる池に

猶なくものは蛙なりけり

竹に月出たるかた

さし出る月の光にかけみわて

また一ふしの窓のくれ竹

水盤に梅のさしたるを

一丈銀盤三尺水。數枝誰挿白梅花。

滿堂覆郁清香溢。恰是西湖處士家。

四日晴、回向説教等勤之、午後濟直に發足、悟眞  
寺住持并寺中門末寺院檀方共及受者數百人、宿は  
づれまで送り道々十念、車行豊川へ一宿、夜中説  
教、

五日晴、午前後説教、後七時過豊川稻荷參詣、此  
任持奕堂禪師の遺孫にて丁寧懇切なり、本堂(觀

音)明神社(心經三卷)奥院(心經)非時馳走種々、  
歌かく、

六日晴發足、岡崎西岸寺隆寶寺え參向、着後十念、  
六日七日八日善導忌有之、

六日晴、群參二三千人、岡崎の城廢し公園地とな  
る一見、午後法事讚、

岡崎の祠官近直にやる

雪消る神樂か岡にたち出て

はどけの座をもつまれけるかな

岡崎の城跡をみて

有明のありはてぬよの習をば

かたふく月のかけにこそみれ

庚辰三月七日 寓岡崎西岸寺觀公園地

舊名龍城曾東照神君所賜也、有井梅産湯  
在于天守之下方、今爲行路城跡爲公園、  
立石銘公園二字、亭樹數所、樹梅、柳、桃李、百  
千株、山水入障、頗爲壯觀

去石攘垣夷凸凹。滿城曾不舊時家。  
春風吹盡公園地。多少女兒來弄花。

觀産井

井水不乾三百年。點星移月鏡光鮮。

蒼苔久絶輓轆轤。行客掬爲盥嫩泉。

八日晴、西岸寺法要、九日晴西岸寺發足、大樹寺よ  
り駕籠迎人足共ねこす、途中昌光律寺へ參詣、靈  
覃和上末流の由當律僧有志の人ときく、大樹寺着  
本堂十五間莊嚴結構寸難の入るる所もなし、二重  
塔あり、八代様御墓御靈牌拜禮、同寺にて御齋、  
午後説教、

古寺のふりし昔を思ふにも

袂にねつる椎の下つゆ

椎の大木あり、松も御手植のよしなり、夕景矢作  
川を渡り(東岸にて大樹寺より送りの役僧に別る)  
上野村行福寺に着す、十日行福寺授戒説教、西岸  
寺來る、十一日授戒式、行福寺は定玄法師のすめ  
る寺、昔焼失したるを法師のきたりてかたの如く  
建立したるなり、世に容易からぬはざるべし、

我法のためと須達のおと、めて

みかきたてたる殿つくりかな

本堂は伊勢の國のこわされたるのをとどめ  
てたてたるとていみしうきはたちたるつく  
りさまなり

御佛もうれしとやみむ玉くしけ

ふた、ひ此にてらす光を

十二日朝行福寺を立ち一里ばかり松原をゆきて大  
濱茶屋驛にて行福寺并に西岸寺にわかれ、乘運寺  
和尚檀中迎出門前にて香華供養十念、其日は宮よ  
り汽船にて四日市につく、津屋喜兵衛方に宿す、  
十三日晴、山田にゆく、  
十四日少し曇る、清服にて、内宮、外宮拜禮、二  
見浦一見、此にて晝食、四時宿屋(山田町の)につ  
く、

開けゆく我大御代も久方の

天の岩戸の光なるらむ



神路山神代の奥はしらねと

ひかしかよふ杉のした風

千はやふる神代のまゝに流れきて

今もたねせぬ五十鈴川の水

十五日晴、津屋發足津に着す、十二時少し過たり  
田畑屋本家尋問、小菊三帖、曼荼羅寫真、十善畧  
記二冊遣す、本尊拜禮、主人不快にて引込而會仕  
かたき由申す、從來礪川縁山表共木綿布施の儀換  
拶に及ぶ番頭手代共に逢ふ、引つゞき番頭某使と  
して禮に来る、常宿村田屋喜兵衛え一泊、

枕に虱のたり

しらみゆく曉かたのたひ枕

たかさぬくのなこりなるらむ

又

夢のまも檀はら蜜やたびしらみ

名所霞(二見にてよめる)

そこをたもしられぬまてに玉くしけ

ふたみの浦に朝霞たつ

社頭霞

みつかさにたてるや春の朝霞

内外どにはわかれさりけり

十六日朝曇り雨になる、其夜は土山に泊る、  
十七日晴、大津汽船にて京都天性寺へ着す、  
十九日晴、華頂拜禮、學校見聞、

大雲院池門上人にはなしする所をかきて  
そへたることは、

けさ袋に經論共いれて、かけめぐりしは  
今より五十年ばかりのむかしなるべし、  
其ころの人は大かたなくなりて、夢にだ  
にみえずなりにしを、伽毘羅會の朽ぬ契  
とて、文殊の御かは相みつるが、よにう  
れしうて、扱かく

大かたは消てあどなきあわ雪を

君かかしらにみるもめつらし

編者いふ、上人此時は明石のあたりまで、物せられたれ  
ど、今そが日記を求むるによしなれば、口をしけれど  
しばらくこれに缺く、見む人幸に告め給ふな

書

東

(明治十一年松濤舞成人知恩院事務長に贈せられ京都へ出  
立せらる、際上人より贈られたる書柬なり、編者識)

さのふは御とふらひの折、宿やくにて無據夜具の  
中よりはい出して西福寺行申候あと扱々御のこり  
ねはく候、折かく御大切に御旅行奉至禱候其内秋  
にも相成り西遊の節拜顔萬縷可伺候淨土寺よりの  
短冊上ルカヨシト申に付れこかましき歌共少々か  
きつらね呈上之候舟中の御慰にもと存候也委細蕪  
巖より可及演述也 恐々敬白

四月三十日

傳通院 行 誠

松濤教正座下

みな人の西をしをとねかへるは

さとりひらくる國なればこそ

其後は久々不得尊意暑前益御機嫌克奉恐賀候、然

先はさとりは開けそふにも無之候、三章の教則に



もみなもこまり候由に候、佛法一變三寶消滅の時節と被存候、其御地にては成たけ御扶護祈り奉り申候、事に候此の已後の處にて説教師をこしらへる工夫の所、成るたけ講釋でもきかせて少々つッ。ッを申さぬ様に仕立申度申様の事も篤に御規則でも立ねはならぬものなれども、縁山にてもたゞさわぎのみに取まされ候とみえて、説法師のみを御さかしの様子に候、世界一般談義外道出来示現の時か、來客中不得寸暇聊道契のわすれかたさに中心を齟齬仕る而已、饒舌多罪々々恐々不備

回 向 院

六月十三日巳刻

行 誠 和 南

三洲大樹寺尊者

御侍者御中

八はしも矢はきのはしも人のため

わたす心はかはらさるける

遠くよせられし文の御返事 其後は久々御きたを承らす候故、早く極樂へ御歸りやと存候處、今日は存しかけなく御ふみをいたたき、極樂より御たより下され候にめつらしくかたしけなく拜見申候、借御書中に仰こされ候儀御尤故、さつと一席の説教かき進せ候、必ず此の通りでなければならぬなど申すには決してこれなく候ども、御布告もこれあり候はば、先づ此位に心にて、さて、其上はどの様にも説かれ申す候、此方大教院初め、みな大てい其心にて候、かしなから此位のと誰れでも申されると候、借行者尊前などの如き人は、世の中にて眞の佛法を修行する御場合にこれあり候故に、必ず世間あたり前の事を御申しなさるには及ばぬ事なり、いつにても思喰すまゝに御説きなされて、夫れかありかたき事に承はられ申候なり、余人の百座の説教より行者の一塵、余人の千言より行者の一言に

て、人々は得道するとは、其むかし行誠篤と感伏まかりあり候、山居多年の實修行地は、行誠五十年の學問より千里も高くればし候まゝ、御自分の御覺悟の通りすこしも御違りよなく、御かくしなく、其まゝ御ときあるか夫れぞ、

天子様へ御奉公にて、萬民の利益にて三世諸佛の御こゝろなり、あゝ言ふてはわるひの、こう説てはわるひのと申すことは、凡夫の上に候、誰れ何んど申すとも決して御かまひなくてよろしかるべきことに候、夫れでわるければ例の通り山居木食世の人にみられぬ所に御座あるべきことに候、人にうられぬ様に、世につかはれぬ様に、かくれるか例の通り御修行に候、しかし迷ひの人も不便に候故、有縁の衆へは一言でも御示しあるがぼさつの利他

のと故に、強てたのみ申すとなら、其御時のごとに候、其の代り其時は眞正の佛法を御ときこれある様祈る所に候、今の天子様の朝廷は有がたき御政

治にて、すこしも人の迷わくにならぬ様にとの御さた故に、佛家にては佛家の迷わくいたす様にとの御さたは決してこれなきはとに、出家はどこまても出家にて、自らも行ひ人にも行はせるが教法の御趣意に候、田舎の僧などは還俗せねはならぬの、肉妻を御ゆるしのごとて、さわき候は心違ひのことに候、左様の坊主は此節東京にても不評判に候、其邊の御僧達へも此とを御申しさかせこれ有り度候、此段念のため申し進せ候、徳本行者の傳をすり候まゝ、一部御らんに入れ候、人にも御さかせありてよく候、此頃は講釋にて忙しく困り申候序てなから講席の名を記し候御結縁にもと、

大乘起信論 毎月三回

山谷門中

無量壽經 全

淺草寺院中

維摩經 全

同所禪宗永見寺

遺教經 論 全

深川靈巖寺

梵網經天台之疏

毎月六齋十二席

駒込禪宗吉祥寺



同 疏 月々 淺草傳法院

十善法語 毎月 日向院自坊講す(朝)

往生論註 毎月 増上寺學校兩席つゝ

其御境地にても一同講釋ある様御す、め可有之候、

東京回向院住職

乙亥二月十五日 權大講義 行誠敬白

光導行者へ

々出府も有之様被成度候、尙又正道尼並小供登人此儀兼て相願有之候趣に付此度態々被仰下候に付一同評議爲仕候處、當人も何分願度小供之儀も行々御弟子之數に差加へ被仰付度由願出候、毎々厄介者共のみ差上恐入候へ共大悲憐愍之程偏に奉願上候、委細光忍より可申上候也  
妙念も不爲相變御世話藏き罷在安心仕候趣傳承難有候、千秋院にも早々可申傳さぞ難有可被存候、此上共宜敷御保護願上候

先般良慶師參府之砌は御厚意之御目錄惠投御口達等拜承毎々被懸御意遠路之處御懇切之至り難有奉拜受候、扱春來當地は餘寒昨今も少々雪抔も有之候、扱又光忍事久々處青院世話忝至極神妙にて、山内山外並に諸講中之者共一同今度之歸國差止り候様など被申候併し良慶師交代無據事情、乍殘念差下し候儀に候、先和尙前後之世話能く行届感心之儀に候、尙此上共宜敷御保護御教示退々には又

進上之候、過日は御出向の處不得費而遺憾々々其内閑日見合寛話も仕度日取の節御來賀庶幾此事に候塵事火をさるか如く實は弱り申候儀に候、夫故例の調へも頓と先月來相休漸昨今机ならへし事、書籍はまた不參、猿の木よりはなれたる如く旅寝めかし候のみに候、御歌は出來すきに候「我願ふ法の位の山ならて何にしにとてかわけのほるらん」、かねて申如く福とくはあらはれやすく智徳は得かたきもの今日にして心みられ候無慚々々『山猿の面よりわかき衣きて我わか耻をかきのたねかな』などつふやさ候御笑々々委細は蕉巖可申述候也あなかしこ

頼罷在候に付、來月より早川高野寺にて月六齋も

通以講釋可仕事に取究め申候、誠に老躰迷惑に候

へ共萬か一報恩と被存候のみに候、其内に辞世の

儀も候はんと存申候、閑暇にも相成候は、奥州邊

行脚など、存候へ共何かの業報にや不相叶は遺憾

之事に候、委細光忍子傳説可仕事に候恐惶謹言

三月廿日 回向院 行誠

無能寺琳堂大和上待者衆中

昨日初雪忽二三寸たまり候のみ、吟曰

不可得心是不真。三祇劫滿始維新。

玉塵三尺庭前雪。想像嵩山斷臂人。

二十六日夕

寶松老人足下

行 誠

(上人増上寺へ御晋山の節松濤奏成上人へ贈られし書柬なり 編者識)

慶事諸般無滞相濟難有佛天の加護清衆の御保愛恐懼不少候、扱過分の御祝儀共萬謝に不堪聊乍返祝

(左の一章は上人が東奥巡化中青森より福田新藤氏に書きをくられたるものなり、編者識)



世に机水練、こたつ評定と申すこと有之て、すはりながらの考には天下の安危も、しれざる物と存るなり、此度東奥州所々に巡察して、はしめて人法のありさまをもひしり申候、むかしは八十行脚と申事、尤のことに候、六十の手習にはあらで七十の學問を覺へ申候、是も神佛の御指圖なるべし、縁山へ参りたる御恩は是の一のみに候、後日心得に申殘し候、

みちのをくのまた奥までも我法の

道あらかざる人どてはなし

此も又かたしけなすひなまにゑも

かたき豆腐も莊嚴佛事

此外夫々紙につゝみて相届可申候、別紙は郵便に差出ことに候今日も氣分快然に候、昨日縣令公宅へ見舞申候處、今朝令公獨歩にて返禮に寺までこられ申候、いかにも眞率感心に候、法事はまだくゝをもくゝしくのみありて、却て赤而

に候、何おとも當時はおもくろしく無之様一般のことなりと知るべし、

(秋田の伊勢氏より上人へ龜綾織を呈せしさま同氏へ遊されし文なり、編者識)

短毫を以て啓呈候、秋冷愈御安全之趣重疊万賀候扱奉來結構なる秋田織御惠贈被下趣當四月下旬梵隨禪師より被申入、遠國之處毎々御厚意之志忝幾久敷領納可仕ことに候、右早々御報に可及のどころ當年は三月以來所勞にて八月中旬漸々快方にて出勤、夫れゆへ何事も惰惰にて疎濶にのみ打過申候、今日御同縣大島氏と申仁登山に付、幸に一封相托し候、委くは梵隨師より申入候、野衲も老衰極樂淨土にて再會に可及事に候、南無阿彌陀佛  
九月二十八日 八十 行誠

伊勢氏宅へ

秋田織を見て

一と筋に思ひ定めよのちのよも  
こゝろのいどを織出すなる

一月三十日の芳簡二月三日落手、其中燈ロウ堂の類認め趣折角の御依頼につきアシクモ其内閑日したゝめ可遣事に候、○土の新古云々所餘皮泥の上にての事に可有之なり、六百年來の新世界と云もオカシナ話なり有人の説の如くにてよかるへし昔混明池の焼灰を切前の炭のよしに答し高僧もあれども、聊さうけられぬとにや、凡そ人間の果報には定まりあれは土の底までの分析もチト無用にちかき論にや、近ころ究理々々と日月の分析をもするきになりてゐるなるべし、○作樂得失論大て御考への通りにてすむなるへし、申さはしれたることなり、俗人の佛を何てもするかよし法師の學ふべきものには非ざるなり、昔廬山の門人に何とやら申人か嘯くことか上手にて一嘯すれば林整

(百五十五)

みな搖くと云へり(嘯の法本邦にわたらず) 慧遠公此を誠しめ玉

へること統記か高僧傳かみにみえたり、音樂の羅漢

の圖になきにてもしるへし(廿五菩薩は有疑の天人形なれば例にはならず) も

のを鳴らして經念佛を唱誦するなど後世のことなり

り、古には絶てなきことなり、うるさきことなり

梵唄は古き格式なり經中に歌詠讚嘆の爲には折々

用ふること、云ふ、此に絲竹を加ふるは俗士の作

意なり僧者のあつかる所に非ず、今時僧中にて此

を玩ふは利益することあればよしなければヒマ費

しなり、死なぬ人のすることなるへし、又佛家の

變則と云まてにてよかるへし、偈曰

定慧不由物 戸羅豈要香

維摩時一點 勝奏瑠璃琴

諦縁度をばなれて法のとくへきものなく、戒定慧

を捨て、行の修すへきものなし、後世の佛者や、

もすれは濁乱衰變の物をもて我古佛法に混入せん

とす、學の足らざるのみに非ず信の薄きものと云



へし、對機說法も其根底するあり、普門示現も各其由る所あり、真俗を混入して濫説せざるを學道の用心とす云々

右折かく御かきおくりの御志につきて無用の辨を付す、幸に一笑を買はんとす、選擇夜講已に時に及ふ以て筆をさしたく

二月五日六時

芝園 行誠

眞洞律師足下

八月十一日

芝翁 行誠

このころは花頂學校に御出のよしありかたく候

大庭氏御主人

折かく眞正の佛法を御授け願候也

吉水のよしや濁るもくみかへて

むかしにかへせしつくはかりも

(左は或人に遣はされたる文なり、年月不詳)

(左は大坂の大庭氏へ贈られたる香簡なり)

其後は暫時御疎濶にのみ罷過候頗る不本意に候御一同御無事に候哉、扱松浦より委細申越候水災一件今古の珍事其御宿御縁家其外にも大罹災の趣嘸

立非三藏の般若を譯せられ給ひし後六百卷の文字悉く佛體と現し給ひしを感見せるよし慈恩寺の傳に見へたり、宋元の代には金字の一切經あり、皇朝にも金銀字の御經ども今も傳へ見奉る事あり今度其地にて金字の御經ども寫されしは末世にはいと珍らし、尤も稱讃すべきことなりかし、され

(百五十七)

ば拙歌一首づゝよみて參らす、これれもさる功德に結縁申さんためなりかし、弘法大師の心經の秘鍵には、一字舎千里、一點寶多生とは示されぬ、其人にも傳へたまへかしあなかしこ

字々現來金色身、偏傍照曜照人天、

卷叙殆入靈山會、金口無聲轉法輪、

乙酉二月三級考初八十齡齋贈金龍上人

字々佛體

上もなき三世の佛の御姿を

たらへてうつす法の文字かな

御佛の説る御法を寫し見れば

光りはなたぬ文字なかりけり

寫したく御法の文字や後の世の

くらし道をも照らしなるらむ

(明治十五年十月阿波國那賀郡高岡在立善寺村某寺高氏より

來狀に付き上人よりの返翰なり、)

十月二日の華翰同九日披見扱〇〇講師の趣旨亡命云云一段の御事至心歡喜に候、老迦葉の盡形杜陀趙州の八十行脚は尤も好規矩に候、妙齡の智識は豪傑の思むべき事に候、雲棲大師は「先度他は菩薩の不行と雖も初行の毒藥なり」と述べられたり尤の事に候、近來河内慈雲律師の母堂の律師を規誠せられたる文を見たり、律師の有徳常に經律を講せらるゝを指して「生涯講釋坊主になりてはすまぬぞ」と書れたり孟母斷機に譲らざる語と云ふべし感伏の事なり、貴老今度の亡命は生涯の大でさと思はる幸に其地に明師ありて密教傳授ある趣き御浦山しき事に候五百日は五百生間の修行なるべし大師の惠果阿闍梨に逢ひ奉られし思想にて精密に傳受あるべし、佛法一味なれば一門即ち普門なり一法の成就は即ち一切法の成就なれば自他宗などの偏討に及ばぬ事なり、尙ほ思ふに今度傳授密の功は即ち華嚴の法門を傳へられたるに同じか



有一偈興

遊心法界大千鄉 所到悉聞深法聲  
適逐善財童子跡 既登南海密嚴城

(左の一書も前と同じく阿波立善寺某に興へられし返翰なり)

四月三十日夜の書狀聞聲より七月末相違し克苦の趣甘心申候、魔縁發動云云尤の事に候、魔縁は得法の前相にあるべく候、降魔の後ち明星出現三十四心斷結成道は理の然るべきことなるべし、一魔の法門れもしろきことなり、畢竟不動三昧に住する心地大切なるべし、不動明王を念せらるべきこと法の常なるべし云云(此一段ははし書)

七月十七日の華誦同廿日來手扱阿州表違縁の趣風聞大に案し候處唯今の所大坂表にて華嚴經血書の趣一段難有勝縁縁なり、併し大部のことゆゑ日月を涉り可申折角云云、初修新入も當地大久保觀音

(六百五十九)

香料金〇〇欵て供養す

午年十月九日正午認

行誠合掌

某 關 梨

(六百五十九)

庵と申すに大般若血書四百卷はかり相見候、此は洞門の僧にて廿二三才の人のよし、是れは出血つきてにや書きかけて命果に候、近來のことなり、再生して書寫可申發願のよしなり、右様のことも候得は衰弱の性質の仁は堪へかたきこともあるべし、身体の程を計り勤修專一にすべし、當時自宗は勿論他門にも眞の佛法勤行の人少く候故、長壽にて弘通希はしく候へは、妄りに不惜身命は申すまじき時に候、愚老なども最早餘命無之候間ゆるゆる在命の人をほしく候、養生第一にして自行化他あらずはしく候、此段わけて依頼申處に候、資縁天徳なれば縁に任すべきとなれば外より申すともあられども、亦不自由の義も候は、何なりとも遠慮なく御申越可有之候なり、愚老などは一絲一毫みな十方僧物と心得をり候へは、誰れにも爲人爲法のためなれば虚用とも思はず候へは、誰れもかく心得たきとに候、世間順逆因縁めつらしか

十六年七月廿一日出す

凡位行人晋亦退 生生世世大概同  
因縁順逆華嚴海 用心尤在防八風  
三線老衲欽呈血書之偈

(左の一籍は明治十七年九月上人が甲州善光寺四村問禪師へ



遊されたる手翰なり、編者識

所勞再發の由さて、痛心の事に候、從來多病の性質是れも業果の所感にて據なきことに候、薄クラ尊者の如く生々無病と申すことは宿善深厚の者にあらざれば能はざることなり、達者にあらは闕藏の内願これある由に承り有難きことに候、發心と畢竟と二は別なく初後二の心に前心は難しと涅槃經に説かれ候通り讀まばやと思ふ心か難て讀み畢りたる功德に同じ候よしなり、大般若經三回のよし今生の思ひ出て此の事に候、三世諸佛依般若ハラ蜜とあれば佛々の悟りは此の外になく候是が則ち一切經に候、閑寂は此れにてすむと御心得ありてよろしく候、佛法と申は般若の外には無之候かねて御よみ味ひの通りに候、世間出世間の一切法門般若にあらざるものなければ色即是空と説かれ候なり、されば生老病死も皆な般若なり、又た維摩經は居士の病より不思議解脱の法門はあらはれ

申事に候へは病も苦しきものなから常に病即是空と観念申すべきことなり、天台の十境を説かれ候中に病患境と申すは病を以て妙觀にあて候なり、病はイヤナものと凡夫はれそれ厭ひ候を菩薩は其法を一法門として妙法蓮華經とも般若とも解脱とも観念申候尤も高上の法門なり、淨土門にては此の病門を厭離穢土の一方便門として欣求淨土の一方便と思ひとりて念佛すべきことに候、愚老なとも當年は四月以來所々參詣心がけ七月廿六日に歸山申候ところ老後の旅中何よりつかれ此ころは褥上にたり申候、年も年なり最早老病の仕舞かど観念申候、下品と雖も足りぬべし願生の念のみに候、娑婆世界の事は業報だけにあらばるゝものなればドウでもよき事を投出して微塵ほども繫念なき様に御用心あるべく候寺の一軒や二軒ヤブレ様ガコハレ様がドウでもよきことなり極樂往生か肝心の御用向に候段佛祖の御沙汰に候云云南無阿彌

陀佛

九月十三日

行 誠

戌十月二日

秀宏老和上

行 誠

上野和上(慧澄和上の御事なり)後世の枝折御上木よき御結縁のことに候、票語はさつぱり忘却申候、よくもさゝがきでもありしやめづらしく候、叔文中よみ候處少々たりあしき所ある故和泉屋より印本とりよせ一校を加え申候、もはや上木あどにや同じくは直し申度活版にてもはやれそくなり候やいか、御考御都合にて宜候、

序入用ならかきそへ申度存候、田舎などにては和上のと一向知らぬ人あるべし、小傳めきて短文にかたかながきにしてつけ置申度候、此も冊本どちが終りなば夫までのとに候、幸の事故恐老が和上結縁の緣由も少し出し置度候、御考の上御申こしあるべし、此ころは大會議何かと御苦勞に候、宗法興隆折角御自愛專一に候不具

青森縣下來迎寺檀頭石橋兵作出府にて傳聞候處御安全に御教義策進の趣珍重々々就て當人も至極至心の仁と相見隨喜の至りに候、逐日來迎寺へ一切經をも納め度由尙追々御策進成辨申様致し度且其一切經をもよむ寺主出來の趣是亦御教導有之度候、よむつもりてき申仁あらばよみ方其外心得方を可申入候、來迎寺を準檀林に致し度由當人被申候、宜敷儀ならば大教院へ御申入利害書御差出可有之候、此方へも御申越可有之此節西京に大會議ありて大教院を西へ移し申度由決議も有之趣風聞東方には何の會議も無之内評中に候、何れ左る事あらば其御房にも出府あるとにせずはなるまいと存候、東方衆にも討論是非の論もあるべく候、内々考へ置被申度、明年は北海道へ布教の由御苦勞



に存し候、願くは名利を離れ眞實に佛法弘通の候  
様希望致し候、祿中に道なく、道中に祿ありと申候  
古語味はれ、品行を慎み精勤有之様企望する處に  
候、今度書籍少々送り申候に付獲狀一通相副申候  
外々策勵にも相成候様存候、何にか用多困入申候  
講釋無障相務候御安心被成度候以上

丁丑十月廿七日

行 誠

秀宏上人御房

新曆御安全に御加壽法幸之至りに候本地無事御安

意可庶幾候也(中略)山事不可盡候、恐惶敬白

乙酉元旦

行 誠 合掌

無能大和上座下

過日は分衛上施物之内各座下より御寄贈之趣承及  
候、忝御志一同も宜敷御傳達希候、愚老も當春  
十五日出鉢已來、當日鉢中すべて建築奉納可申趣  
一同よりも申出候、愚老は最初より右の心得一同

欽祝新年、先以御堅固に加壽の事と祝候、此方一

同無事加年候、去年は四月初旬より東海道より大

坂へ向け弘法大師御年回に付高野山に參詣紀州一

見、播州書寫山參詣、河内大和攝州所々巡拜、歸

路京都近江竹生島美濃路を経て伊勢四日市より乘

船七月末に歸山に及候、其後つかれて講釋もやめ、

冬になり起信論夜講臘月に結願、當月二日より十

八物圓開講昨今結講になり候、右様のことにて久

々不音申候なり、其寺内及戒道などもみな無事に

候や、近來は其近縣御巡回でも有之や、無怠自行

化他勤修專一に候、其同行信徒たち無事なりや、

折角相つとめ候様御傳達可有之、院内取締りの老

僧達もいか、可然御傳達有之度候、去年中改革に

つと東西のかけ合始まり、未だ落着無之やに承及

候、併ししたることも無之、どこも同じ世の中

にと眞に生死解脱の人は多からぬことやとわはれ

に存候

も感荷せしものと相見申候、全く淨財なり、あ

りかたきことに候、追々其御地は勸諭有之様存候

云々、春來毎度雪、過日は壹尺今日も昨夜より今

にやまず、併し春雪はつものも相見申候、先

年くりこ山のこと毎々申出候、追々御法務御勉勵

之趣ありかたきことに候、其院内老宿共えよろし

く御傳達々々、其内に又々可申上候也

新年偶題

新曆院遷春未遷。今朝素雪亦聯翩。

寒梅適開兩三點。折挿一瓶上佛前。

齡のみいくつともなくかさねれど

さとりひとつもひらけさりけり

自駭吾齡當八十。殆乎將坐鶴林床。

青年雄志摧如土。白髮道心散似糠。

虛飾三千年弟子。傍觀八万卷經藏。

老來今日悔難及。机上徒書試筆章。

一月二十九日

無能寺老和上座下

行 誠 合掌

此春は鶴の林の夕煙

さゆるに近きわがよはひかな

ナムアマミタ佛く

(コレは拙者釋門事物紀原の校閱をわがひしとき書翰、明

治十六年のことと覺ゆ、背書讀す)

釋門事物紀原に草稿拜見心附の箇所

二十六丁右律宗の内「然れども其法未だ盛ならず」

とあるコレは鑑真來りて日本三戒壇を建つ中國は

東大寺西園は筑前の觀世音寺東園は下野の藥師寺

なり傳教弘法も此にて受戒せしを見れば日本の戒

式は此時を以て盛なりと云も誣るに非ず其後大悲

興正の二菩薩并に俊傍等は之に繼けりと謂ふへさ

にや律苑僧寶傳十五卷あり第十以下本朝の部とな

る見るへし



同丁同「開山良辨」開山の語はいか、本朝高僧傳四かど覺ゆいつ頃のことによ其派の人に尋ねたし古曰天平勝寶四年勅差住持兼司法務といへり、此中き傳には無し

同天台宗の下「密教禪旨をも兼傳ふ」とあるを密教は越州の順教阿闍梨に承け禪は沙門簡然に傳ふとありたし又三井に寺門の稱を記さは叡山にも山門の語を加へたし昔は寺門とのみ稱せり今は派の字を加ふるにや寺門の人に尋たし

二十七紙右東寺のことは宜し野山草創のことも加へたし 二十九紙右真宗の下に「其師法然上人の選擇集に依て」の文字を省くへし按するに彼の信の卷の終りに選擇の票ありと雖も此書に由て教行信證を述すと云ふほどには見えす彼の書は全く論註を依據とすと覺ゆ彼の宗義は善導より曇鸞を以て依用の祖とするか如し仍て此文の「其師以下」を省く方彼宗の本意なるへし

同左「善導大師の説に依て」を觀無量壽經の疏に依てとありたし「宗派二流云々」を門下四流あり其中今存するものは鎮西西山の二流なり鎮西とは聖光國師の門流にて方今單に淨土宗と稱す知恩院増上寺等是なり西山とは證空善慧上人の門流にて光明寺禪林寺等を本山とすと云ふやうにありたし西山上人にも鑑應正宗國師とやらん云へる證号ありし

思召候は、御直し可有之候書物御入用ならは進上可申候

九月二十九日 行 誠 青 巒 上 人

(これは奥羽へ御派出のとき秋田よりつはされたるもの書替しるす)

十月十八日晴羽後國秋田縣久保田此地は平田あつたね在住の處故、嘸廢佛の跡も見ゆへくと存の外人氣朴素信佛の徒夥きことにて所々の道場つめもた、ぬほどなり、殊に途中往來の間も樵夫漁婦馬郎舟師まで通行を見て荷をねろし合掌、中に五人三人艸上に跪坐して十念をまつものあり、感心のこと候、誓願寺と申にて縁山法語を講し、法燈を題にて十五首の歌よみて門下の寺院につかはし候、爾後はいよく挑げ可申など申居候、その中衆士慈心盈且溢。保嬰美學奏新鮮。適爲千里雲遊客。來會勝緣亦宿緣。此夕阿仁の里と云ふ處の淨

つどめても法のともしひ挑げんと 思ふ心ぞ油なりけり



土宗専念寺といへる僧來謁その話に吾郷十五六里 所の寺なる寶幢寺(今は眞言宗)あれは幸に禪師の 四方の各宗寺僧凡十五六員志を同じて縮刷一切經 案内せるなり獨りにては中々知れにくき所なり を購請せんとす御經が参り候は、讀む者も出來ぬ いける世に問ひも問はれもしてましど べしと云へり仍て此夜閑藏按と題して七八紙の勸 れもふと今日の手向なりける 文を書きて遣はず僻地にしても右様の志のものも ひとしきり世に鳴る神のおどかへて 有り都下の寺院は耻かしきなり十六ヶ寺組合にて さこゆるものは峰の松風 二十五ヶ月間に二百圓出金の由なり、廿六日雨刺 廿八日午前十時發程七里ばかり堺澤といふ處にて 一度式三四百人授戒式あり、廿七日晴また湊の滿川 一泊、廿九日晴角館報恩寺といへるに往く今日山 寺招請こゝに館山三郎兵衛と云へる大工職あり代 川をわたる凡二十余所両山の紅葉奇景いはん方な 々の善人なり五尺二寸の地藏大士を自ら彫刻す相 し、卅日雪霰終日寒氣甚し四山みな銀世界となる 今日剃度百二十人、卅一日五重式、十一月一日こ こを立ちて横手桃雲寺に着す、二日三歸說法、三 と講す群參雲の如し午齋すみて廣面村本念寺招請 日授戒百人餘、四日六郷村慈蓮寺にゆく終日暖氣 慈覺大師作の觀音大士開扉供養今夕梵壇禪師又々 こゝにて眞言僧某といへるか詩を贈る和韻再度の 入來一宿、廿八日禪師の案内にて平田篤胤の墓所 り、七日剃度式、八日授戒、九日五重この邊すへ に詣す餘は山を登る二丁余にて鳥居たつ自然石 て深山幽谷の趣なり、十日晴ヲモノ川十六里を舟 此の本念寺と申より七八丁田の畔をゆきて此の墓 にて下る今夜新屋驛大島長兵衛宅一泊、十一日剋

(奇事七)

籠にて四五里ゆき龜田稱念寺といへるに着く此寺 にて、十二日十三日授戒剃度三百余人昨今大に寒 くなり重ね着にてカヒマキなどかぶり居り申候先 つ今日までは別條なく内外無事に相濟み申候御案 山下されまじく候令室へも宜く十二月ならでは歸 山はむつかしき由に候瑋宏など至極懇篤に世話し 人氣宜く安心申候一昨夜の夢を記す

先生揮筆寫新詩。 蕩々樓頭月出遲。

談笑一聲驚客夢。 殘燈影冷未消時。

御一笑今日少々閑暇に候故ブツくとくりことす 厭倦を恐る

十一月十二日 羽後龜田稱念寺にて

行 誠

大内先生 机下

過日の風はいかゝ高みのことゆゑチトあてか強 かりしなるべしとあるもよ

\* \* \* \* \*

青盤曰、上人此書翰を十一月十二日に龜田に て書きたまひしを、如何なることか二十六日 に至り鶴岡常念寺より郵便に出されたりしな り、サテ此書翰中に平田篤胤の墓所にて、代 りて謗法の罪を懺悔すとあるを、後に上人に 謁して代懺の義と謗法懺の詞とを問ひまつり しに、左の如く書きて示されたり、しからは 事の因みに此に録しぬ

謗法懺の詞には普賢觀經の一切業障海皆從妄想 生若欲懺悔者但坐念實相衆罪如霜露慧日能消除 是故應至心勤懺六根罪と意にも念し、口にも唱 へしなり、破法罪の因果は尤も恐るべきなれば 誰もく自他の破法罪は懺悔申すことと心得べ きなり、能くも問はせたまひしものかなど合掌 讚歎す、三月廿七日行誠



四月廿日房總地方へ派出後御無音申候、其の御方にも最早御飯宅に候しや、田舎は新誌もメツタになくて今日始て四月以來を拜見申候處、(この新誌は別教新誌なり時に野生同職をかき居りし故へ拜見といはれたるなり)五月十八日一千五百三號

音書も進せ申度とは存候ども、好ま夢も見ず、各別書通の用もなきゆゑ、惰惰相加り疎濶にのみ打過申候、令室其外へも宜御加聲願候頓首 五月廿六日終日雨

房州安房郡大戸村大圓寺と申小寺にて認之

行誠 合掌

青柑 先生

竹外斜陽耀。半窓松籟親。校書終一卷。不似客中人。

此は實景なり、昨夕の作なり、校書とは西京大雲院通門教正より大經五惡辨釋と申もの七冊草本を見せられ一校してと申こと、面白くは無けれど折角大骨折にて述作せられたることなれば派出中にと申送候故、是非よみ申さねはならぬことにて、先三冊だけ昨夕までに讀み、つまらぬ議論など書加申候、其れ故に轉句にしたるなり、詩はいつも作らねと忽然無明にて一節なら

へ申候なり御笑艸に、サテ新誌中にも先達て台僧の爲めに行山願海(天台の語)と申額面を書けと請せられたる序われは作り遣し候なり、山海のことを隔句に用候なれども熟語に風韻もなく興に乗したる一偈文なり、すへて當座に書候故大方に披露になりては赤面に候間、歌は格別詩は御採用御免蒙りたし

報告書委曲此に由て忘れて居候課錢、今回差出させ申候別紙一章御慰に貴覽に入れ候、報告の因縁より感發に及候なり、河瀬氏にも宜く御傳達相願候、芝より出席もあり、十善云々のよし、不なれのことにていか、案しられ候なり、別して願度一條あり、今回宗義につき少々改革の擧これあり、一章かき加へ度義は外教防禦の條なり、先年少々見聞自筆もありしかど、皆紛失失念、當時たねなしになり候て、列文に困り候につき、彼れか新舊の異義を録し候小冊ものあらは書目御記願度(能破に達せんには所破に達すへしとわれは、少々ばかり彼等の安心を心得させたし)其外破邪の書ども近來上木のものあるべし、其等の書目共六七部御かき出し下され度(多くともよろし)、此れよからんと思召す書共成るたけ御集願度候(此事はな

るべく早く願度候)、文盲の田舎和尚だけに見せ申度(寫本は面倒なり、買はれる版本が宜し)、さて

入浴以後木會車行のたゝりにや、今までになき痔疾并例の頑癬を合せ搔痒並起り、八九月來大半平臥をれ故疎濶に打すぎ申候、昨今は少々宜き方、少々つゝ筆硯從事もできる心もちになり申候、過日は御郵書拜見普通學校れ世話あら方成辨の趣、いかばかり御配慮の御事と察申候、佛事興立門其人に非れば出來ぬこと難有ことに候、放生會第二回

し、青柑)

度(寫本は面倒なり、買はれる版本が宜し)、さて



も内からも破り外からも壊り、此れで無ければ法  
滅に至らぬものと見え申候、妙な仕掛のものなり  
前佛の末法も丁度此様なるよし法滅尽經當來變經  
などに説たまへれば、何事によらず順逆の縁につ  
いて愛想つかしなく真正の法門を取立たさることな  
り、貴老居士などは、別して宿善の種子あれば、  
成るたけ纏縛を解脱して御策勵有之度、至禱此に  
すさすなむあみく

十月卅一日 朔

行誠 啓上

大内老居士

(これは明治十九年の暮に遊ばされたる手前なりしと覺ゆ)  
過日御咄の諸宗共立英學校一條外學は英學にて内  
學は各宗大小専門學の趣、當時節にては是非無之  
ては相成らざる時勢と察せられ候、此盛舉あかり  
候は、れのつから兵役適齡などのことも自然免せ  
られ候に於ては、各宗出家者も増加し、各々も安

臘月

隱士 行誠

高崎四位の君に三世の光をたぐるにつきて

過日狂瀾賜りかしてみかたしけなみ拜謝に耐す候

五月二十四日

此にも来る二十九日の發足と定り善光寺參詣かて  
ら木曾路を參ることに候、着京の後は呈書も可仕  
ことに追々つまらぬ詠章も貴覽に入度御面倒相願

税所敦子の君に三世の光をたぐる文

候猶今日は有合候ま、此三世の光りと申文一部呈  
上仕置候、此れは序にもあらかた申す如く、河内  
の慈雲と申大徳の門人の尼のかきて其師の校正を  
得たるものにて此師の學識は宗見などの偏悞を帶  
ひす、眞の佛法を説かれ候、十善法語と申などわ  
りて、末の世の人には感伏のことに候、夫故此一  
部も釋迦一代のことを經律論の三藏の文句を意を  
得てとり合せ物語文のやうにかき候ものにて、設  
けこしらへの辞は絶てこれなく候故、佛一代の史  
畧と見つべきものに候、一代のことをかき候記録  
とも、多く此あれども、此一部に及ぶものは此な  
きことに覺申候ま、御ひまの折に御らんになり  
候様呈上仕候、猶梅村宜雄より委申仕べく候恐白



のにと参らせ候、みふの君にも一部進せ候まゝ、此御はなし御傳玉はり候様願參せ候、其内西京より申へく候なり『ひれふるもいそかしけなりいろくつのうちものしたも浮世なるらん』たれもよにあらんはとはあなかしこ 五月二十四日

今とし七十六になりめつらしきよはひ目出度事に候、唐の白樂天も、人生七十古來稀なりと申され候、此は千年も前に候、まして今の世にはまれの中のみれもの、重疊の果報に候、其上孫子もことしはみなく無事につきも相すむをみて安心に御念佛申身になりしは天下無類果報者、王侯貴人にもたくひなく候、世界の用は今日にて相濟候故かねく聴もん有之候通目のさめある間は南無阿彌陀佛くよるひる唱られ、此世の事は塵ひしはとも心かけず、常々極樂の事斗り心にかけ、まんたらやうのゑをかけ置てこの所がやがてゆきて

生るゝ所など思ふをたのしみ、生ている内より七分通りは淨土に生れて居る心になり可申事に候、今日までいきてゐて、今日と思ひて念佛申様になる事今生極樂へゆくへさしるしに候、安心して御念佛あるべし、去年はふしぎなる因縁にて長々せわになりゆるく話しもいたし申せしも、此の世はかりのぬにしにはあらぬなるべし、此方も高年になり候故ことしあたりはと存候へども、昨今の處にては當年はさばどう留かど被存候、いつれ上品蓮臺にてゆるく面會申へし、南無阿彌陀佛

十一月五日

行 誠

智心老尼へ

もろどもに老の坂をもこゑはてつ

これよりさきは八功德水

(文庫十三)

(四百七十五)

たちわかれても聲はきかせよ

東へは大かた廿四日市の

其わけの日や舟にのりの舎

西方へ引こすまでの假すまひ

柱みかくな庭もつくるな

やうくいろくの書物出来贈り参らせ候、此内たはこ入は下等の品に候へ共江戸前に候間御子息善印へ進上申候、わかき人に候へば、モチトと存じ候得共何事もクンヤク第一の世の中に候まゝ、色々好みなど不致様の手本に此位の上には不參様と心付き候事に候、此節承り候へば、或人のたばこ入百五十金もかゝり候をスラレ申候由、キモガツブレ申候、何たけ無駄の事無之様と存候なり、させるもと存じ候へども氣に入りたる無之此はやめにし候ものは、かけたるが人間世界の習に候をまなひ可申候、けさ一領(此は徳善師へ御傳へ被下べし)かたみに進上申置候、寒時は夜分の看經の時なき出してまどひ可被申候也 行 誠

松浦寛篤翁

臘月廿五日御手簡卅一日相達し拜見申候、過日は御不快の山、御平癒の段愚老も少々風氣、是もさつはりよく、不相替奔馳にひまなく候、東部の佛法も下り候のみねはく候、併し少し見直も相見候内役より申上候如く、小松宮御方初諸官員受戒の如き、當時にめづらしく候、追々は護法の方便にも相成やと見込可被申候此間

萬代はまたはと遠し我法は

けふそさかりに弘むべき時

ね經には五塵とどけどかそふれば  
十も二十もちりのよのなか  
今も猶ねもひあかしの友千鳥

と申候一笑、舍利の議論れかしく候、愚老は内役にも申さけ候末の代は眞舍利も假舍利と化し、あ



りてもをがまれ申まじく被申候、嗟峨の檀像が三  
 轉五轉にて始めて今日にねがまれ候様のものにや  
 と存候、如聾如啞の語は華嚴ならでもまぬかれ申  
 まじく候、魚養の議論おもしろく、昔しは一卷數  
 品の眞筆を、今は一行一句を経されなぞ申候、衆  
 生の薄福氣の毒のものに候、貴老なぞの筆跡も今  
 四百年も経ば一行一字が百正位の直だんに相成可  
 申候、爲子孫タントかいて置くべきことに候一笑  
 起信論により御勉強、ありがたきことに候、此方  
 にも日講相始、上巻だけは二十五日まで終り、  
 正月は五日より始申心得なり、近來にては徳門和  
 上の要決(三卷)が大つもり宜き方に候、幻虎も文句  
 の解釋はクワシク候得共、折々は僻説もまぢりイ  
 カ、の所もヤ、相見候旨なり、其方に要決もし無  
 之候はば早々オクリ進可申候、此論は小部ナカラ  
 一代藏經の註釋と見込て宜しく候、大乘同味の法  
 門を領するには、此論第一のことと定めオカルベ  
 きなり、四教五教などの法相は、機上より申事に  
 候、法に其の様のちがひはなきはづのことなり、  
 馬鳴の遺教論は、人は小乗部に収められども、そ  
 は大乘深妙の理を以て釋せられたる感伏のことな  
 り、論の五分の中解釋分が少しよみにくき文なれ  
 ども、よくよめば義記の注文深切なれば可なり領  
 せらるゝなり、余の分は別してよみよき方なり、  
 あまり末疏の法相がまじきことはよきかげんにし  
 てよみ可申ことなり、初心にはわからぬことなり、  
 始教唯識終教此論等は、佛敎は終教がとまりなり、  
(終なきる)順敎は文字なし回敎は佛果上の門法な  
 り、起信は十信中の菩薩の爲に説かせられたるも  
 のなれば、終教までにて云はねばならぬなり、天  
 臺の別敎が此れにあたる、本〇(此處一字不明)  
 中起信解行を訓る法門なれば、誰れでも解するが  
 肝心なり、最後の往生門の一段も、此方の導師の  
 見込とは、やゝタガフと云とをしるべきとなり、

(六百七)

(六百七)

文に向てよくしれるなり、本宗の高祖に系するよ  
 り初學のものは善導と同意の様に思ふものあり知  
 るべきことなり云々  
 玄譚はチト六ツカシキなり、此は法相がまじりて  
 みにくし云々  
 併四宗と定て佛法をトリアツカハレルは感伏のと  
 なり、天台は三觀の法門を以て一切經をトリ扱ひ  
 賢首は各部について一切經をトリアツカハれる自  
 在のものなり、一音演説、普門示現、すべて果上  
 自在の妙方便なり、ありがたきことなり、衆生界  
 は不自在のものにて、五蘊等の三科の法門もさま  
 りて動かすことあたはざるより、大凡差別に執し  
 て人法二我も生ずるなり、夫故平等一味なぞ聞て  
 も領しにくきなり、實に眞如生滅の二ツ、みな一  
 心轉なるをしるべきとなり、中の巻に入て氣をつ  
 けて御覽あるべし、禪僧を始め諸宗祖語が主にな  
 つて居ては解されぬなり、宗見をはづして大佛法  
 を領すれば、やがて祖語に合するものなり、ワル  
 ク、先入主のなき様に御教誡あるべきなり、不立  
 文字と云ひながら、祖語などの執見のこりては、  
 ヤハリ立文字なり、教外と云ひながら宗見を離れ  
 ざるは宗の教内なり、慎むべきとなり、祖師の五  
 千卷の黄卷は拭糞紙と申されたるなどは、思ひき  
 つて經卷の執見を奪ひたるものなり、經猶奪ふ、  
 況んや祖語をや、況んや我見をや、況んや三界の  
 縛着をや、邪正みなすて、而して後、六度四修を  
 累劫に行ふか禪宗なり、佛法なりと云ふとを、初  
 學の爲めに仰せきけらるべし云々、……寺僧のこ  
 とを戸長の嗟かれたるありがたき志なり、さる人  
 を解脱の道人と申すべし、末法は三世諸佛の昔し  
 もみな同じさまなること佛説あり、此てなければ  
 法滅に趣くとはイハレヌモノなり、佛説に虚妄な  
 きこと此にてしるべし、宗旨は成佛せず、此をつ  
 とむる人か成佛するなり、怠る人が三途に趣くな



り、起信論の眞如無明は此の傍示杭なりとするべし云々、今日も色々人の來たりなど、イソカシケレバ此にて御談義はやめに仕り候、寒威折角御自愛至禱候也、敬白

十二月卅二日後一時

行誠 合掌

伊佐岑滿居士

三四回の花墨其節拜見、爾來引移ツフキにて何となく紛雜御無音申候、先無滯轉居大安心の上、ツバリ外用なくなり先閑暇になり候へ共、日々來客など有之、併爾來は自分の用のみに候ま、追々少々のカキカケのしらべもの、上木の都合など致可申心得なり、其内發起もある故選擇集など購釋可申也、是もまた日取不定候、おまじ黙然は法門の損かとも存候也、  
西京のとサラ／＼俗論のみ、さくもウルサキとに候、當年は御忌なども本山并四條邊にても別衆に

てツト申せし由、大師様には怨もなきを右様に  
なり候は法主の不徳かど被思候、是も五濁世のさ  
まなるべし、所詮は成佛は一人のみと決擇すべき  
と佛教の當然、獨生獨死、獨去獨來の道理、唯我  
獨尊の金言、万古不動の眞理なるべし人にはかま  
ふて居られぬとなり、檀ハラ蜜は他の面をみるな  
ど大論に出されたる御尤のことなり、其地文武館  
云々のと、嗚々ウルサク可有之候得共、此も菩薩  
行の一端と心得たれば、一步一踐みな六度の法門  
に候ま、而謁の因縁もおまじ辭儀コレナキか可  
宜候、古佛の因位三千世界に身をすてぬ所なしと  
説せか玉よなれば、何事も心のむけ様にては回向  
菩提の大方便なるべし。

岑滿居士御許へ

行 誠

宗門種々變動有之、東西五ヶ本山同時退職其のシ  
リを愚老にモチ込知恩院住職推撰ナト、申出扱々  
断りてもキカス無據承諾及候、發駕時日未定モシ  
陸行ナラバ必ず例の通り嶋田より迎さし出し候間  
來臨所願に候昨今マタ何の手ツ、キモシレ不申  
候、業報因縁不可思議 ナムアマミダ佛

四月八日

岑翁 坐下

道中滞りなく常十三日着京晋山式滞りなく相濟み  
安心せしめ候和尚始主伴一同無事に候此段其地稱  
名院始め一同へ相傳申可く候扱出立前種々混雜何  
事も程よく行届き今日に及び候段満足に候院内一  
同へ宜しき様傳達之あるべく候下男病氣如何外遠  
近へも序の節程よく傳達依頼候能潤會員一同へも  
夫／＼宜しき様傳へられ度候道中日記のこと申し  
越され候へ共時々事多にて追て申入可く候院内精

々氣を附け程能看護候様尙隱舍も程よく掃除申付  
られべく候檀中世話人懇意の人々へ宜しく傳達願  
入候隨從兩付よりも宜しく申出候以上

明治廿年六月二十日

華 頂 奥

春 瑞 和 尙

列名を以て暑中御尋問御厚志忝なく候、當夏は意  
外の暑氣乍ら日講怠らす先づ無事今日に及び候、  
御休念希ふところに候、御一同も折角保養祈ると  
ころに候、今朝浮田法蓮寺飯京に付傳書斯の如く  
に候早々 八月二十三日 行 誠

能潤會創立員諸君中

ひさしの、草柴の房やこぼるらん

眞葛か原に秋風そふく

大阪龍興寺老摩水月と號す眞實淳朴能く念佛を行す、道俗歸  
向して信する者少なからず、曾て服欣心増上す、其齡八十に  
達するや、自ら誓て曰く、我釋尊入滅の年に當れり、阿彌陀



經の七日念佛の功德を以て罪障消滅し、現其人前の現益を得んと欲す、捨身の義には非ずと、法縁及本山へもいさまこひの書状を呈す、時に上人之を聞て驚て諫書を遣りて同行の僧男に諷諭せしむ、老僧之に依て大に感悟し、七日決定齋戒の念を止めて常行別時の行法にかへりたりと、之れに依て上人再び稱贊の書を示されたりしと云ふ、今左に其の二書をかゝ

願往生の人は娑婆世界に於ては暫時の滯留をもよるこふべきにあらねば、一日も早く往生を願ふべきを平常の安心とす、併しながら世界の常例因果の法の定りありて、果報の貧福壽命の長短私を以て改めかふると能はず、經に曰く佛力も業力に加しがたしと、然れば即ち急ぎても早く死なるゝものにあらず、願ひても一日を延すとあたはず、之を因果の常例とす、阿彌陀經の七日も延ひれば百日千日となるなり、七日に限るにあらず、之を尋常念佛行者の常の安心とす、善導大師の發願文も正しく壽盡の時をさす、しひて壽盡を願ふにはあらず、併て一切衆生機類多ければ百千人の中一機

一類の因縁あつて、平常と殊なるとなる人ありこれ凡夫の知らざる所なり、水月老八十の齡を以て深く厭離心を生し、佛涅槃日を限て來迎を期すと云ふ、精心賞すべし、はたして所願の如くならば別機別類の人なり、愚老の兼て知る所にあらず万一所願の如くならずんば七日を十日となし、百日となし、千日となし、常行別時の日數となさんのみ、予昔品川の海上船覆没しすでに正念にして來迎を待つ、命根定りあり今に至て死せず、これまた人力の及はざる所しるにたれり、たましく奇説をさく我に於て珍話なし、

廿一年二月廿七日

花頂山行誠

因果を以て万機普益の相傳とす、然れば即ち旦夕の來迎は足をつまたて、まつべし、壽命の長短は因果の法にまかすべき古今の常例なり、羅漢の留壽行捨壽行などは凡下ににおいてならふとあたわさる所なり、水月老宿年來厭欣心切迫するを以て來る月涅槃の日を以て壽盡の時を期すと云ふ、其至誠眞實の志は稱贊するにたれたれ共、之も亦凡夫の一妄念なるへし、しひて之を行へば一外道見に屬す、わらるへき也、老宿々善深厚信根質直幸に回顧以て回轉し淨行別時の法門に向ふときく、經論の定説にそむかす、佛祖の正典に順從す、導師の曰く佛の捨しめ玉ふ者は之を捨、佛の行せしめ玉ふとは之を行すと示さるゝ此意也、甚だ隨喜するにたえたり、愚老今年八十三後先定むるとあたはず、各留半座乘花臺、待我闍浮同行人、南無阿彌陀佛

一、自害命終は律の禁する所なり、善導大師の投身捨命は全く異典に屬す正典にあらず、熊谷の傳安西法師の跡などは一類別機の感應にて後人の模範にあらず、本宗の相傳は決疑鈔の正信本願兼信

上人自壽贊 (其九)

大黒を

ふさがる手にて

いのる人の

リヤくは

れこのしりに

さいつち



子の年二月廿九日

花頂行誠返書

水月老宿へ



遺書

其一 (回向院御在任中)

一、回向院の後輩につきて

回向院の儀は慥なる法縁もこれなく不便の寺に候、當役僧存秀随分發明にハタラキ、今度本堂もよく出来感心せしめ候随分此後住不苦事に候併し今少し年わか候、昨今直に住職申候は、不慮の災變有之間鋪とも不相知候、今六七年此場所ならぬ處にて寺持ち、追て住職候は、始終無障と思はれ候、克く勘考いたし内々山内學頭和尚(順光上人)に内談に及申すべく事に候、此事必ず々々同輩のもの内談無用に候、其方(存秀)御事、從來宜しき師匠にも逢はず我儘にそだち候故へ内外宜しとは申し難き事、時々相見申候愚拙請待の因縁も不思議の事故兼て篤く心得、行末可宜方に見繼可申心得に候處、近來迄の處何分見

留無之案に候處當春以來少々心付候哉、聊か引直り候得共、いかにも舊習いまだ俊めかね候方にも見請申候故申殘し候、今より益す志を改め歸佛修行の苦心を發し、僧情を守る志無之候ては、何處住職とも同斷に候、別して此寺は四方檀越大切の寺に候、當時廢佛めきたる世にて、何時如何様の難事發現も難計候、さればく、りぬけ候様なる危き仕儀は仕るまじき事に候、本尊の思召に叶はぬ時は可恐事に候間、能々心を静め勝手あしき事などを念をかけず、一身の淨沈にかゝはり候間急度了簡を定め相談あるべく候、此五六年同庵いたし候も、一世ならぬ契りに候故、此ほどに申殘し候、且從來其朋友と定め申す人から、皆同じほどなる愚俗に候、追て唯不善をのみさそひ申す悪友と存すべく候、若

き時は二度なきなど申は、裏店、ボテフリの申事に候、ボテフリ根性にては不相濟事と存すべく候、都合次第にて還俗する、ウナギ屋になるど申が當時の流行に候、其ハテを見よ、つゝかつゝかぬか、三寶の御罰にても、護法天神の御惡しみにても、たゞにてはすみ申間敷、其例眼前に澤山有之候、イカにも志を改め行を正し眞修實行の人となり玉へかし。

一、葬儀の事

恐老葬儀イカにも薄葬にて、リツバになき様頼み入候、上野和上(慧澄和上)御内葬の圖を寫させ置候、其通り宜敷候、先住の時はリツバ過候而しいやしくなきやうにありたし入用不足に有之べく候ま、是は世話人示談何れとも儉約に無之様可仕なり、葬祭を立派にせよと申には無之、儉約すぎると諸宗に對して不敬となり候へば一宗の外聞に候間願くは俗隊にをらざるやう

一同と相談可申なり、葬祭の間一切酒は禁之可申也、振舞たければ、余日別に招くべし、決して遠慮に不及此段遺言の旨嚴然達すべし、院内にても酒一切法度なり、法要中に醉人出て候は、急度過罰を申つくるなり、酒は起罪の因縁と梵網經にもとかせたまへり。  
内葬式 引導不用、紫衣の能化請待不及、法縁一同小經一卷眞讀、念佛一會拜香のみ。

一、錫杖一枝、鉄鉢一口循勝へ附屬の事

右剃度已來多年奉仕の勞を謝するまでにて之を附屬す、立合の上返納すべきものは此を返納し護持すべきものはこれを護持せよ、囊中の資財にれひて、生前いまだ壹錢を蓄積することを好まず、歿後何の存するものかわらん、汝循勝生涯清貧に甘じて、苟も濁富競位、當世祿々の僧徒の趾を履むことなかれ、予が葬儀等に就きて若不足ならば汝に附與する所の物件を、コレを



賣て以て其の分に當つべし、是孝順の道なり、梵網經に説くが如し、但し一杖の鐵錫、一口の鐵鉢はコシをのこすべし、汝の爲めに生々の依身を育するもの此二物にあり、是予が汝に分與する無爲の大福田なり、密教に傳ふ錫杖は地藏菩薩の三摩耶形なり、鐵鉢は釋迦牟尼佛の三摩耶形なりと、汝が鉢錫をとる所、即身の地藏即身の釋迦如來なり、自ら護りて輕心することなかれ、

甚た龜漏に候。三部抄又、ねどりてあしく候、生涯の力此にて相濟むと心得申すべく候、僧は僧にて暮し申すべく、俗に従ひ申すべく候、右つとめさへ致し候は、生涯の活計心遣なく相立申すべく、幼少より淨土門中にて撫育を蒙り候身分、酬恩無之候ては、人間何になりても、神佛の冥助にもれ申候、急度相心得申さるべく候、其ため金子入用の節は淨土よりをくり可申事と相心得可申候也。

一、和書、歌書、かながき分一式大賢へ附與の事  
右大賢に遣はすべく候、大賢事菩提心いさゝか厚からざる方に候、随分發心修行專一に致すべく候、其方の果報は大凡みえたる向に候ま、よくをかはかず、眞實修行の志をねこし申すべく候宿善はすこし有之故、歌も少々はよめ候、幸に今一段國學を學び、御傳、語燈錄、三部抄の注釋

其二 (明治十六年四月、増上寺御在任中)  
今日行乞四月二日風氣にて痰出候故か、今夕聲枯る振出し吞む、金櫃曰聲墮者死焉とみねたれば、今夜死するもしれすと思ひ、念佛し乍ら遺書少々書

著述心懸申すべく候、翼賛は杜撰多き書さぶりに候故、是非改作致すべく候事、實にしらべも

一、外にもかき置如く葬式は極手輕併先例もあり各宗の人多く輕しき儀にすべし、眞俗拜參の人に流末此なき儀、夫々あり立になり、尤金錢は一錢も遺財めきたると無用なり固より多はなし、少々あらはみな施行に用ふべし

墓は當山代々ならぬ處なるべし、無逢塔でなく、地藏か觀音を丁寧に彫刻して黒本尊の前などに安置して、人に結縁せしむべし、此は臘石か寒水石などにて造するかよし、上手の石やに申つくべし、大きくはいらぬ、三尺か二尺五寸位なるべし、常に華などを供養すべし、此外位牌所等は無用なり、葬式法事入用には慳惜なく儉約無用なり、

固より多はなし、少々あらはみな施行に用ふべし、あちらこちらへ祠堂など、名け申ものをつけましくなり、一周忌後香花料なければなきま、法事ができねばできぬてよし、志しある者はか參りするは勝手次第、參り度なき者は參らすともよし、夫ては見聞かわるいなと云て、見聞の爲に法事などを勤むるとは予冥中にて此をうけず、眞實に自他同生の念佛申す人かあらば、夫を千僧の供養としるべし、漢語燈錄の終の大師の遺誡に準ずべし、此吾宗の龜鑑なり

- 初七日 大經上梵網經 二七日 同上分 同
- 三七日 同 下半 同 四七日 同 下半 同
- 五七日 觀經中 同 六七日 同 中 同 終
- 七七日 小經全 遺教經一卷

出家はもとく一粒一錢もたぬか檀特山の芳跡なり夫故手は自分にては、つとめて資財をつかひ拂ふをなせり、但借りはなし、かりて倒しては罪になる、予か弟子門人此を心うへし、ざるを錢を

當日說法一座あるべし、右相當に布施物引之布施財引足らすとあらば、法衣并に諸具うり拂ふへし、弟子法類共とても遺書の外はむさほるまし

はしがるは何にするつもりや、我を省りみて信施を俗事につかはぬ様にすべし、實に無間の業因と



なる恐るべし、予は人に惠施するとは聊さ、かも  
をしまぬ、ただ榮花の爲め名利の爲め散財すると  
を好まぬ、堅く慎て三毒の爲には一錢も費さぬを  
平生の質素とするなり、左思ひても、自然むだの  
とに至る者なり、毎に慚愧することなり、

寺持ち坊主は全躰根性のいやしきものにて、本堂  
の、くりの、再興のど名をつけて、蓄積するを常  
職と心得たるより、日夜貪欲を習練するなり、他  
生餓鬼界の宿因たるを忘する、何ぞ愚の甚しきや

在家の者猶少し志ある者は此に至らず、出家の人  
にして耻るとなきは、もと卑賤に生れ、困窮に育  
ちたる悪習より、みだりに位官職衣をてらひ、盜  
財を貪るもの多し此らはみな、佛法をつぶす輩な  
り、佛法を守る人に非るなり、其人々か、自ら通  
妨釋を作て曰く、末法なり、澆季下根なり、下智  
なり、佛も此をゆるしたる經文あり、親鸞はなる  
ほどよく見ぬかれた聖者なりなど、己れか得手

には邪義とも云ぬぬこになりゆくぞ、なるほど末  
代なりけり、されど、苟も我黨仁人君子の域に在  
て教導を職とす、自らいましめずして人をいまし  
め、自ら教へずして人を教ふ、其無實不信、无慚  
傲慢以て名つくる所をしらず、梵網經に畜生に比  
し、木頭に譬ふ、果して其責を免る、者なしと云  
ふへし、餘人は且くわく、予が門人は此旨をよく  
く解會して、邪見の人となることなかれ、此れ  
吾が遺教經なるを、畢

法寶の事、縮刷一切經、右經本の少き處に贈るへし  
小弟等閱藏の志あらは縁山藏經か、或は餘處の  
經本を借用して讀むべし、尤も年月を限りよむ  
べし、長くかゝるべからず、魔障あるものなり  
佛像の事 仙洞傳來の本尊 右某寺内佛に安置す  
べし  
御道具備へれくべし  
僧寶の事 容齋筆五百羅漢十五軸

右は今般某大戒受得の褒賞として此を附屬す、  
法眷異議すへからず、年月勤行法等別記す、一  
回と雖も省畧すへからず、万一某命終後、何宗  
と云を限らず、其供養法の勤修名利をはなれ  
たる者に附屬すべし、此れ大聖の御素意なり  
苟も其人なければ蠶魚の桶巢となる、恐懼も少  
なからず、此事施主加藤氏にも此を約す、急度  
申渡すものなり、本所羅漢寺先住某の現爵、尤  
も前車の覆轍なり、尋常人情の及ふ所の物に非  
ず、護者懇勸に肝銘すべし

書籍 諸部 宗部

宗學校或某山住持備用か、或は法縁の内にて願  
申すとなら評議の上何れの向へも寄附すべし、  
十善法語 數部 右某あつかり置、有志の者へ施  
し申すへく段千住律藏の志なり、らちもなく散  
らすへからず、願はくは他日之を講すべし、  
予が持物は書籍の外一向これなし、此餘法衣服巾

の類、がらくた道具、かけもの、書畫等は其時に臨  
て向々へ遺物にさし出さるゝなら出すべし、併一  
通りは義理もあれば捨ねくと無用なり、毎に餘處  
よりももらひ居れば、やることは僧俗とも多少遺  
すべし、親疎多少はありとも無汰沙なるべからず  
先に人の亡後をみるに、法類共かよさ相なもの  
取て、つまらぬものを他へ出すが多し、あしきと  
なり、夫故法類は何もなきこと定めて、他へ出す  
かよき也、予は師匠のもの一つももらはず、某山  
莊譽の没後、かれらか取計ひにて銀のふるぎせる  
一本ど、つむぎのわた入一枚を送りこせり、某か  
轉昇の時、法縁にて某山住職はありかたきと思  
ひて、其時身上は大過半進せられたれども、分具は右  
の通りなり、予はさるとはあてにもせざれば、心  
頭にかけされども、此は不でかしなりけり、澤山  
わたる人には早世しぬ、福分か分にすぎたるなる  
べし、予今日まで長壽す、今日に及ふとは質素等



心の功德かとおもはる  
 回向料并遺物ヶ所大てい懐中手帳にしるしたけり  
 界内諸宗の自他にわたるは取落これなき様、別帳  
 につけ出して取計ふへし、派出先、懇意向、托鉢  
 先、場所々々懇親の所、年來懇切の衆中同断、別  
 して困難のものへは備へもの等なくも、聊かつ、  
 なり共施すべし、養育院、訓盲醫院、種痘醫院、  
 病院右等從來何ぞと心懸候へ共、いとまなし、聊  
 つゝもてさるなら寄附すべきと、此らは是非と申  
 すにはなしあまりわらはと云迄なり  
 沙門の資財は一己の物とてはなきなり、三寶物か  
 法界共同物の内、一分衣食にあて置くなり、肉妻  
 子物はなき等なり、飲酒非法の資はなきはつなり  
 無理に用れはやかて墮獄の因となる、己れ一人墮  
 獄するのみに非ず、從類すへて墮す、れそれさら  
 んや、又あはれまざらんや  
 人か遠方へ行時は、のこり居るもの餓別するがき

まりなり、愚老十方億土へ旅立すれば、何ぞせん  
 別あるべきを、やるともならず、もろふともなら  
 ねば、葬式法要其他かたつけものするか餓別と思  
 ふへし、せん別も出さず、あまさを設けやうにか  
 かるは非法なり、又亡人の許さるるものを取るは  
 經にはゆる鬼神物を盗むなり、きたなきとなり  
 併し此の盜鬼神物の人が、れしなめて、あり相な  
 り、沙門は慎むべきの第一なり、今の寺に檀那の  
 死錢を得るとを望む、此を邪命と名づく、五種邪  
 の外なり、れた、れん坊の所爲なり、志あるもの  
 は寺はもつましきとなり、併此も業報なれば持つ  
 へき寺は持ねはならず、唯自ら慎て、強て鬼神物  
 を奪ふべからず

吾法縁に列する者、一日なりども此志をつぐへし  
 流俗無慚の僧侶となるとなけれ  
 癸未四月一日夜灯下に記す 行 誠

其三 (明治廿一年三月廿九日知恩院御在職中)

一 當分の様子にては一度全快に趣候歟ども被存候  
 (二月中迄) 併體力よほど弱り立派の勤め向きはで  
 きましく候、尤四月御忌はつとめて出勤はてさ  
 可申か、五六月の東旅は其時のも様なるべし前  
 以てはさめられす  
 一 右のも様に無用の人となりて大職に臨み申る  
 事尤痛心不本意のとなり、とにかく、當年中に  
 隠願と定め申度併門中一同にて不承知は可申候  
 せ、急には、ラチアクまじく候  
 一 廿三年は國會年につき世界隨分サワカシク可有  
 之候得ば、なるたけ隠居のとどかねて覺悟申所  
 なり、サラは是非廿三年春中にかた付可申候  
 一 當本山も例の困難一件ハテくイカがなりゆく  
 や、案しられ候、なをむつかしからぬ内に片付  
 申度事  
 一 易に杭龍有悔と申候、御隱館かちかき手本に候

況や世の變化にて大火大災時に臨ては逃れられ  
 さるあり、かねて用心あるべきが君子の處世に  
 候  
 一 右の心得方に候故會稽方も隨分借財などできさ  
 る様に其方の心得にあり、漢の肅何あつて高祖  
 は四百年の治世を開かれたり心つけ可申事  
 一 貴坊も久しく寺もわけおき申事不都合、なるた  
 け早く片付可申方方なり  
 一 萬一東京にて隠居て候は、厄介乍、ヨソく  
 の世話にならぬ様致度なり  
 一 貴坊ことも年來堅固につとめられ候故、一同隨  
 喜して深川なども出來候と面目のこと、ありか  
 たさとなり、予か没後といへども、大切につと  
 め申すへし、今二十年つとめられ申さは、芝か  
 御當山へは是非瑞世の吉祥あるべし、夫故諸事  
 恥辱なき様積功累徳を行ひて、流俗の中間に入  
 らざる様可有之なり、當時の在職の人々をみる



に、兩三輩を除ては上分の瑞世なりかたき人の  
 みなり、夫故イカサマにも辛抱勘忍ありて予か  
 汚名にならぬ様にありたきなり、  
 一 扶宗護法の志第一なること、常々みらるゝ通り  
 なり、且トニカク平日なくさみの様に讀書すへ  
 し

五百羅漢聖幅護持方軌

一 一年兩度彼岸貴坊所居に於て舊規の如く供養す  
 へし  
 供養式の具畧は隨時不定なるへし一七日を期し  
 て稱讚并に道俗の爲に説法すへし羅漢應現傳三  
 冊附屬之、兩回の供養雜費金貳拾圓限  
 一 貴坊命終後之附屬は弟子法類たりとも護法尊重  
 の志淡薄の衆えは傳持すへからず若くは他宗他  
 門也共其仁物護持すへき器と見得るに於て附屬  
 すへし宗縛類執を捨離して無所得に住する固よ

り大醜の公意なるを以てなり  
 一世間無常なり萬一世上飢饉其天下の大災等有  
 之候節人溝壑に顛れ乞人土地に充滿する様の時  
 節あるに於ては僧徒は大悲心を基とし衣資寺産  
 を盡して窮迫を救療申すは固よりの志なり右様  
 に及ば、無遠慮此聖書を賣却して米錢に易々存  
 者得樂の方便とすへし 價直の高下を論せず救窮に急な  
 るへし猶此事を施家へ斷るへし  
 微塵斗りの懸着心を懐くこと勿れ但し造像起塔  
 等の容預の喜捨には之を禁す是鐵眼禪師經版の  
 財を以て救飢を行ふ兩回到に及ふに倣ふなり  
 右三條を以て聖像護持の方軌とす一切有爲法如夢  
 幻泡影と説つれば此とても決定の法あるに非れど  
 も一日の護持は一日の護法扶宗也乃至百年に至る  
 如是是を以て尊重珍敬供養するに於て廣くは聖跡  
 安寧國家安泰の御祈りなく遠くは怨親平等存亡衆  
 生の回向なり自行化他茲より發生し福德智慧茲よ  
 り出現す苟も輕賤玩弄の志あらは現當過罰決して

(六六六)

空しき事なし恐るへし昔し本所羅漢寺の五百羅漢  
 地震出水の爲に損壞視るに堪ぬす愚老往て此か洗  
 浴を行ひ假屋(四間)を造りて遷座し奉りき當日住  
 持に言て曰く師也聖像を以て塵視泥觀す果して過  
 罰あらん請ふ奉仕尊敬舊式に還れと後年傳聞す此  
 僧木より墮ち石に首を損じて死せりと蓋し慳吝輕  
 賤自業自得の報を獲たる者なるへし、前車の誠あ  
 り幸に撥轍を恐るへし録して護持の人を誠む苟も  
 其人を擇ふは所謂其人を憐むか爲なり明治十六年  
 三月三日附屬の日

三縁山沙門 行 誠





年  
外  
海



いまよりはいつとしはかりの水な月此書ある人のもどめによりて筆をそ  
むけふにしてこれをみればかきさまのつたなきよりことわりまでもうと  
うとしうなんきこゆる事すくなき折をみて改めかきなほさはとれもふ  
なり扱をすこしは見らるべきかたにもあなるべし其かみ一日二日はかり  
のうちなどあつらへられしよりかくてかなしきさまになんなれりものは  
いそきてはすましき事にこそ

とらのとし

行誠しるす

を み な へ し

和泉式部が家の前を人の女郎花もてすぎけるを見て、いつくへぞとどひしに叡山  
に供養せんとてゆくど、こたへけるに、

名にしれば、いつのさはりあるものを浦山しくものほる花かな  
とよまれきけに女は罪ふかくうまれ出て、三世の諸佛にもきはれ、十方の浄土に  
もとぎゝれて、出離時をうしなひ、解脱道を忘れたり、はやくぼだい心をねこさすん  
は輪廻はたはるかなるへし、抑二千八百年のむかし、釋迦牟尼如來世に出させ玉ひ  
て、八万四千の法どかせ給ひしかど、女人の後世ぼだいの道たやすくしめし給へる  
法門いとまれなり、たゞ無量壽經の四十八願の中、第三十五の願のみひとり女人の  
菩提の道ひらくへき御願にてそ有ける、いでやその願文のこゝろをしめさんに、ま  
づ初に本願の文をしるし出し、後に其願のこゝろをこまかにときわくへし、初に本  
願の文とは、

設我得佛、十方無量不可思議諸佛世界、其有女人、聞我名字、歡喜信樂、發菩提心、厭  
惡女身、壽終之後、復爲女像者、不取正覺。



後に此願の心をときわくるに、三段にわかちてしめし申べし、初にはほどけ此願をたてさせ玉ふ心をとき、次に厭悪女身といへることばを釋し、後に女人此願に乗せざれば後世たすかるまじきよしをしめす、初に佛此願をたて玉ふころをときかば、そもく、あみだ佛まだばさつにて法藏比丘と申玉ひしころ、世自在王如來と申佛の此世に出現まし、けるに逢奉りて、はじめて此願をねこし、玉ひしなり、ねよそ佛ばさつの一切衆生救ひ玉ふ御志は、父母の子を愛するにもはるかにまさりて、それが中にも十惡五逆なぞ申すすまじき罪つくりたるもの、或は女人なぞの佛法非器の人をば、わきていつくしみおはれみ給ふなり、其中にも惡人なれども、をどこはさしたる事もなし、女は解脫の道に遠きものなればとて、とりわき女人ばかり救ふ願ひとすぢねこし給へるなり、女も男もねなじ人の身をうけたるに、とりわき女のみを願にまうけたるを、大悲きはまりの様にまうすは、そのいはれある事ぞかし、抑男女は境界のたがへるものにて、其かたちのことなるより、心もしたがつてたがへる物なり、されば男は天に配し、陽に配し、輕くやすらかに、心もすみてうまれ出、女は地に配し、陰に配し、たもく六ヶしく、心もにぞりてうまれつきたり、かたちの上にても男は進退出入もかるらかにして、六かしからず、女は門を出るにも必ず其面を蔽

へ、夜るゆくには燭をとれなぞ曲禮と申す書に見えて、むかしよりいとむつかしげに生れつきたり、ころのかたにとりても、をどこはころもちかるく、やすらかにして、水のすみたるにたどへ、女はかたくなにむつかしくて、水にたどふれば、いと濁りたるものなり、何事につきても竹の葉わたる夕風の、さらくどすいしからで垣根のいばらまがるかたにのみ従ひやすく、たなじ人の身ながら、陰陽はるかにへだたり、曲直ことの外にたがひたり、をし鳥と申どりは雌雄つがひてすめば、彼のうさねいとしづかなれど、めとりばかりをかひたる時は、夜るひるにさわざあらそふとぞ、此鳥かひたる人のものがたりき、女とてもさすが人の身うけたれば、此鳥のやうにはあらねども、ころゆくかたはれのづから相似たるにや、されどたなじ貪瞋痴などのぼんなうも、殺生邪淫などの惡業も、男のはかるく、女のはねもげにぞ申傳へたる、疑心と申も十煩惱のひとつにて、男もたがはでれこせども、女の疑ひはわきていみじくつよきよしなり、右のぼんなう業のつよき殺、盜、淫のまされるとをすなはにしりても、佛法にいりたゝさる人など、後の世は無しなど思ひ、又はたとひありとも、女なぞは救はるべきよしなからんなど、疑心ひとたびねこらば、千引の岩は引かへすべき方便なかるべし、されば疑煩惱も男子にまさりてつよかるべし、むかし



今の物語りもいと多かれど、後のくだりにしるし申べし。さうれ石はさゝやかなるものなれば、かひなき女童おんなごころのたな心の上にもものせつべし。苦くるしみむせる岩はとなりたるんのは、大きな舟にあらざればのせはこふことあたはざるがごとく、罪障つみざらもかろく、ぼんなう薄うすきをどこのかたは、佛ほとけばさつ方便も御力ごりきねはくついやし玉ふに及ばじを、女人ばかりはもとより罪障つみざらふかき上に、疑心ぎしんなども世につよくて、浮うぶべき期もしられざることを、ふかくあはれみ玉ひて、さてぞ法藏ほふぞうばさつのむかし、第十八の願には十方衆生と誓はせ給ふ上、また第卅五に女人往生の願をたて、大悲の御力をつよくかけさせ玉へりしなり、女人往生を別に誓はせ玉ふよしあらしかくの如し、このころ、ある上ろうのまうできて、承りたき事の侍るをこたへ玉ひてんやといふ、何事にかと申ければ、すきしころ、ある上人のいへるには、法華經に八歳の龍女りゆうにょ、法花の功德によりて、無垢世界と申にて、たちまち成佛の相を現じ玉へり、ことに法華經は一切經中の經王のよしとかせ玉へり、釋迦佛をすて、阿彌陀を念じ、法花經をさしたきて四十八願をたのまん事は、ちかきを捨て、遠きにゆき、たどきをなげていやしきをとるなり、女人成佛と申事は、法華經にかぎりて餘經にはなき事なりなぞ、理りをせめてとかれき、今聞とは水火各別なり、いづれにかより侍るべきと

問はれき、それに答へ申し、旨をいさゝかするし申べし、抑一切衆生はさましくにうまれ出でて、かしこきものあり、たろかなるものあり、たとき人あり、いやしきひとあり、心のひろきものあり、心せまき人あり、人心れもての如しとて、百人百種にたがへり、ひとすぢなるべからず、こゝをもて佛の說法もひとかたによらず、千万にわかれたり、小機のためには小法をとき、大人のためには大法をとき玉ふなり、維摩經には是を病に應じて藥をあたふるが如く、機に對して法をときとなんしめし玉へる、かたくなに申すべきにはあらぬなるべし、何と説かせ給ふとも、みな般若波羅蜜はんにやばらみつより涌出ゆしでつし給ふみ法なれば、いづれも甚深じんじんみめうの法門なり、釋迦如來しやくたにょらいむかし三十の御とし、御さとりひらかせたはしましてより、八十ねはんの夕まで、一代五十餘年の間、はしめ鹿の園生の御會座ごかいざより、をばり沙さらそう樹じゆの夕まで、たよそ八万四千の法門と申せども、其まことは無量無邊の御をしへなるべし、此中に片言のあやまりなく、一語のたがへることなし、いづれかよくて、いづれかあしと申ことのあるべきぞ、たゞ機根のすぐれたる人きけば、あさき御法もふかさとりとなり、機根のねどりたるが承れば、深き御經もあさくぞさとりられける、西行法師の月やは物をとなげかれしも、紫式部はうはの空にもとらみられたるも、たなしみそらの月かけなれど、



物思ふ人々の心の上には、うらめしくもみなげかしくもながめらるゝぞ、いとをか  
 かしけなる物なりかし、佛の道もそれとねなじことにて、いづれかよき、いづれかあ  
 しと申事たねてなき事なり、淺深勝劣はみな其人によりて申事なり、其證據一つ出  
 すべし、ひかし釋迦如來鹿野苑と申す處にて、まだ初學の御弟子衆のため、阿含經  
 と申をとかせ玉ひぬ、此御經はこゝろあさく、筋いやしく説て、いとうひうひしくぞ  
 をしへさせ玉ひたるなり、さるを其時虚空にはべりて聽聞し玉ひたる、梵天帝釋な  
 どの諸天人、毘沙門廣目などの天衆たちは、げふは不思議の大般若經とかせ玉ひた  
 るとぞ窺はせ玉ひぬ、此天人たちはひかしよりねはくの佛に逢まゐらせて、久し  
 く大乘のふかき法門をも聽聞し玉ひて、たかきさとりをもひらき給ひたるぼさ  
 つたちにいませりければ、かるくあさあさしく説かせ給ひても、やがてれもくふか  
 くぞ聞なされ玉へると、天台大師はとかせ玉ひぬ、これを佛法はいづれもねなじこ  
 とにて、ふたへなしと申事を、かうこそ心得申べきなれば、機に叶はぬをしへはふか  
 くとかせ玉ひたるも、あさくさかれ、機根に應じて利益あらはれぬれば、あさき法も  
 ふかくたどくなるなり、法花經を經王と唱へ、龍女の成佛と申事も、其機根に叶ひて  
 利益あらはれてこそ申所なれ、われらが分にては、結縁と申名もはかり申べき事

にてぞありける、それを龍女成佛と申ことばのちかきをとりて、法花つとめよ、女人  
 は成佛すなご、ねほらかに申ちらすは、かへつて法華經の旨にはあらざるべくして、  
 佛の御こゝろには叶がたきにや、龍女成佛と申事いとたどき事なり、ついでに御經  
 のこゝろをつまみてしるし申べし、法華經第五提婆達多品にとかせ玉へるは、大海  
 の中に沙竭羅龍王と申龍神あり、それが娘に八歳の龍女ありけり、文殊菩薩にした  
 がひて靈鷲山にまうで、釋迦牟尼如來に見え奉りけり、如意寶珠と申たまは、ふたつ  
 なき龍宮のたからなりけるを、父の王に乞申て、もてきたりしを、けふの御布施にと  
 て釋迦牟尼佛にぞ献し奉りける、佛御こゝろよくうけさせ玉ひたるをみて、龍女い  
 どうれしげに御座をしりぞきて、御弟子の智積菩薩と申に向ひていへりけるやう  
 には、我つたなき海鱗の類に生をうけ、人天の果はうにだも及ばざれど、宿善たいな  
 らず、今たまたま釋迦如來に見え奉らせぬ、今は成佛の期はともあらしをなごほの  
 めかし玉へり、智積ぼさつと申は、まだ御さとりたらざるぼさつにや有けん、龍女が  
 かくほのめかし玉へる事をきゝとがめ玉ひて、おな思はずよ、ねよそ女人には五障  
 と申事の侍りて、梵天帝釋なごきこゑつる世界の王にだもなられざるを、まして女  
 人のいやしくけがれたる身をもて、無上獨尊の佛の御位にのぼらんなど思ひもよ



らじと、こばちしかり玉へり、龍女此をきいて、たもむろにこたへていはく、善惡の因果はかげとかたちどの如し、寶珠を如來にはせし奉れる此果報、いつくにかむくはん、たゞ佛果にこそむかふべけれ、われたい今その佛果をしめさんとて、見るがうちに女身をてんじて、三十二相の佛形を現じ、南方無垢世界と申にて八相と申大なる佛事をあらはし玉ひたるを、智積ぼさつ舍利弗尊者などの、當時の衆會まのあたり此不思議をみ參らせて、はじめて佛道にいるものは、遲速遠近はあれども、一切衆生悉皆成佛すべきものぞはさとられたりとなん、さて此龍女をいかなるものとかしる、諸佛所説甚深秘藏、悉能受持、功德具足、とて、形こそ龍女なれ、其さとりは文殊、普賢、觀音、地藏などのぼさつにねとらざる御さとりひらかせ玉ひたるにて、授こそ於須臾頃、辨成正覺とて、見るがうちに成佛の相を示現し玉ひしなり、されば天台大師は普現色身三昧の示現する所なりとぞ、文句と申文にはとかれたる、何の修行もなく、何のさとりもなき人の、法華經一度讀誦し、題目一遍唱へたるが、すぐに龍女とねなじく八相成道し、南方無垢世界にて佛身を現するやうになど申事のあるにはあらざるなり、さればとて、一句聞法の力むなしからず、成佛の遠因とはなり侍れど、けふより幾百千万劫をへての後をへされば、あたはざる事なり、あやまてたの

れど龍女と同じほなるものなぞ、たもふまじきなり、こは増上慢と申ておそろしき罪うべきなり、抑成佛と申事は、釋迦彌陀藥師などの多百千万劫の修行成就し給ひ淨土を建立し、一切衆生を利益しつくしたる人のなれるにて、わづかに此三千界のうちになじひどりぞまじしけるなり、たれたれもみな佛になるなぞ申事は、佛になれる遠き因縁となれるにて、すぐにと申にはあらぬなり、慈惠大師ののり玉ひたる車の牛の、たのがよだれにて、たのづからかさたるやうになりたるをみれば、歌によまれけるとて申傳ふるをきけば、

草も木も佛となるときくものを心ある身のたのもしきかな

これ法華經の功德、即身成佛の利やくよみたるなれども、これも心あるほどのものは、みなほどけのたねもてりといへる涅槃經などのころをよめるにて、たれたれもすぐにはどけの姿あらはすなぞ申すにはあらざるなり、天台大師は六即と申事をときて、成佛と申にも六しなにかれて、ひとかたならずといへり、凡夫の身なからずぐになぞ申すは理即の佛とて、佛の名はありても、たどからぬほどけなり、ことばに成佛と申せるを、かるかるしくは思ふべからずといましめ玉へり、されば法華經の結縁なぞは成佛の遠因なりとふかく信じさせ玉ひて、なほざりにおぼすべか



らずなほざりに思へば、ひはう正法の罪うる業となるなり、たゞし成佛と往生との  
 わかれめをよくしるべし、成佛と申は右申し、如く、凡夫などの容易にうべき位に  
 はあらざるなり、いといと遠きことなり、往生と申とは、此身の一生をつくして、この  
 後の世にはすぐにおくらくの蓮臺にたましひをやとすなり、これは百年ばかりのう  
 ちにて、いとちかき事なり、これは罪ふかき障りなほき、凡夫の身をあらためずして、す  
 ぐゆかるゝ所なり、これをたどへて申さば、成佛は一國の王となるが如し、煩惱の歎  
 をきりたいらげ、法王の御子なりと申さどりひらけて、一切衆生みなすくひて後に  
 こそうべき位なれいとくむつかしきことなり、往生と申ことは其國に奉公給仕  
 に參る如きものなり、何様のものにても參るべきゆかりもどめつれば、ゆかるる所  
 なり、たどへは奉公には、かるきもれもきもあれど、人をもゑらばれず、うつはにもよ  
 らざるなり、いとなしやすきわざなり、されば往生すと申事は、後に成佛すべきの下  
 づくろひと、しり申べきなり、法華經にも十方の淨土に往生せよと所々にどかれた  
 るは此意なり、されば成佛はきはめてかたく、往生はたやすき事なりと申事をよく  
 よくしり申べきなり、其事もろこしの善導大師（七三）のしめされし御ことばに見ゆたり  
 かく申たらんには、いかほぞれるかなるものにて、よくわかれぬべしと申したり

き、阿彌陀如来、女人往生の本願をたてさせ玉ふこと、あらましかくのごとし、

此外に薬師の十二の願の中に、女人、男子の身に轉ずといへる願あり、今の本願  
 に相似たりなぞ申すことも侍れど、事しげければ畧し申なり

次に女人は必ずたのが身を厭（七四）惡すべしと申事をとくべし、法華經には諸苦、所因、貪  
 欲、爲本、どもどかれて、男女ども、此世界にも、たのが身にも、貪執してこそ、生生世世の  
 迷ひはさめぬなりけれ、されば善導大師は生死甚難厭（七五）といましめ玉ひて、たしなへ  
 ては厭離穢土（七六）とは教へ玉ひしなり、中につきて女人の身は愛執（七七）ふかくうまれつき  
 たるより、其身をいとひにくむなぞ申事は、かけても思もよらず、さる事承りてもう  
 るさしなぞねぼすべし、遺教經にも我は病をしりて薬をあたふるものなり、服する  
 とよくせざるは醫のどがにあらすどかせ給ひつれば、うるさしと思ふ人はた  
 もふべし、いでや佛のどかせ給ひつることばども、どりわつめてしるし侍るべし、た  
 よそ佛教に女人のよからざる事をどかせ玉ひたる、千も萬もあり、くはしくはのべ  
 がたし、今唐の道宣律師（七八）と申せる大徳の淨心誠勸と名けし書に、かゝせ玉ひし女人  
 の十失と申事をうつし出して、扱それにもかしばなし、いさゝか思ひ出る事をしる  
 しつけて申すべし、童部たちにも此通りを傳へ給へかしと思ひ侍るなり、十失とは



- 一には貪婬
- 二には嫉妬
- 三には詭曲
- 四には放逸
- 五には悪言
- 六には背夫
- 七には姦儉
- 八には貪財
- 九には欲火
- 十には不淨

なり、  
 一に貪婬とは、貪とは心になふことに執心のふかきなり、これは何の事にもわたれども、わきて色欲をもとゝときたまへり、此國を欲界と申事は、淫欲、食欲、睡眠欲とて、欲ありてぞ名づけたるよしなり、禮記と申す文には、飲食男女は人の大欲存すとどかれて、ふるさむかしより今の世までも、ななしさまに心をつくし、思をこがす境界とはなれりけり、それをどこもねなと煩惱なれども、わきて女は甚しきよし聞ゆ、もろこし陳と申國に、夏姬といふ女は、みたひ后となり、七度請侯の夫人となれりしとぞ、陳の靈公も此女のためにころされまし、申公巫臣と申もこれがために三族を夷げらる、れそろしき貪婬のさまなり、されば此道をよくつゝし、しみ申人をぞ世には賢人君子などほめ申すなり、煩惱無邊なれども、誓願して斷せんと佛の誓はせ玉へるも、かばかりのさづなきらんとての御てななりけり、つゝしむべきことなりけり、

二には嫉妬とは、物ねたみするなり、人の上に幸ひあるを見て、浦山しく思ふより生するなり、をどこの上にもそなはりたるばんなうなれども、女人の上はわきてはなはだしきなり、むかし漢の高祖のささき呂后と申あり、又高祖の妃に戚夫人と申侍りて、趙王如意の母なり、高祖の御心には、此如意を太子に立てばやとをぼし、かど、ささきまの障る事ありて、さもせられずなりて、呂后の御子惠帝を御世はつがせられける、いくほどなく高祖崩御ましましけり、としおろにくしとれもひしかど、高祖の御寵愛ひまなくしてすおしつるを、今はたれにかはばからんとて、呂后の戚夫人をとらへ出して、これをしばり、まづふたつの御まなこをくりぬき、ふたつの御みゝを火をもてふすべつふし、ものいはれぬ藥をのましめ、さて兩の御手、兩の御あしをきりすて、これを人毘とんなつて罪人をわくひとやのうちにぞなけいれられける、いたましきかな、戚夫人は玉の如き御かはばせ、雪をあざむく御はたへ、たいあけにらみて、きも消え、たましひはろびて、苦痛申すばかりなけれども、聲をさへに出すことも叶はさりけり、あやにくかひなきいのちはまだつきざりければ、あるにもあらで苦しませおはしけり、嫉妬の婦人よにもねはけれど、かゝる無ざんなるせめさいなみは、もろこしにも、むかし今、ためしなかりけり、さるたゝりにやありけむ、呂



后の一族ども、後にむはんして三ぞくみなたいらげられ侍りき、いとれそろしきわざなりけり、抑れのが果報（はつぱう）のつたなきより、世のねばへもわるく、寵もれとろふるなるを、かれわらずばなせれもふは、いといとねろかなることなり、つゝしむべき事なり。

三には謡曲（うた）謡とはへつらひなり、曲とはまがるなり、心に左もれもはぬ事を、ことばなせに出して、まけてへつらひ、いつはりて、をどこなせたぶらかす、野にすめるふるきつねなせのしわざに似たりけり、むかし天竺（てんしゆく）に老たる波羅門（はらもん）あり、わかきつまもちたり、此つま老たるをどこをいとひ、あはれわかきをどこになせ思ひて、老ばら門をあざむきて、こゝらのわかきばら門、徳ありときこねたり、家に請し入玉へといひければ、老ばら門妻の志もや、うつさんかどうたがひてたねてゆるさゝりけり、或時老ばら門の先の妻のうみたりしいとけなき兒の、あやまりていろりの火の中にぞころび入たり、此妻見てありながら、さらにたすけんどもせざりけり、老ばら門あはてませひて、これをたすけ出して、後に妻をどがめて、何とて小兒の火中にころび入りしをたすけぬぞ、いとなきけなしとらみければ、妻こたへていへりけるは、かの小兒もをどこ子にわらずや、れのれ君の妻たるもの、何とてをどこにはちかづくべ

き、君か思ふらんもはづかしなせ、まことしくいへりけり、此老ばら門もとよりねろかなりや、又老にはれたるにや、我婦は貞女なりなせよ、こびて、其後はわかきばら門どもをまねかせけり、女は思ひまうけし事なれば、わかきばら門どもと、たもふまに姦通（かんつう）をぞしたりける、老ばら門後にこれをしりて、いかりくやめども、せんすべをしらざりけるとぞ、雜寶藏經（ざはうざうけい）にはどかせ玉へり、よにをかしかりけり、これらを詔曲とや申すべからん、

四に放逸（ほういつ）とは、心のゆくに従ひ、思ふにまかせて、なしとなすこと善きかたへたもひかぬを申なり、たとへていは、君父に奉公し参らすにもあらず、夫主につかふるにもあらで何事もなきに衣裝（いしやう）をきらびやかにかざり、かたちをかひつくるふなせにも、其はせほせをすくしたらんは、みな放逸と申ものなり、位にかざりあり、身に定まりあれば、潜上（せんじやう）のかざりはかまへてねるべき事をするべきなり、むかし後漢の明帝の后は、賢女にましまして、きさきに備はらせ玉ひても、猶衣裾（なまき）を引かずとて、長き御すそを曳かせ玉はずと、なん節儉（せつけん）のいたり、いとありがたくこそ、

五に悪口（あくぐち）とは、人をそしりこぼつなり、そしりこぼつ中にも、人の非儀過失（ひぎやうがし）を見出で、聞出で、それを申ならべてそしるなり、こは貴人なせの中には、すくなきとかなれ



と下さまの人ばしたなきあたりにはきはめてたぐひねはし、女は常より物しづかにうまれ出たれば、をどこよりはつゝしみもこまかなるべきを、おし出てそしりおどするなど、人ぎゝわるきさまなり、はづべき事なりかし、つゝしむべき事なりかし、雨夜のしな定めに出せしひるひの女めきたるを世にはいとねほくこそ、天竺のむかし波斯匿王と申に、金剛夫人とて、ひめ御いませり、生れつき見にくき事いはんかたなし、髪は毛はあらくして馬の尾のおどく、総身は蛇の皮のおとしとぞ、父の王いたく恥かしくればして、人にも見せずなんありける、後にある臣下に此夫人を玉はりてけり、その國に妻もてるものは、妻をゐても、ものへまかるべき禮の事ありけり、此大臣つまありつれど、いつも具せで出きにけり、外の大臣どもみなみなさたしけるは、彼人はいつも妻をねきて、ひとりのみぞいで來る、何のゆゑならんといへりけるに、かたへの大臣、かの人の妻のかたちいといとすぐれて、天下にならぶものなかるべし、扱は人に見られればいたづら事もありなんどて、ひとりくるならんといふ、かたへの大臣のいへるには、左にあらじ、いとみぐるしくて、人中には出し難きなるべし、扱こそ將てはこぬならんなど、とりどりに評したり、はてはおし入て其妻を見ればやといひ出せり、大臣のなき折なればとて、さてねし入たり、大臣の家には例の錠口ありてみたりがはしき人いれじとひしめきたれど、何がしの大臣ぞ、それがしの大將ぞなど、なのりつゝ、いやねしにねしいりたり、金剛夫人は深園のうちに人となりたるさへあるに、としごろわがをどこより外の人みし事もあらぬを、けふはよそ人がてねし入てきつるよしきかせ玉ひて、いかにせまし、かゝるすがたをあた人に見られば、父の王にも、わが大臣にも申すべきことばなし、大聖釋迦牟尼如來よ、われをたすけさせ玉へかしとくりかへし打くせき念じ玉へりけり、佛の世にましましける時はかたじけなきものにて、やがて天耳通のきかせましましけん、金剛夫人の宮殿のうち、釋迦牟尼如來ぞあらばれ玉ひける、烏瑟の御々しみどりにして、はれたる空にひとしく、月の御かほばせかゝやき、青蓮の御まなじり慈悲をたゝねたり、光明あたりにかゝやき、相好見るにいとふことなし、金剛希有の思ひたゝならず、身もかるく、心もすがすがしく成りて、世の事すべてわすれはてたり、かゝるどもしらす例のわるものども、ねし入きて見けるに、夫人は玉のかんばせかゝやき、ふやうのまなじりいつくしく、寶冠いたゞき、やうらくかゝりて、瑠璃の床に、にしきのとばりをたれて、何事をか念じ入玉ふさまにて、御手なよやかに合せれがませ玉ふさま、さながら帝釋天のきさきさき舍支夫人にもまさりつらんとまでに見ゆめり、れのづからな

りてみたりがはしき人いれじとひしめきたれど、何がしの大臣ぞ、それがしの大將ぞなど、なのりつゝ、いやねしにねしいりたり、金剛夫人は深園のうちに人となりたるさへあるに、としごろわがをどこより外の人みし事もあらぬを、けふはよそ人がてねし入てきつるよしきかせ玉ひて、いかにせまし、かゝるすがたをあた人に見られば、父の王にも、わが大臣にも申すべきことばなし、大聖釋迦牟尼如來よ、われをたすけさせ玉へかしとくりかへし打くせき念じ玉へりけり、佛の世にましましける時はかたじけなきものにて、やがて天耳通のきかせましましけん、金剛夫人の宮殿のうち、釋迦牟尼如來ぞあらばれ玉ひける、烏瑟の御々しみどりにして、はれたる空にひとしく、月の御かほばせかゝやき、青蓮の御まなじり慈悲をたゝねたり、光明あたりにかゝやき、相好見るにいとふことなし、金剛希有の思ひたゝならず、身もかるく、心もすがすがしく成りて、世の事すべてわすれはてたり、かゝるどもしらす例のわるものども、ねし入きて見けるに、夫人は玉のかんばせかゝやき、ふやうのまなじりいつくしく、寶冠いたゞき、やうらくかゝりて、瑠璃の床に、にしきのとばりをたれて、何事をか念じ入玉ふさまにて、御手なよやかに合せれがませ玉ふさま、さながら帝釋天のきさきさき舍支夫人にもまさりつらんとまでに見ゆめり、れのづからな



る威儀わたりはらはれて、恥かやかゝさんどてれしいりし大臣たち、ねづみのにぐ  
 るおとに、みなくはしり出たり、このをどこの大臣歸りてければ、ありし事どもか  
 たらせ玉ふをみれば、こはいづくの姫君ぞと申さんばかりの美人にぞかはりたは  
 しける、何としてかうまでは成らせ玉へるぞ、ひとへに御ほとけの御利益よと、まづ  
 父の王の御もとへ申させ玉ひければ、父の王おどろきて見玉ひ、かぎりなくよろこ  
 ばせおはして、佛に此事とはせ玉ひければ、佛のつげ玉ひて、むかしの世に長者の宅  
 に女あり、其ころたとき羅漢ましくけり、かたち見にくかりしなるべし、此女口さ  
 がなき人にて、おのらかんよ、かみは馬の尾のおとく、からだはくちなはの皮の如し、  
 見るもいまはしとなんそしりたり、扱此らかん後に神通あらはし玉ひしをみて、は  
 じめて恥くやみ、ゆるさせ玉へとぞ申ける、其そしりつる如くに、たのがみも、からだ  
 もその如くなり、後にくわびたるにて、扱佛にあひてふたゝびうつくしく成れる  
 なりと説かせ玉ひける、因果はれそるべきことなり、つゝしみ申べきことぞかし、惡  
 口のどがをしめしをはる、

六に厭背とは、おのが夫ををむきて、他のみそかをするなり、これがため百千の惡計  
 して、ついに夫を害するにいたる、むかし今、常のことなり、むかし、天然に女ありけり

荒姪無道人をゑらはす、たのが夫主を厭背して、ころさんことを思ひはかりければ  
 いまだ其時を得ざりき、ある時をどと他國にゆく事あり、旅よそほひせり、女五百粒  
 の丸薬を製してこれをしろかねの盞にいれて、をどこにいへらく、出たゝせ玉ふ時  
 もわろく、處もよからず、病あらば是をめせ、すみやかに病いゆべし、うね給ひなば、こ  
 れをたうべませ、方つかん、よくいと給ひて、はや歸りきませかし、ひとすみたら  
 んは心うき物をなせ、打なげきつゝ、いだしやりぬ、夫主ゆく道たがひて、或山中にま  
 せひ入ぬ、ゆけどもく、里にいでず、目くれたり、どらたはかみどもすめる所なりけ  
 り、いかにせまし、たいにねたらば、夜中にくはるべしと思ひて、もてるもの木のもと  
 にたきて、たのれひと、梢によちのぼりて、枝はせよき所にねたり、子ふたつのころ  
 もすぎて、うしのころなるべし、すさまじき人のわめく聲す、ばけ物なめりと思ひて  
 のぞきみれば、いかめしきぬす人ども成けり、手に手にまつともしてけり、四五百ば  
 かりなるべし、たのくゝいろくゝのものぬすみたるを、木のもとにたきてやすらい  
 たるさまなり、此旅人のもてるものさしたる見て、引はせきたれば、銀の盞に例  
 の丸薬五六百粒いれたり、ぬす人どもよろこべるさまにて、こはよきものころあれ、  
 あまりにいとぎてにげたれば、物くふひまもなかりき、はらへりたり、こは力づくく



すりなりとて、われれくれじとてみなとりくらひをはりぬ、とみるがうちに、とりど  
りくるしみて、血なせはさちらし、うめさくるひつゝ、みなしにたり、としおろぬすみ  
せしむくひなるべし、旅人梢よりはひかりて、はじめて妻のれこせしくすりば、毒や  
くなりけりとしりて、扱もあやうかりしを、いたましくもぬす人どもこそわれにか  
はりけれど、念じはて、それらの事を其國のねはやけにつげまうしければ、國王は  
うびし玉ひ、ついに其國にとまりけりぞ、此事法苑珠林の背恩の部に百喻經を  
引て出されたり、にくき女にあらずや、

七に姦かん儉けんとは、姦はあやうく私するなり、儉はさがしくするときなり、女のこゝろた  
のみがたく、まことをいつはりとし、いつはりをまこととす、あるは國王の勢をかり、  
あるはまひなひをぬて事をひるがへし、物をてんせうす、ひとたびゑめば城をかた  
ふけ、ふたゝひゑめば國をかたふくと、むかし人のうたひたるぞげにまこと成ける、  
伊勢物語に鳥の子を十つゝ十はかさぬともとうらみしは、此姦儉なせの事をよめ  
るなるべし、

八に貪財くわんざいとは、財とは財祿なり、金銀なせにはかぎらず、國城田宅、衣服、飲食、其餘珠玉、  
珍奇のたぐひ、意にかなひたるもの、みなこれなり、男子の上にも、此むさばりはかは

らぬと、例の女なれば執着ふかしとす、むかし釋迦牟尼佛世にましましける時、難陀  
といへるいやしき老婆あり、きはめたる物をしみせる人なりけり、びんづるらん  
と申が、むかしの世の因縁やいましけむ、ある時たぐはつに門にたゝせ玉へりけり、  
老婆其日はもちひくはんとて、みづからつきこねなせして、あみはのせて火とりて  
ぬたる時なり、人きたらばくはせんことのをろしくて、門はさきにとざしてけり、  
尊者神通にて庭に出現し、老婆のもちやきぬたる前になんたゝせ玉へりき、老婆こ  
れを見奉り、きもをけし、あなけうとき人かな、いつくより入て我前にはきたり給ふ  
ぞと云ふ、尊者のたまはく、どもわれ、其もちひ、ひとつ、ふたつ、われにゑさせよと、老婆  
またきもつふれて、さればこそ門とざして人はいれじとせしを、よしよし、何どの玉  
ふどもやらじと、思ひ定めて申けるは、よしや君がふたつのまなこは、とび出で、地  
におつるともやらるべきかといふ、尊者神通にてふたつのまなことび出させ玉へ  
り、老婆これを見て、よしやまなこはねろかなり、死すともやらるべきかといふ、尊者  
また滅盡定めつじんじやうと申す定にいりて、いきすこしも出さで死にたるさまになり玉へり、老  
婆これを見てさすがに心まどひて、此尊者は國王大臣たちのうやまひもてなし玉  
へる人なるを、わがやせにて死たらんぞいはいかなるうき目やみるべき、あは



れ今一度いさ出させ玉へ、さらば此もちひ参らせんといひければ、尊者やがて息ふき出させればしけり、老婆もよみがへりたる様によるこびて、さらば参らせんといふに、こちらの大きすぎたり、これはいとあつかひなせ、もてあつかひけれど、みなをしくてやられず、別にちいさくこしらへてんとて、いとさゝやかにつくりてあみにのせて、やきて、いざとてはさみて出さんとせしに、いかにかしたりけん、外のもちせもみなつき従てあがりけり、これはとて引はなしてあぐれせも、またたなじさまにつき合たり、老婆はらたちて、沙門よ、ほしとねばさば、せれにてもたひひとつとれ、なせてかばかり老ばにからき目みするぞ、もちせもはみなつきてはなれぬはど、くどく、尊者笑ての玉はく、我わに汝かもちひひとつはしとてきつるものならんや、汝にはさるべき因縁ありてこそきたれるなれ、いざわれにしたがひて釋迦佛の御前にまうでよ、汝に大なる徳つくことあり、其もちひもみなもちてこよとしめし玉ふ、老婆ねもへらくげに此もちひとつものこしれかば、人やくはん、もちゆるもげによからんとて、みな箱にに入れて錠なせたるしこめて、授尊者につきて、祇園精舎にぞいたりける、思ふにはまさりて、ありさまのたどさに、これはかたじけなき事よと思ふこゝろぞ出にける、佛つげて汝がもちひとつ水になげてみよと仰けるに、なげつ

れば、其まゝ、ほのほとぞなれりける、こは餓鬼道の前相なりとぞ、其餘今日の大會にひとつづゝ、供養せよとの玉ひける時、老婆はじめて宿善ひらけ、こゝろざしれこりて、その如くなしてけり、佛さまさまに説法ましましければ、初果と申さどりひらけ五戒うけて歸りけりとぞ、此老婆の因縁いみじくて、佛にも、らかなにも、あひまいらせける果はうあれども、猶宿習やみがたくて、ざるをかしきけんせんは、のこりたるを、ましてたゞの凡夫いかほせかものをしみはつよき物とかはしるや、をしむどもをしみはつべきにあらねば、心よりかけはなれて、悲田、敬田、福田、施しまうすべきにや、

九には欲火、これは人々情慾の心のほのほ、ねもひをこがすこと、さかりなる火の如しとなり、此事大かた上のとんいんの段にて申したれば、畧すべし、十には不淨とは、むさくけがれたる事なり、抑人の身の上はほねをつらぬ、肉をつゝみ、筋をくさりて、皮をはる、九穴よりうみしるあふれ流れて一日もやすむことなし、女はこれが上に月々の經行をそへたり、淨心誠觀にはこれを出されたり、經行はうまれつきたる身体の上の病にて、大小便利とねなじはせの物なれば、それありとて罪と申ものにてはなし、されせけがれたる方は今ひとときはをどこよりまさりてけ



り、扱此等の不淨は男女に通じてなほことなれど、わけて女はよく容貌をつくり、脂粉をいろどり、錦繡をまとい、けはひふるまひ、きよげにうつくしく、なよやかに思ひはなつべき所もあらぬより、人のうはの空になりゆき、身にかへてだもあふことをなほ、おもひしみたる執念、いづれの下にかはわすればつべき、それはた男の方によきもあれど、まづうつくしきかたは女ぞすぐれたればとて、あるは九想觀骨鎖觀、不淨觀など、このまをひさまさんとの方便に、いろくの執行はとかせられたるなり、むかし目連尊者、いまだ家にいまし、時妻を具し給ひけり、ほとけの御弟子となり、せ玉ひし後は、ふるさとのことなほはすべて思ひわすれて修行し給ひければ、羅漢果と申すれさとりひらかせれば、ましけり、のこりゐたる妻の夫人、いたく悲しくやねぼしたりけん、或時姿かたちうつくしく、かいつくろい、祇園精舎にぞまうでたりける、むかしのをどこよ、あはれ御寺にあきたり、けふはもろどもに歸らんなどの給は、いかにうれしからんなど、はかなくも思ひつゝ、けられ、扱あひまゐらせたりけり、めづらかにももうでさ給ひけるものかなど、の給はする御かほもやせほそりて、むかしのねもかけは露のこらざるに、まづ涙のみはふりねらぬ、しばし家に歸らせねはしてんや、あまうにつかれさせ玉ふなほ聞えければ、尊者打さか

せ給ひて、汝はまだむかしの目連とやれもへる、世にれもひ迷へるころならば、汝がきつるをうれしども、なつかしども、ねもふべけれ、三界のぼんのうたねはて、かけひの水のすみわたりたるころより、汝が今日の姿を見れば、刀に蜜をぬりたる様にも、ゑがけるかめに、蜜をもりたらんやうにみゆるぞ、毒蛇の毒をふくむは、尙手をもふれつべし、女人の笑をふくむは、ちかづくべからず、汝は世々の契りありて、しばし夫婦のゑにしむすべるものなれば、あはれわれに習ひて、御佛の道にいり玉へがしど、ねむごろにしめし玉ひけり、夫人は今更の様になしくも、かたじけなくも、今までのまをひごゝるも、まほろしの夢さめたらんやうにねぼねて、御いとま申してけり、となん、御佛の御世にあひ参らせたるさへあるを、まして目連尊者の妻となりたらん、いみじき宿善の人にやといとら山し、

むかしより女の經行を罪のこと、どがめて、此不淨を諸天善神もさらひて云々、  
 後に血の池地獄にねつるなど申て、血盆經と申經つくり出て、うれ申つるめて女をねとすわざせるもの、ちかおろ聞ゆ、いと理りなきものなり、女の經行は人の大小便利とおなじものなり、不淨は不淨なれどもこれありとて罪うべきものにあらず、罪と申ものはぼんのうの心より、せでもよきことするぞ罪にはなるなり、



身の上にかのづからなれる事は、果報にてあらはるゝものにて、果はこれ無記とこそ判じ申候なり、經行罪得ば、男の大小便利もなかれて海川へもいり、其終り佛神へも奉るなり、さらばをどこも血の池へゆくべし、さらばとてこれこらへてせぬことにも及ばず、もしいましめば涕唾便利西方に不向といへり、經行も西に向ひ申さずやうにもあるまでなり、血盆經のこと別に記するものあり、今は畧す、女人の十失と申事、あらましかくのごとし、此外にもかぞへなば、數猶ればかるべし、さまではとて畧し侍る、かう承ればあしといふことは、おほかた女人の上に流れよるものゝやうなり、なにしか、さるやうにはうまれつきたりけん、あやしきまでに心ぐるしき姿なりけり、されば御經には女人のある所には地獄ありともとき、女人は地獄の使なりとも玉ひ、外面如菩薩、内心如夜叉など、もしめし玉へり、授こそ女の身は世にもいとひにくみて、貧着をれこし、愛執すまじき事を、今の願の文には、厭惡女身とは説かせ玉へるなりけり、いとふが上にもいとふべし、不淨嗅穢の身なり、憎むが上にもにくむべし、惑業深重の形なり、千歳集に和泉式部が地獄のゑに、つるぎの枝に人のつらぬかれたるを見て、

あさましやつるぎの枝のたはむまでこはなにの身のなれる成らん

とよめりしはまことのことにはぞありける。

後に女人此願に乗せざれば、後世たすかるまじきよしをしるす、此事むかし向阿上人と申し、大徳いまそかりき、それがしるされし西要抄と申ふみの中のことばをときわかちて、これをしるし參らせたらば、われらかつたなきことかきつらねたらんには、はるかにまさるべしと、れもふものからいさゝか其よししるしつく、たかくかけるは本文なり、ひきゝ方は其講釋なり、

西要抄にいはく、又なまさかしげなる女の聲にて、

時は秋の末とかや、向阿上人と申大徳、嵯峨の釋迦堂に通夜し玉ひし夜、ねなヒ堂の局に女のゐて老僧に物とひしことばをも、みなただならぬ事どものみにて、みみとめてきかせ給ひたるを後にしるしたるなりとぞ、まことには佛の變化し出玉ひけるなめりなぞ、かきしるされき、此書は三部のかな抄とて、本朝の佛説なぞ申て、むかしよりもはやすものなり、ことばのみやびかなるはもとより、義理のたゞしき、後世者はかならずかたはらにおくべき文なり、註釋はいろいろ見ゆれど、心ゆきし註はまれなり、

彌陀の御誓は世に超て、むらなき御慈悲といへば人によりてことごとには、よも



と、たのもしけれども、

みだの誓とは四十八願なり、中にも第十八願は十方衆生とちかはれ、三十五の願は女人をどちかはれたり、むらなきとは、むらは一村しぐれのやうにところまだらにはあらじとなり、もと平等一子の慈悲とて、一切衆生をわが子の如くねぼす所より、たこし玉ふ本願なり、ことごとくとは、人によりてかはるべきやうはよもやあらじとたのみねもふなり、世にある人々をたしなべて此位に信じらるゝものなり、

女の身はことにいつゝのさはりとかや、たもくていみじかるべき事には、みなきらひすてられたりと聞ば、まして往生などたやすかるべしともねぼぬす、

五障と申事、法華經攝婆品にみえたり、一には梵天王、二には帝釋天王、三には魔王、四には轉輪王、五には佛身なり、前の三王は天人界の王なり、第四は人間の世界建立のはじめ出させ玉ふ天子にて、三十二相をそなへ、神通自在の王なり、女身にて此位にのぼる事を得ざるよしなり、第五佛身なり、此も女身にてすぐにはのぼられざると上に提婆品を引て、智積菩薩の龍女をどがめさせ玉ひし所にてしるしたるが如し、いみじき事にはさらひ捨られたるとは、日本にてても比

(三十一)

叡山は傳教大師結界の地、高野山は弘法大師結界の地なり、結界とは法を立て女人は影をもさゝせじとかぎりを制し玉ふなり、元祖大師の大經私記に、一乗の峯には五障の雲たなびく事なく、三密の月も女人非器の暗を照さずとの給へるなぞ、すべて此たゞひなり、此國は娑婆世界のうちにて穢土のさかひなり、ろれ猶女人をいみていれ玉はず、まして淨土の清淨無漏のところをや、そは思ひもよらじとなり、

それはたげにもど身にしられたる事ねはし、はかなくかたちをつくるふわざだにも、かゝみにうつる心はづかしきまで、しみふかきかたは、こよなくをのこゝよりもまさり侍るべし、すべてかすく思ひあつめたる、心のうちをきこぬつくし、たらば、たよとき御心にはいかうとましくも思ひ給へられたるべし、なほも本願なせやげにねもほしはなたざらんとは思へども、一定往生とまではねぼぬすといへば、

此段女人の述懐にて、男とたかひて女は罪ふかきさまをことばみじかによくもかうはかゝれたるものかな、此の事は前の十失の中にいへれば、今は畧し侍る、なほも本願なせやげにねもほしはなれざらんとは、なほはからぬこゝろな



り、なせやとは、何ぞやなりげにとはことさらと申こゝろ殊異の字なり、れもほしはなれざらんは、おぼしめしはなれじとなり、もとより大悲の御こゝろかわりなき本願なれば、何とて女人とてとりわきて捨させ玉ふべきやとなり、左は思へども、また打かへしては、一定とも思ひ定めがたしと申す疑なり、答ていはく、まことに五障の身はさらなる事なれども、またゆめゆめ九品ののぞみはひげし玉ふべきにあらず、

五障の事前に見ゆ、れよそ女身を轉ずる事、一大阿僧祇劫をへて、一万五千佛を供養奉仕し奉れる後にこそ、はじめて決定して男身をうるなれ、其事はもとよりの定まりにて尤の事なり、されゆめゆめとは、つとめてといへることばなり、つとめて往生にのぞみをかくべし、何事にもものぞみをかけざればならぬなり、極樂ものぞみをたしかにかけざれば往生わやうかるべし、元祖大師の曰く、一定と思へば一定なり、不定と思へば不定なりと申せば、きはめて不定げにねもひて後生しはづし申すまじきなり、

そのゆゑは、まづ第十八の願に、十方衆生乃至十念せんにも、し生せずば正覺をとりとたてられし、その十方衆生の中には、男子も女人もみなもたらさずとさだめ

られたり、されば男子往生すべくは女人また往生すべし、なせかねなむ本願にのれる機の、ひとりばゆき、ひとりばとゞまるいはれはらむ、

四十八願の第十八願をいだし本文に曰く、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、この文の中の十方衆生のことば男女をえらばず、善人悪人をえらばずとなり、唐の法照禪師の下智と高才と、破戒と罪根のふかきとをえらばず、どの玉へる此文をさすなり、それゆゑ女人は總じて此願の中にまづひとたびをさめらるゝなり、此中にもらすべきいはれはなしとなり、その上、女性はさはりたもければ、しひてもやな疑はむとて、又第三十五の願にとりわきて女人を往生せしめんと誓はれたり、つらつらこれと思ふに、打まかせては、えらびこそ捨られましものを、男子とともに願せられたるだにもありがたきに、あまさへ女人をば、ねんおろにふたゝびまでちかはれたる、御じひのこまやかさこそ、まめやかによろこびもかなしみもあいなかばなれ、

女人ばかりのために別に三十五の願たてられたるいはれをのべ玉ふなり、まことには第十八願に十方衆生と侍れば、これにて善悪男女の往生せしなへて定まりたるものなり、ざるをその上に女は例の疑のぼんのうのふかきものぞ



とて、わきて此一願を別にたせ玉ふなん、いと不思議の事なりけり、女人は罪ふかければ、十方衆生の文にはぶかれてもあるべきに、十方衆生の中にひとたひをさめられ、またかさねて此願を別にたてさせ玉ひて、攝取し玉ふなん、言語道断ともほめ申べき御慈悲なり、さらば女人のためには、第十八願は總の願にて、此願は別の願なるべし、惣別ふたつの願に乗じたらんには、往生まこと心づよかるべし、これをよろこびと申なり、しかし佛のかくまでに御心をつくしくだかせ玉へるも、よくよく女は罪ふかきものなればこそ、おなじ利益衆生の御こゝろをいたくいためさせればしますを、あなかしこしとやいはん、あな心ぐるしとや申さん、

よく罪ふかき身なればこそ、返す返すは願せられたるらめどもふはかなしけれども、また往生のやすき事は本願に乗するゆゑなれば、いくたびも誓はれたらむこそ、よろこびにてはあるべけれ、

前のかなしみとよろこびとをならべてときしめす文、わかりやすし、

すでに男子は、ひとつの願に乗するを、女人はかさねてふたつの願に乗じぬれば、他力いよいよよくなりぬ、往生何のあやぶみかわらん、中々女の身こそ、そねま

(中略)

(中略)

しきまで浦山しけれ、ざるを女人なればと、ひげせむやは、無下にさまあしきうたがひなるべし、たとへまたたのづから信をとりたるよしなるも、からくして、男子のつらにたのみをかけて、さしもとりわきいまひときはと、立て給ひつるちかひまでをば、つやつやさらに思ひもしらず、これうたてはいなきことになん侍り

往生のかたに取ては、女のかた男よりひとときはつよき願力のあるを、男子のかたより見ては、女をそねみ浦やむとなり、それはどまて佛のかたにては、心をつくしたて玉ひつるを、男とねなじやうにたゝなみなみの信心にてすぎんは、佛のかたにてかはどまて思召しいれて、たて玉ひたる本願を、女のかたにてたもふ心のかひなきにて、本意をむきたるとなり、からくしてとは、辛苦してといはんは、どなり、もとより不信の女、やうやうのことにて、いさゝか信心をたこしたるも、まづは男なみのこゝろさしにては、二重にたて玉ふ本願を、また夫はどに思ひしらぬなりとや申すならん、願くはいまひときはつよくなかたじけなくともふやうにありたしとなり、うたてとは、此の所にては、あまり心うすきと申はどなる心なり、

かまへて女心は、かたくなに思ひいれて、そばめもみず、ふかふかどたのみ奉るべ



きなり、さても千劫萬劫をふども、あらためがたき女の身の、わづかなる一念十念によりて、たやすく往生をどげんきさみ、すみやかに男子とならん事、それいくばくよろこびぞや、まゆやかに本願の世にこゑたる程は、これにてあらはれたり。女はうまれつきてかたよりやすきものなれば、うれぞ幸ひなり、此本願を信じ参らす外に、そばめもふらす、よそを見ずして打かたよりてたのみ参らすべきなり。千劫萬劫とは、此劫と申すとは、いろいろに申せども、まことに教へ申べき事には及はずとなり、これをたどへば四十里ばかりの岩はあり、それを百年にひとたびづ、天人あまくたりて、天の羽衣のいとうすきものにてなでたり、かくの如くしてこれをなでなで、なでへらしつくしたる時を一劫と申とぞ、御經にどかせ玉へる、拾遺集に元輔がよめる。

うおきなき岩はのはても君ぞみんとどめの袖のなでつくすまでといへるはこのふる事なり、あらためがたき女の身とは、此劫の數百千萬かさねて、これを一大阿僧祇劫とぞ申す、此間に一萬五千躰の佛にあひ参らせて、奉仕供養し修行したる功德はじめて決定して男子となり、女身を轉すといへり、こはむかし釋迦牟尼佛のぼさつ修行し玉ひし時に、なしてゝろみ給へりしよ

しにてどかせ給へりしなり、女の男になると申ことは、かうぞ六ヶしきことゝしるべし、さて今の世にも、まれには女の男となると申事、世間にまゝさこゆるはしかるべき因縁にて、ふとひとたび男身をうけたるなり、其後はけして女にならぬと申にてはなし、またやがては女にかへるなり、又男も女になる事あり、是も女にて生生世世をはたすと申には非ず、また男にかへるなり、凡夫の位は何事も定まりたる事なし、たとへばある時は天人にもなり、或時は人間にもなり、或時は地おく、がき、畜生ともなるが如し、六道の輪廻とはこれをいふなり、釋迦菩薩の、一大阿僧祇劫をへたる修行の功德にて決定して給ひたる男子の身とは大にことなりとしるべし、かばかりむつかしき變成男子を淨土に往生しぬれば、すみやかに成就し、此後はふたゝび女人の身はうけずなれるとは、彌陀如來の大悲かぎりなき御はからひなりけり、いとうれしきこととしるべし、さればこれを轉女成男の願ともなづけたるなり、十方世界に諸佛もかぎりなく、ぼさつも數々にましませと、女人をわけてと誓はせ玉ひたるは、たゞ彌陀はとけのひとりにかぎらせ玉へり、一切經七千餘卷と申せども、女人往生の願と申は、ことに此無量壽經にかぎりたり、女人たるべきものは、此こゝろをぬて、まこ



としく信じ參らすべし、それをままめやかに世に超たる程をあらはすと申も  
のなり、諸佛にも此願なければ、それを世に超たるとは申すなり、我建超世願と  
無量壽經にのたまひしは此意なり、

さる御慈悲は、又何にむけても、いとゞ男子の往生さへ、心やすくなぞらへしられ  
ぬ

女人の罪障ふかきさへ別願たてられて往生とげしめ玉へり、ましてこれにく  
らふれば、男子の往生は心やすくなれるぞといふとをうちかへして、男子の信  
心をしめさるゝなり、罪ねほき女の上よりとりなして、男子の信心をすゝむる  
なり、男も女ももらさじといへる平等大悲のこゝろを汲とりて、ことばうつく  
しく旨たくみによくもかうまではかきつらぬ玉へり、たよる淨土宗の書ども、  
むかしより世に數かぎりなくねほければ、女人往生の事について、佛の大悲の  
いたりより、女人のこゝろさしのさままで、ねちなく細やかにしるしあらはし  
たるふみといへるは、此西要抄にたくらぶべきものたえてあらざるなり、女は  
此文を常にかきて机の上にさしねきて見つへくやなぞねもひ待る、

風雅集に、

(七五三六)

(七五三七)

こと浦にくちて捨たるあまを舟我かたにひく波もありけり  
と、後光明院前關白のよせま玉ひたるは、よく此願のこゝろをつくし給へる御歌な  
りけり、女人此願に乗せざれば、後世たすかるべきよしなきいはれ、あらましかくの  
如し、なほ申す事もおほけれど、さのみはとて筆をとどむ、

男女均人、而賢良多于男子、毀賈歸于女子。孔子曰、女子與小人難養、不啻佛之警之也。  
今之世、教女兒多以弦歌、以爲足矣、至授縫織尙爲少焉、而於學聖經賢乎、女中不聞有  
貞良之名爲久矣、宜哉、蓋學之不行之歟、抑不知行之歟、予觀人之教男兒者、未觀教女  
兒者也、漢劉向作列傳、漢曹大家作女誡、長孫皇后作女則十卷、加有女孝經、女論語、古  
人旣施訓譯、布于闕巷、育女子者、不可不知、夫入道信佛之人、唯善是務、雖婦人女子、夫  
可然也、記以傳于未聞、壬戌六月二十八日



# 死 牛 洩

佛法實驗論(原坦山著)批判

(七三十一)

批判有二初造語之批次立義之批先批造語

結構廣大 批曰廣大ノ語種既ニ作ルヘキカ

茫々 茫洋未審ニ作ルヘシ

識 識ノ上未ノ字ヲ加フヘシ

離苦得樂 離苦等ノ語ハ下化ノ一端ニシテ要ノ字ニ名クルニ足  
ヲス般若トカ解脱トカ或ハ上求下化トカアリタシ

一粟 一粟ノ上ニ今ノ世ノ佛子ナト云語アリタシ

短 短ノ上亡羊ヲ逐フナトノ語アリタシ

理學 理學ノ上ニ四洋ノ二字ヲ安スヘシ

認 認ノ上彼レノ言アリタシ

無實 無實ノ下ハニチカキノ四言ヲ加フヘシ

覺源不覺根 覺不覺ハ起信論ノ語ニシテ佛家ノ通稱ナリ而シテ心源ノ熟語ヲ指示スルトモ覺源ト云フ  
熟語ナシ義記中十六帛ニ覺心源ノ論文アレトモ覺ハ覺悟ヲ熟語ヲ指示スルトモ覺源ト云フ  
源ノ字面ト同スルノ語ニアラス故ニ其下文ニ不覺心源ト云ヘリ若愚ノ源始チ指示セハ本覺ト  
票稱スヘシ不覺根ノ熟語何レニカ據アリヤ根本不覺ノ熟語アレトモ不覺根ノ三言聯熟ノ本覺ト  
見ス若其根本不覺ト票スルカ或ハ覺不覺ノ舊名ニ拘滯セス悟本迷元ナトノ語ヲ作ルヘキニヤ  
無明ノ在所不覺ノ居所ト其居チ別ニスルモノハ何ノ差異チ辨セントスルヤ蓋不覺ノ念起則チ



無明ニシテ其體は一ナリ  
ニシテ處別ナル其理アリヤ

三心圖

三心ノ語ハ覺源心ト和合心ト不覺根心トナラシクハ均シク心ノ動靜ノ上ニテ和合心トハ云ハスハ合  
ニシテハ云ヘシ和合心トハ呼ハス心根ト云ハルハアノ私心ト稱スル目ニテアノ熱語ナシ然レハ則  
チコレナ指シテ直チニ三心ト名ケタラシムハ一家ノ私心ト稱スル目ニテアノ熱語ナシ然レハ則  
シ漫ニ之ヲ造ラシムハ一家ノ私心ト稱スル目ニテアノ熱語ナシ然レハ則  
ニヨシナシ但其所據アラハコレナ指シテ

和合心中不覺心上流入覺源混淆和合

和合心ノ熱語ナシ強テ名ケハ和合心ト稱スル目ニテアノ熱語ナシ然レハ則  
ノ名ニ非ス但シ初等ノ中ニ其名コレアリヤ據スルニ不覺心上流入覺源此語路ニテハ無  
明逆流シテ覺源ニ入ルチ和合心トイヘルノ義トナルニ論ニ不生不滅與生滅和合非一非異  
ト云ヘル文ヲ義記ニコレナ指シテ非謂別有生滅來與眞合ト註スルヲ見レハ入覺源ノ三字ハ來  
入ノ義ナレハ論說ト垂角スル者ニ似タリ又上流覺源ト云フトキハ是還源反流ノ義トナ  
リテ和合相ヲ混シ本來平等同一思トナルノ謂レナリ若混清和合ノ當相ヲ論セントセハ覺源下  
流シテ不覺心ニ入ルト云ハサレハ和合ノ相ヲ混トハ云ヘカラス混濁佛性隨流爲種種味今ノ下  
也信論(中末三丁)自性清淨心因無明風動ト云ヘル如キ下流シテ迷ニ赴  
クテ隨流ト名ケ上流シテ悟ニ還ルチ反流ト名ケ大凡佛家ノ通名也

五識依頭面及通筋肉

此說ハ佛家ノ五識ノ說ヲ助クルニ足ル但シ佛家ノ五識ヲ説クノ語ハ眼識  
依眼根乃至身識四身根ト云ヘルノミ頭面通筋肉等ノ語ハ醫家ノ常用ニシテ佛書ノ語ニ非  
スコレナ指シテハ心ヲ須非サレハ佛家ノ中ニテハ耳立チテ且初學ノ所聞ニ疎キニキ

六識依胸臆

但ニ六識ト云ハ外轉三益チ縁身息ノ六識ヲ總稱スルノ名目ナリ第六識ト云ハ意識ト  
ナリ今ノ六識ハ定テ第六識ナルヘケレハ第六識ノ字チ加フヘシ胸臆ノ語散漫タリ其所依チ定ムヘ  
シ上圖既ニ胸中チ指シ第六識ナルヘケレハ第六識ノ字チ加フヘシ胸臆ノ語散漫タリ其所依チ定ムヘ  
其指ス所定マリスンハ何ニ依テカコレナ指シ胸臆ト定メタルヤ或ハ手足背梁ト云ハシハ  
前ノ五識ノミ據ル所チ指ス所ナシ上圖ニ就テ按スルニハ第六七八ノ三識ニ至テハ三盤ト内外轉チ分  
ツノミ其依處チ指ス所ナシ上圖ニ就テ按スルニハ第六七八ノ三識ニ至テハ三盤ト内外轉チ分

七識通六及八

此語委説ナケレハ其意チ解シカダシ唯識所説ニヨレハ第七識ハ六八ノ中間ニ  
居シテ此ヲ轉送識ト名ツク其體四我チ以テ第八ノ爲ニ能照ノ主トナル者ナリ  
今ノ語コレナ指シ胸臆ト云ハ第六第八ノ將タ手足背腰ノ間ト云ヘシ  
ル是頭腦ト云ヘシ胸臆ト云ヘシ第六第八ノ將タ手足背腰ノ間ト云ヘシ

眞覺本心

此四字ノ連續經論中ニ開顯レサ  
和合生滅之心識滅盡而眞性清淨云々  
上圖中ニ說朱チ以テ覺チ照シ以テ不覺チ表ス  
一ノ相チ蓋寂滅无爲ニ在テハ朱佛無用ニ屬ス況ヤ墨痕チヤ彼ノ十牛ノ圖中終極ニ及テハ唯  
一圓相チ蓋寂滅无爲ニ在テハ朱佛無用ニ屬ス況ヤ墨痕チヤ彼ノ十牛ノ圖中終極ニ及テハ唯

其說ヲ提  
示セヨ  
已上序文并ニ圖說ヲ批票ス已下本文ヲ批ス

左初氣水土ノ如キ他物聚合以テ成ス乃至零圍氣又諸氣相合ス等乃至空理ノ爲メニ  
眩惑セラレタル其說妄斷臆想其元素トナスモノ皆集合物云々

辨曰佛氏ノ徒一變已後ノ說ニ通セス云々

佛氏ノ佛家ト云ヘシ若氏チ稱セントナラハ釋氏ト云ヘシ佛字氏族ニ係スヘカラス  
ス昔僞コレナ辨セス數佛氏チ以テ云者ハ事ニ違セサルナリ吾黨做フヘカラス

辨曰予此ヲ讀テ愕然トシテ類ニ汗スルコトアリ四大ヲ弊ト説キ我カ空ト稱ス  
ルモノ彼コレヲ分析秤量シテ四五氣トナシ云々

辨曰我徒中古已來ノ空氣ヲ拘守セハ恐クハ彼ノ所破ニ墮シ救フヘカラス遂ニ



播磨ニ至ラン云々

辨曰我佛氏ノ學上古ハ宗學心證ニシテ戲論少シ中古已來實証ノ法衰へ空論虛  
義ノ法起リ遂ニ今日ノ衰廢ニ及へリ云々

以上空ノ論辨

誠批シテ曰辨白ノ言ヘル我空ノ空ノ義及ヒ中古以來ノ起ル所ノ空論虛義ト稱ス  
ルモノ予未タ其委説ヲ聞カス敢テ請師ノ恐ル、所ノ者ヲ舉揚シテコレヲ委細ニ  
示セ今方ニ誠カ見ル所ヲ以テ洋説ノ由テ起ル所ヲ説カン彼言ラク氣水土ノ如キ  
他物以テ聚合シテコレヲ成スト又零團氣モ諸氣相合シテ成ル者其元素トナスモ  
ノ皆聚合物等云々ス按スルニ此説洋學ニ就テ云へハ精密盡セリト稱ス可シ佛學  
ニ就テコレヲ論スレハ未タ曾テ奇ト稱スルニ足ラス唯識論ノ中順世外道ノ計ヲ  
出ス地水火風ノ極微一微ニテ合シテ父母ノ微ト名ツク三合シテ子微ト云四合スレハ孫微ト名  
ツク五合シテ孫々微ト名ツク乃至百千合シテ一ノ水滴ヲ爲ス火風等マタ  
ナリ實常能生能色勝論外道モ亦此計ニ同ス唯識論合テコレヲ破釋ス述記一ノ末二ノ本コレヲ  
解釋ス薩婆多成實及大乘教中各其説ヲ異ニス婆娑瑜伽成實論等コレヲ示ス  
カ如シ義林章第六極微章アリ學者此レヲ見ツヘシ夫レ一滴水ハ四大中水大ノ増上スルモノニシテ亦地火風ノ  
三大ノ和合シテナル者ナリ彼外道ノ所見猶四大ノ分拆スヘキヲ知ル此レ佛世已  
前數千萬歳ノ昔ニ在テ此ヲ説ク洋學者流是ヲ知ルノ遲キ何スレソ今日ニ至ルヤ

(五) (七) (五) (七)

印度地方或ハ此説ノ餘波アルヘシ洋家ノ分拆竊ニ之ヲ取テ已レ自ラ窮理ノ術ヲ得タリト謂ヘルヤ知ルヘカラス且彼カ云ヘル酸氣等ノ如キ者モ亦  
幾多ノ分拆スヘキアルヘシ彼未タコレヲ云ハサルハ精巧尙盡サスト謂ヘシ彼ハ

未タ勝論頓世等ノ云ヘル孫微孫々微ノ分ニ到ラス況ヤ隣處ノ阿菟色ニ至ランヤ僅カニ四大ヲ分拆スルヲ以テ佛家ヲオドサン  
ト欲スルハ假裝ノ鬼面羅刹ヲ怖伏セント欲スルナリ

水土ヲ分拆スルノ餘勢及テ空氣ヲ分拆スルヲ推知ス學ノ工夫彼ニ在テハ尤精密  
ト稱スルニ足ル尙カニ按スルニ是測量ノ機巧ヲ以テ空中所在ノ密氣ヲ斟酌シ得  
タルナリ空ヲ捉エテ分拆スルニハ非ルナリ空ノ中一種ノ秘氣アリ見聞ノ境ヲ離  
ル而シテ其實アツテ焉ニ存ス俱舍論ニイヘル不可見有體ノ類ナリ猶障礙有體ニ  
屬ス亦是色法ノ所屬空无爲ノ法ト其性天隔ス此固ヨリ空ノ氣ニシテ空即氣ニハ  
非ルナリ夫空ハ究竟シテ无體ナリ長短方圓輕重多少アルアリテ分拆斟酌スベキ  
モノニ非ス洋家ノ空ヲ分拆シテ二三或ハ四五トナスト云フモノハ必分拆セラル  
ヘキ者有テ而後ニコレヲ分拆スルナリ定テ知ル其拆スル所ノ空氣ト云ヘルモ或  
ハ少多厚薄アルヘシ大小方圓アルヘシ香味強柔アルヘシ四大ノ分拆既ニ爾ナレ  
ハ空氣ノ分拆モ亦決シテ然ラサルコトヲ得ス拆理必ス同シテ異ナルコトアルヘ  
カラサル故ナリ予故ニ曰ヘラク空氣トハ是空之氣ニシテ空即氣ニアラスト而シ

五



古人曰魚ハ水中ニ游テ水ヲ見ス人ハ氣中ニ游テ氣ヲ見スト爾ラハ即チ氣ヲ以テ空ト名ツク氣ノ外ニ空ナカラシ此モ聞エタルコトナリサレド物必有ノミ有テ無シト云フヘカラス實ノミアツテ虚ナシトスヘカラス陰陽ノ消息晝夜ノ交際一ノ闕クヘカラサルモノ、如シ理必ス然レハ事ヲ論スルコト毫モ差フコト能ハサルナリサレハ氣ノミ有テ空ナシト云フ論ハ取ルヘカラス若我佛教ニオヒテ其空ト稱スルモノヲイハ、或ハ无爲ノ唱ヲモテ示スコトアリ婆娑俱舍中三无爲ト名ツケ唯識瑜伽論ノ中ニハ六无爲ト名ツクミナ空ノ殊目ナリ又無爲ト稱セスシテ但ニ空トノミ名ツクルモノアリ般若經中シハ、三空門ヲ説キ又四空ノ目ヲ示ス楞伽第一ニ七空ノ名アリ仁王經上ニ十三空アリ乃至南本涅槃經廿三ノ中ニハ廿二空廿五空ヲ説ク大小乗ノ經論ニ在テ單複アリト雖モ空ノ異目ヲ列スルモノ凡ソ一百七十八種ナルヘシ大乘義章コレヲ具説ス學者就コレヲ研究シ推理シ彼ノ洋家ノ所謂空トイヘルモノ其中何ノ空ニ屬スルヤト云フコトヲ知ルヘシ蓋其色法ニ屬スル者ハ外道既ニ極微ノ所見アリテコレヲ分拆ス洋家近世機械測量ノ小法ヲ得ルノ基本ナリ大乘中ニ在テハ體空如幻等ノ觀ヲ建立シテ法無我ニ入ルノ方便トス外道極微分拆ヲ得ルノ基本ナリ大乘中ニ在テハ體空如幻等ノ觀ヲ建立シテ法無我ニ入ルノ方便トス小乘人無我ヲ得其洋説ノ

空ヲ説クニオケル淺略甚シキコト知ルヘシ蓋外道頑空中ニ蠢々シテ未タ頑空ノ實法ヲモ知ルコト能ハス況ヤ餘ノ空門ヲ開閉スルコトヲエンヤ眞ニ是象ヲ模シテ箕掃トスルノ徒ナルノミ

予誠固陋其洋書ニオケル未タ一行ヲ讀マヌ一理ヲ究セス而シテ云々抗説チナスモノハ實ニ盲者ノ五色ヲ辨シ難者ノ五音ヲ批スルナリ愧慚ノ至リニタニス師カ所引ノ洋書ノ音端ニ就テ且ク試ニ此ヲ論スルノミ尙餘説アルヘシ伏テ請フ再難ヲ垂示シテ予カ所説ノ不當ヲ指拆セヨ一言ト雖モ專ラ體法ニ關係ス其事輕カラス苟モ愚チモテコレヲ度外ニ舍カシニハ則ヨリ余カ意ニ非ス飲テ白ス

全體新論云々

涅槃經頭爲殿堂乃至佛頂頓珠密説乃至佛ノ本意ニアラス  
批シテ曰涅槃ノ文珍ラン經論中尙類文アルヘシ佛頂云々ノ説イカ、アルヘキ此レヲ密説ト云ハ、腹中經アリ神足經アリ解節經アリ千手千眼陀羅尼經アリ亦心ノ手足等ニアル密説ト云ヘキヤ事相顯著ナラサル者ハ証トスルニ足ラス佛ノ本意云々佛意ニシテ佛本意ヲ説カンニハ或ハ轉迷開悟トカ或ハ上求下化トカ或ハ開示悟入ナト云ヘルノ外ニハ斷トシテ云ハサルコトナリ法華經ニ佛一大事因緣出現於世ト云ヘリ一大事ノ言豈本意ノ義ニアラスヤ經論ノ中佛ノ大事因緣ハ心王ノ腦中ニ在ルコトヲ説カン爲メト云ヘル文アルコトナシ色心假合其實ハ虚妄ノ法



ナリ決了定實ノ説ニ非ス若此段ニツイテ語ヲ造ラハ唯佛説ノ二言ニテ足ル本意ノ語ヲ加フルハ過キタリ及ハサルナリ

辨曰佛氏多クハ心意識ノ方處實體ヲ失シ遂ニ誑誕虛妄ノ謗ヲウル云々  
批曰佛説ノ中ニ於テ心ヲ説クコト經論十百同異アレトモ心ノ方所實體ヲ指シテ  
頭腦云々ノ説ナシ密教ニ八葉心蓮云々ノ説アルヨシナレトモ予ハ未タコレヲ傳  
ヘサレハ今ニシテ顯然コレヲ陳説シカタシ教相中ニ在テハ心ノ相貌位處ヲ論ス  
ルコト唯識宗ヲクワシトス其宗ハ六經十一論ヲ以テ所依トシテ其説細々深々ナ  
リ而シテ未タ一處トシテ頭腦ノ説アルコトナシ蓋腦髓神經等ノコトハコレ梵土  
五明中ノ隨一醫明家ノ關スル所ニシテ其職トスル所病患養生ノ道ヲ窮理シテ人  
間一世ノ幻軀ヲ保護スルニスキス是ヲ以テ經絡ノ疏密ヨリ思慮ノ動靜ニ至ル迄  
通明透徹コレヲ掌ニ視カ如クセサルコトヲエス毫モコレヲ差スレハ死生ノ大事  
ニ係ル尤モ困學精窮スヘキモノナリ佛説ノ心ヲ示スモノハ分毫モテ醫明家ニ似  
サルナリ何トナレハ心地觀經中ニ佛心ヲ觀セシムルコトアリ觀無量壽經ニ佛心  
ヲ説テ大慈悲トス頭腦ノ説ナシ華嚴經ニ心佛及衆生是三无差別ト説ク頭腦ノ説  
ナシ厚嚴經ニハ阿陀那識甚深細ト説ク頭腦ノ故ニ非ス佛經中心ノ説アルコト百

(七三六)

(七三六)

千數ヲ知ラス而シテ説ノ頭腦ニ及フモノ未タコレアラス何か故ソ然ルヤ夫心頭  
腦ニアル唯人類ニ就テハ必ス然ルコトヲ知ルナリ若夫百足ハ節々是腦ナリト云  
フハ節々は心ナルヘシ或人鼈ヲ而斷スルニ双足左右ニ走ルト云ヘリ此腦四足ニ  
アリト云フヘキヤ爾ヲハ則チ足亦心ナルヘシ是ニ由テ此ヲ觀レハ鱗々皆腦ノ  
蛇モアルヘシ羽々悉ク心ナル鳥モアルヘシ獨リ頭腦ヲ心ノ所在トスルコト唯人  
ヲ爾リトスルカ佛説ノ心ヲ説クモノモトヨリ人類ニ局ラサルヨリ諸經ノ中頭腦  
心殿ノ説多カラサル所以ナリ佛説心ヲ示ス決シテ一準ナラサルコトヲ知ルヘシ  
心若シ五蘊ト相應スレハ欲界ノ果報ヲ現スイハユル頭腦心ヲ安シ節々腦ヲ要ス  
ルカ如シ心若禪定ト相應スレハ色界ノ果報ヲ感ス所謂初禪天ニ鼻舌兩識ヲ欠キ  
二禪以上五識皆アルコトナシ无想天中ニハ五百大劫ヲ經テ第六意識ヲ失没スコ  
レ等ノ天中ハ頭腦有テ心ナキナリ五根アツテ五識ナキナリ又心虚空ト相應スレ  
ハ其報ヤ無色ヲ現ス色蘊スヘテ斷滅シテ唯四蘊空ト相應ス此天頭腦アルコトナ  
シ心空中ニ流行ス然レハ則チ心ノ三界ニ在ル唯心ノ性ヲ論スヘクシテ心ノ所在  
ヲ議スルコトナキモノ此カ爲ナリ心ノ所在モトヨリ定マルコトナキヲ以テナリ  
是ノ義皆大小若大乘經中ニ在テ第八賴耶ヲ論セハ其説廣大ニシテ尋常ニアラス故



ニ凡下ノ爲ニ開演セスト説玉ヘリ今唯識論ニ就テコレカ少分ヲ云ハ、所謂第八  
 識ハ迷信ノ本源ニシテ因果ノ主トナリ第七識ハ四我ヲ體トシテ恒執ノ主ナリ第  
 六識外轉シテ三性ノ了別ヲ司リ前五識ハ五塵ニ對シテ現量ヲ司ル其ク凡夫ニ在  
 テハ有漏ノ了別ヲ體トシ聖位ニ在テハ無漏ノ知恵ヲ體トス第八識轉シテ妙觀察知ト  
 ナリ第六識轉シテ平等性  
 智トナル初地ノ菩薩コレヲ分得ス前五識轉シテ成所作智ト名  
 ツク第八識轉シテ大圓鏡智ト名ツク妙覺ニシテコレヲ滿足ス蓋識ノ體タル凡聖異ナリトイ  
 ヘトモ皆了悟ヲモテ性トス其法タルスヘテ因緣所生ニシテ其實ハ依他如幻ヲ相  
 トス故ニ或鏡像ヲ以テ是ヲ喩ヘ或ハ緣影ヲ以テコレヲ示ス並ニ心識ノ實體固ヨ  
 リ執スヘキ者ニ非ルコトヲ比説スルナリ故ニ根境識ヲ判スルニ唯能依所作ノ名  
 ヲ以テス決シテ能居所居ノ目ヲ以テセス且意識ノ所依ヲ説クニ至テハ前念ノ意  
 根ヲ以テ所依處ト定ム大小乘ノ通説ナリ色法頭腦ヲ以テ之カ所依處トスルノ説  
 ナシ若經中タマハ心殿等ノ説アルハ人界法得ノ一種ニ付テコレヲ  
 云ヘル者カ決シテ十界總括ノ心王心處ヲ説クノ正説ニアラス又第八識ニ就テ三種ノ  
 相ヲ説ク謂ク種子ト有根塵ト器世界トナリ器世界トハ山河大地羽毛鱗甲ミナ第  
 八ノ變現スル所トス是ヲ第八ノ相分ト名ツク了別ノ義ヲ離レテスヘテ非情ニ屬  
 ス華嚴經ニ一切唯心造ト説ケルコレノ謂ナリ心體局テ頭腦ニ在テハ何レノ時カ  
 心體山林河海草木トナル事ヲ得ンヤ唯識ノ四分ヲ説クハコレノ謂ナリ夫心鏡依

正ハ因緣ノ發現スル所ニシテ能依所依ヒトシク畢竟空ノ法門ナリ決定ノ説ヲナ  
 スモノハ皆外道ノ我執ニ入ルオソレサルヘケンヤ般若經曰色即是空空即是色ト  
 此レノ謂ナリ

辨曰想蘊妄識佛氏斷シテ餘リナキニ至ル云々

批シテ曰想ハ五蘊ノ隨一ニシテ心所ノ一位ナリ俱舍論ニハ大地法ノ一種ニ名ツ  
 ケ唯識論ニハ五遍行ノ一種ニ屬ス皆云フ想ハ善惡無記ノ三性ニ通スト故ニ惡ニ  
 屬スル妄想ハ斷スハ善無記ニ屬スル者ハ斷スヘカラス今斷シテ餘リナシトイ  
 フモノハ且ラク惡妄想ヲ指ス故ナルヘシ爾ラハ語ニ簡別アルヘシ汎然トシテコ  
 レヲイフトキハ三性漫濫ノ過アリ但シ舊譯ノ經論妄想顛倒等ノ語アルハ此想ヲ  
 意識ノ總名トシテ憶想妄想ノ想トス蘊中ニ列スルノ想ハ想像ノ想ニシテ僅ニ心  
 處ノ隨一ナリ想ノ言同フシテ想ノ義ハ總別位ヲ殊ニス辨白ノ想蘊妄識トイヘル  
 ハ語様汎濫ス是ヲ正スヘシ且斷不斷ヲ論スルハスヘテ小乘ノ所説ニシテ且因中  
 菩薩ノ法門タリ天台以上圓頓ノ法則ニヨラハ妄即眞ト達ス故ニ圓頓止觀ニ曰煩  
 惱即菩提ナレハ集ノ斷スヘキモノナシト云ヘリ爾ラハ則チ辨白ノ佛氏斷シテ餘  
 リナキニ至ルト云ヘルノ佛氏語ハ台家ノ肯セサル所ナリ禪家ニシテ是ヲイハ、



大達ノ所謂莫妄想ニ屬スサラハ是語ハナキヲ是トスル者ニ似タリ如何マタ別ニ造語アルヘシ

辨曰又佛氏心意識ノ依處ヲモシラス識知ノ本據ヲモ辨セス徒ニ高遠ヲ談シ徒ニ空理ヲト度シ遂ニ佛法ヲ以テ空談虛義ノ妄説トナサシム乃至聖ヲモテ兇主兇魁トナサシム

批シテ曰ク唯識論第八ノ文十五依處門アリ其中第七根依處ヲ説ク謂ク心々所ノ所ハ依六根ナリトノミイヘリ王處ノ所依處コレヲモテ定置トス所謂其現在第六ノ意識ハ前念ノ意ヲ以テ根トシ現在第八識ヲ以テ依止トス故ニ三十頌ニ依止根本識ト説ケリ第七識ハ第八賴耶識ヲ所依トス故ニ頌ニ曰依彼轉縁彼ト云ヘリ彼ノ言ヲ論ニ釋シテ曰ク藏識是ナリト第八識ヲ説クニ至テハ唯識論ノ中八段十義ヲ以テ頌シ十理五經ヲ以テ此識ノ在ル所由ヲ証ス其文廣博其義精密以テコレニ加フルコトナシモト佛説ニ根據シテ彌勒無着世親等ノ諸ノ大士ノ讚説スル所實ニ唯心最上ノ聖教ト稱ス可シ而シテ此中所縁門アレモ所依門ヲ説キ玉ハス所謂根塵器界ノ諸ノ色法ハスヘテ第八識ノ變現ニ就テ是ヲ説第八見分ノ所縁トス苟モ内外ノ境ヲ以テ第八識ノ所託トシ所依トストハ決シテ説カサル也故ニ頭腦ヲ

CHINESE  
CANTON

以テ心識ノ所依根據トストイヘルノ説ハ聖教門ノ中斷然トシテ此アルコトナシ或人誠カ云テ云々スルコトヲ難シテ曰ラク夫地ナクシテ屋舍何クンカ建タン屋舍ナクシテ人イツクニカ安住セン火ヲ把ンニハ火櫃ヲ用ヒ水ヲ汲マンニハ柄杓ヲ用フヘシ既ニ依報ト名ツク正報ノ所依ト稱スヘシ苟モ依報ナクンハ正報何ニ依テカ住セン苟モ色蘊ナクンハ四蘊何ニ依テカ安住セン此理誰カ之ヲ疑ハン故ニ婆娑七十四ニ云前四蘊アリ識住其中乃至識ハ住色中云々俱舍光記ニ之ヲ釋シテ曰四是所住識是能住又瑜伽論五十四曰識蘊差別説五種中第三由所依文曰識隨色住倫記コレヲ釋シテ曰意識隨色住即是依住若所依住唯依自身色等四蘊等ト云々ス然而此中僅ニ色トノミ説テ色質一身ノ中何レノ所ヲ以テ所住處トイハサルハ尙是論藏古説ノ疎漏ナリ今ニシテ心王頭腦ヲ以テ其所依ト定ムルハ洋家未曾有ノ精密ヲ窮メタリト云フヘシ況ヤ頭漏心藏ノ論ニ至テハ唯識家ノ十大論師ト云ヘトノハ頗ル闕典ト云フヘシ況ヤ頭漏心藏ノ論ニ至テハ唯識家ノ十大論師ト云ヘトモ未ク夢ニタモコレヲ知ルヲ能ハサルオヤ大小乗ノ論説既ニ所住能住對説ス又依住ノ語ハ能所ヲ併稱ス子獨リ能住ノ識ノ義ノミヲ論シテ所住ノ色蘊ノコトヲ忽緒スルモノハ既ニ大小乗ノ論藏ニ乖ク況ヤ頭腦ノ細論ニ達スルコトヲ得ンヤ



但コレニ辨アリヤ否ヤト答曰婆娑俱舍兩論ニ説テ能所ヲ論スルハ且ラク五蘊ノ次第ヲ論スルカ爲メナリ故ニ或ハ五蘊ノ危細ヲ以テ次第シ或ハ隨器ヲモテ次第シ或ハ隨器ヲモテ次第ス今ノ難問ニ云ル婆娑ノ所引ハ其中隨器ノ一義ニシテ請客ノ喩アリ頌流ノ一七十又隨器ノ一義ニシテ且ラク能所ノ説ヲ設クル迄ナリ五蘊ヲ釋スル中其能所ノ名ヲモテ釋スル者ハ論説ニ在テ僅ニ此一段ノミニアリ意識ヲ正釋スル諸門分別ノ中ニオケル未タ會テ所依所住ノ識ニ及ハサルナリ其旨ハ瑜伽ノ文ヲ解スルニ至テ之ヲ知ルベシ遁倫記十一之此瑜伽ノ文ヲ釋シテ曰ク四識住ノ義四門分別ス初明教起外道執識爲我四蘊爲我所是我住所佛破此執而告彼言色受想行是識所住而非此我由此因緣故佛世尊說識住義此釋ニ由ルニ四識住ノ中且ラク能所ノ依住ヲ説クコトハ諸ノ外道五蘊ヲ取テ我々所ト計スルヲ以テ其見ヲ對治センカ爲ニ五蘊ヲ分拆シテカリニ能住所住ノ名ヲ立ルナリ識ヲ能住トシ受一所ニ住トス體獨リ色蘊ノ必ス能住所住ニ實物アツテ色乃至識ト名クト執セハ亦是外道ノ一我見ニ墮ス唯五蘊皆空ノ知覺ヲ希フヘシ五蘊能所ノ實執ヲ取ルヘカラス亦瑜伽論五十一ノ中經ヲ引テ曰ク我終不説此識住於東方乃至四維云々遁倫記此文ヲ釋シテ曰外道計我死後住於東西等今此非之蓋欲界ノ二色ノ如キ識ニ來

去ナキニ非スト云ヘトモ而レトモ外道ノ識ヲ執スル堅實ナルニ對シテ且ラク無往來ヲ説クナリ善巧方便尤モシカルヘシ不達ノ人コレヲミテ或ハ識ニ住處アリト云ヒ或ハ識ニ往來ナシト云ハ、僅ニ文ノ似タルニ認メ義ノ大ニ差スルコトヲ辨セサルナリ學者知ラスンハアルヘカラス難者地水火ヲ以テ實メ依報正報ヲモテ追ルモノハ其理淺薄ナリ蓋地水火ハ地水火ノ體ニ就テ冷暖等ヲ論ス可シ何ンカ火又柄杓等ヲ以テ是ヲ論センヤ其是ヲ把リ之ヲ汲ムハ一時ノ轉用何ソ決定ノ喩トナスヘキ又依正二報ヲ以テ實ルモノ理盡ノ難ニアラス何ソヤ欲色ハ必ス正報モテ依報ニヨルヘシ上界無色天ノ如キ四蘊唯虚空ト相應ス無色ニ細色アルノ説ハ有部ノ説ニ就テコ決シテ依報ノ關係セサル所ナリ識必色ニ依リ心必ス頭腦ニ依ルナト云ハ、但是人界假令ノ一説ニシテ決定ノ識ニ非ルナリ依色ノ義猶識依ノ正説ニ非ス况ヤ頭腦ヲ所依トスルノ説ニ於テヤ且夫大乘ニオケル有爲ノ法タル如幻即空ト説ク又依他起性ト説ク又因緣所生ト説ク空華是ヲ喩エ馳達婆城是ヲ譬フ一ノ實物ナシ豈心識能所ノ二名ヲ立ンヤ若シコレヲ以テ佛法眞實ノ險處ト定メハ狂狗ノ土塊ニ吠エ醉猫ノ鏡影ニ戲ムレタランナリ若心殿頭腦必ス説クヘクンハ大小經論罪々コレヲ説クヘシ佛天眼ノ照鑑スル所何ソコ、ニ及ハサルヤ



翻譯ノ三藏果シテ此ヲ傳ヘテ譯出セスンハアルヘカラス夫然ラサル者ハ何ツヤ  
 經論ノ中三科法ヲ説クコト數十所而シテ体用ニ就テ議スルコトアレトモ能所ニ  
 就テハコレヲ論セス蓋識心ノ色法ニ係屬スル者固リコレヲ言テ示スニ足ラサレ  
 ハ也且婆娑瑜伽ノ論説ニ由レハ心ハ色處及ヒ餘ノ三蘊ニヨルト説ケリ色ノ一蘊  
 ニ由ルトハ定メサルナリ大小論藏此  
既ミナ同ス其事上ノ難者ノ所引ノ婆娑瑜伽等ノ文ヲミテ  
 知ルヘシ唯識論等ニ外道ノ我ヲ執スル三計ヲ出テス一ニ即蘊五蘊ニ即  
我ト立ツニ離蘊  
五蘊ヲ離レ  
テ我ト立ツ三ニハ非即非離蘊双非ノ我  
皆是蘊ヲ實物ト執シ又我ニ實ヲ認ムルノ計ス  
 ル所也識心ノ能居所居ヲ議スルモノ世俗ニアツテハ其説究竟スルニ似タリトテ  
 稱スルニ足レリトシテ執テ此ヲ佛家ノ摸範トヒンコト予ニオケル尤モ疑ナキ能  
 ハス今ニシテ云々贅説ヲ作ルモノコレカ爲ナリ敢テ請フ炬ヲ舉テ再ヒ冥路ヲ示  
 セ

全體新論一紙十六 曰腦爲全體主云々乃至其靈則在腦云々生理發蒙十一紙廿二 曰靈魂  
 形ノ有無腦ニ舍ルカ將タ全質ニヤトルカ未タコレヲ端倪スヘカラサルコト亦猶  
 人ノ思慮辨知ハ知覺神經ノ作用ニヨルカ腦質ノ變化ニヨルカ又運動神經ノ根ニ  
 ヨツテ起ルカ意識ノ感應ニ由テ起ルカ未タコレヲ究極スヘカラサルカ如シ

辨曰此論精密知リカタキヲ知リ難シトス不測ヲ不測トス云々

批シテ曰全體新論生理發蒙共ニ各洋學ニ名アル者ナルヘシ而シテ一ハ靈魂在腦  
 者ト決シ一ハ腦カ全質力ヲ決セスト云々師ノ上來ノ所論ヲ讀ムニ在腦ノ説ヲ用  
 ユル者ニ似タリ然ルニ今發蒙者未決ノ説ヲ立ツルニ至テ辨白シテ云難知ヲ難知  
 トシ不測ヲ不測トスト云テ發蒙ノ所言ヲ指シテ此論精密ト歎ス其意マタ發蒙ノ  
 未決ニ朋フモノニ似タリ前言後語ニ應セサル者ハ果シテ其説アルヘシ文面粗略  
 ナレハ事委曲シカタシ再ヒコレヲ示セ

辨曰蓋コレヲ明了ニセント欲セハ三心ノ本體ヲ究了スヘシ其本體明瞭ナラサ  
 レハ萬病千障ノ原由決シテ測ルヘカラス佛氏ノ精究實證ス豈此ヲ詭誕无實ト  
 イハンヤ

批曰佛氏三心ノ本體ヲ精究實證ス而シテ後ニ果シテ人間ノ萬病千障ヲ醫スル人  
 トナルナント様ニ聞エテ一段ノ文章吾僧家ニ在テ快カラス尙造語ノ法アルヘシ  
 サテ三心ノ本體ノコト始メニコレヲ云々スルカ如シ三心ノ語過失アリ佛家ノ通  
 名トスヘカラス且師ノ所謂三心ノ語ハ其法固リ十界ノ依正二報ニ互ル獨リ頭腦  
 アル人界ノミニ局テコレアルニ非ス將タ又無色界ハ色體ナシ況ヤ頭腦ニ於テヲ



オヤ色界ノ中无想天ハ五百大劫无心ニ坐メ色質アルモ心王心處コレアルナシ  
 二禪以上ハ五根アレトモ五識皆無ナリ欲界ノ中第六識ノ如キモ悶絶極睡眠等ノ  
 五位无心ニ住スル時ニオケル識断滅シテ其體ヲ失ス腦ノ堅剛ナルモコレヲイカ  
 シトモスルコトアタハス聖者ノ滅盡定ニ入ル如キ一毫心識ヲ存セスシテ或ハ半  
 劫一劫ヲ經歷ス然ルトキニ當テ頭腦夫何ヲカマツヤ又曰獨リ頭腦ヲ以テ心殿ト  
 定ムル其人間ニ在リテハ是ナリトスヘケレ百足ハ節々是腦ナレハ三心モ又節々  
 ニアルヘシ爾ラハ一節一心アリテ二節二心トナルヤ一節三心アリテ二節合シテ  
 六心トナルヤ果シテ然ラサルヤ且問頭腦所在ノ人心ト三心ト其体同トセンヤ異  
 トセンヤ若異ナラハ起信論ハ但ニ衆生心ト云フ唯識論等ニハ唯心唯識ト云フ人  
 心モ三心モ必ス一同ナルヘシ若同ナラハ人心ハ凡心ニシテ本覺心ハ聖心ナリヒ  
 トシク一頭腦中ニ共居シテ並ヒニ一心ト稱スヘケンヤ且本覺心ハ頭腦中ニ在テ  
 上ニ位シ不覺心ハ腰髓ノ際ニ在テ下ニ位ス只均シク心ト稱ス而シテ迷悟兩々分  
 拆ノ理アリヤ論說ニハ二心并起ヲ許サス但等無間縁ノ次第起ヲ許ス迷悟兩處分  
 拆位ヲ異ニスル者ハ却テ并起ヲ許ス者ニ似タリ又無明即明ノ理ニ差フ者ニ似タ  
 リ又一衆生心ノ義ニ違スルニ似タリ又唯心唯識ト說クニ乖背スルモノニ似タリ

蓋シ佛法ハ一法ト說テ二法ト說カス法華ニ唯一乘法無二亦無三ト云フ維摩ニ  
 不二法門ヲ說ク是ナリ又無ヲ說テ有ヲ說カス般若ニ諸法皆空ヲ說ク所謂無智亦  
 無得以無所得ト說ケルモノコレナリ二祖大師曾テ求心不可得トノ玉ヘル者ハ般  
 若ノ說法ナリ誠カ見ル所ヲ以テ云ハ、佛法ノ實驗ハ唯此不可得ヲ以テスルノミ  
 三世十方ノ賢聖皆是ヲ以テ佛法ヲ說ク餘法ヲ以テ是ヲ說カス故ニ法華ニ曰餘二  
 即非眞ト圓覺經曰一路涅槃ト又曰一道清淨ト果シテ兩々分拆シテ心ヲ說クノ例  
 アリヤ否ヤ古言ニ曰先入主トナルト蓋名利ニ先入スル者後ニ佛法ヲ說ケハ佛法  
 悉ク貪瞋ノ嗅ヲ帶フ洋學ニ先入スルモノ後ニ佛法ヲ說ケハ佛法悉ク洋嗅ヲ帶フ  
 儒學ニ先入スル者後ニ佛法ヲ說ケハ佛法悉ク儒嗅ヲ帶フ顯密大小ニ先入スル者  
 後ニ佛法ヲ說ケハ佛法悉ク顯密大小ノ嗅ヲ帶フ教内教外ニ先入スル者後ニ佛法  
 ヲ說ケハ佛法悉ク教内教外ノ嗅ヲ帶フ有宗ニ先入シ空宗ニ先入シ非有非空ノ宗  
 ニ先入スル者後ニ佛法ヲ說ケハ佛法皆有空中ノ嗅ヲ帶ヒサル者ナシ先入主トナ  
 リテ其眞ノ无所得ノ法門ニ違セサルカ爲ナリ三十二ノ菩薩ハ皆深位ノ證ニ稱フ  
 人ナリ而シテ尙文殊ノ无言ヲ以テ无言ヲ說クニ及ハス文殊ノ證悟コレヲ維摩ノ  
 一默ニ比スルニ尙三舍ヲ避クルト聞ク况其種々ノ嗅氣ヲ免レサルモノ種々ノ主



宰ヲ帶ル者ノ佛法ヲ説クニ於テオヤ説得テタマタマ相似タルモ猶魚目ノ真珠ニ似タル者ニシテ六祖ノ所謂法華ニ轉セラル、人ナルノミ恐レサルヘケンヤ欽マサルベケンヤ苟佛法ノ稱ニ就テ實驗ヲ求メント欲セハ實相般若ノ實ノ言ヲ以テ説クベシ若夫然ラスンハ悉ク妄説ニ墮ス般若經ニ曰一法ノ涅槃ニ過キタルコトアラシモ我説ク如幻如夢ト是ニ由テ此レヲ觀レハ師ノ言ヘル五蘊能所ノ法ヲモテ佛法ノ實驗ト稱スル者ハ佛法ノ名實甚タ相稱ハサルモノニ似タリ且師ノ稱スル三心云々ノ説ハ其理モトヨリ佛家大乘不共ノ説ニシテ凡夫外道ノ識知シ及ハサル所也故曰阿陀那識甚深細爲凡下不開演唯識論初能變ノ下ニコレヲ引クト説テ第八頼耶ノ境ハ二乘猶コレヲ解知スルコト能ハス況ヤ凡下ニ於テオヤ本覺不覺等ノ起原ニ於テオヤ謂テコレヲ言得タリトモ外道洋家豈コレヲ信知シ實驗トスルコトヲエンヤ師ノ説云々精細ナリ以テ世間ニ對シテコレヲ實ニミツヘク信スヘキモノトスルモノ果シテ必ス然ルヘキヤ否ヤ予ニ於テ甚其疑ヲ懷ク斯ニオヒテ師カ禪定中所得ノ文ヲ寫シテコレヲ我教相中ノ説ニ合セントスルニ參差悞悟一ニシテ足ラス止ムコトヲ得スシテ楮公ヲ備ヒ管城子ヲ勞シテ以テ師カ一喝ヲ待ツ蓋シ洪鐘モコレヲ叩カサレハ鳴ラサルヲモテナリ欽テ啓ス恐懼ノ至リニ耐エ

(五十一)

ス偈ニ曰ク

頭腦久悶亦醜病。 試須毘盧舊觸體。 配劑任君丸與散。 且加一盞死牛溲。

辛未十一月

東京兩國橋東沙門行誠敬白記錄



宰ヲ帶ル者ノ佛法ヲ説クニ於テオヤ説得テタマタマ相似タルモ猶魚目ノ真珠ニ似タル者ニシテ六祖ノ所謂法華ニ轉セラル、人ナルノミ恐レサルヘケンヤ欽マサルベケンヤ苟佛法ノ稱ニ就テ實驗ヲ求メント欲セハ實相般若ノ實ノ言ヲ以テ説クベシ若夫然ラスンハ悉ク妄説ニ墮ス般若經ニ曰一法ノ涅槃ニ過キタルコトアラシモ我説ク如幻如夢ト是ニ由テ此レヲ觀レハ師ノ言ヘル五蘊能所ノ法ヲモテ佛法ノ實驗ト稱スル者ハ佛法ノ名實甚タ相稱ハサルモノニ似タリ且師ノ稱スル三心云々ノ説ハ其理モトヨリ佛家大乘不共ノ説ニシテ凡夫外道ノ識知シ及ハサル所也故曰阿陀那識甚深細爲凡下不開演唯識論初能變ノ下ニコレヲ引クト説テ第八頼耶ノ境ハ二乘猶コレヲ解知スルコト能ハス況ヤ凡下ニ於テオヤ本覺不覺等ノ起原ニ於テオヤ謂テコレヲ言得タリトモ外道洋家豈コレヲ信知シ實驗トスルコトヲエンヤ師ノ説云々精細ナリ以テ世間ニ對シテコレヲ實ニミツヘク信スヘキモノトスルモノ果シテ必ス然ルヘキヤ否ヤ予ニ於テ甚其疑ヲ懷クス斯ニオヒテ師カ禪定中所得ノ文ヲ寫シテコレヲ我教相中ノ説ニ合セントスルニ參差悞悞一ニシテ足ラズ止ムコトヲ得スシテ楮公ヲ備ヒ管城子ヲ勞シテ以テ師カ一喝ヲ待ツ蓋シ洪鐘モコレヲ叩カサレハ鳴ラサルヲモテナリ欽テ啓ス恐懼ノ至リニ耐エ

(廿五)

ス偈ニ曰ク

頭腦久悶亦釀病。 試須毘盧舊偶體。 配劑任君丸與散。 且加一盞死牛溲。

辛未十一月

東京兩國橋東沙門行誠敬白記錄



寒林集

(七五十三)

梵語尸陀婆那。此翻寒林。僧祇律云。此林多死屍。人入寒畏。誠今八句。殆將臨尸陀林。今春辭職。隱居墨川下流之地。門弟比丘循誘。爲造一草庵。乃扁號寒林表安生前之屍也。請遠州岑滿翁書字。翁亦向八句。同法舊知音也。所作之詩文。亦題以是。河東隱士行誠誌

山岡鐵舟居士。修千僧大會於兩國橋南。吊水死之靈也。各宗僧伽歡喜來集者。凡一千八百人云。天晴風靜。予亦力病臨之。是乙酉歲八月廿九日也

國家百計吊生民。居士一心慙死人。鐵舟之目始知實。運載群靈渡毒津。

乙酉之年。臥病待死。至冬稍快。而耳聾脚躓。醫言輕中風症也。

先是議隱居衆不許。至此再督促。遂以丙戌三月廿九日。退隱

高橋本誓寺。寺門下比丘循誘所居也。余病未全癒。乃題。

元是人間無用人。空過八十歲秋春。殘生適卜茅庵地。墨水下流漁父隣。



予也稟質多病天性怯懦聊好學道未能致大成易居所凡十數於其所至徒弄山川  
雲烟耳無與學之迹無筆道之美偶應衆請來葦綠山住七年亦闕與廢繼絕之舉  
僅以免肉妻蓄髮酷令而已慚愧亦有餘承句以空過爲言者由之

新田大光院靈瑞上人補綠山後職賦贈

十萬緇徒欽送迎。管長尊位極宗榮。所期唯在存和合。盛德幸彰僧道清。

落花

香風向曉拂袈裟。片片紛紛看落花。一望林園唯一白。霧中家似雪中家。

示畫工

出山乞食幾村巡。鐵錫一聲震海濱。若有畫工來見我。洗毫須作畫中人。

隱居偶題

墨水下流卜隱居。前園植竹後園蔬。園中有鳥啄生飯。盡日無人妨讀書。  
解脫分分段段班。向上無上無門關。乾坤喪跡吾喪我。世界三千歸一闌。  
筆圃舌耕非福田。松風蘿月好因緣。沙門須念真三寶。僅動一心鬼舉拳。

讀大乘義章

孰與三賢十地雄。此公特占法門功。大藏潮勢殆如海。無限波瀾湧掌中。

詩聖偈

麟鳳龜龍任所御。虬宮天界到何方。降臨願受微供養。猶是閻浮小道場。

將西行留別諸子

誰法精神尙未衰。復擔衣鉢向京師。他時人間老僧骨。華頂峯頭百尺崖。

觀大相國公紅人飛不到篇

靈液滌仙骨。松聲拂百愛。紅塵飛不到。綠水繞家流。

蔡讓昔製萬安碑。千歲至今傳一奇。大井名橋天下美。名文名筆造人誰。

甲申會岑滿翁于金谷旅亭。談及萬安橋古事。乃賦贈

十人知己九人無。衰老僅存未死軀。三訪西岸時談舊。主公不倦對於吾。

過九度山吊真田氏墓

今古英雄同機心。耕雲九度萬尋深。草廬未及三分略。人誦當年梁父吟。

甲申四月五日過岡崎訪寶公

欲談八萬劫前事。適值火光三昧中。遮莫龍華演說曉。明朝先謁舍那宮。

甲申四月登山周爐呈阿闍梨

八葉華藏界。百花爲骨筋。鐵錫穿苔石。草鞋蹈白雲。掬水摩尼冷。對僧三昧  
熏。欲聞三寶鳥。時早未能聞。



宿高野山無量壽院。昔呈增隆阿闍梨。

奇石怪巖昇亦下。千尋絕壁湧雲時。憶昔大師開拓日。艱步百廻不聽辭。

下花坂。九折羊腸。雨未晴。

爲待輪車到。喫茶且吸煙。青垂楊柳雨。錢笠人勸田。

狂風急雨山如海。萬籟怒號殆洄瀾。前進藍輿離一步。白雲中隔不能看。

越六甲山赴兵庫途中

相別索居三十歲。衰顏汝亦與吾均。三心四修常我具。願看六度日新新。

再逢智誠比丘于西安寺。乃書與

固非摩詰默然日。正是音聲佛事時。說法對機未看倦。勝緣勝境不愆期。縱橫寧借蘇張辯。孝悌恒須我貢辭。老耄早知居士悟。佛心唯止大慈悲。

巡拜靈地。到攝海。逢神原大士。言爲明道協會也。乃書與

知否此地非常地。昔日如來轉法輪。敬煮淡茶供各座。六和清衆悟前身。

昨來登座漫說。頗污清衆耳朵。不堪慚愧。聊供香茗一斤。謝過以拙辭。

寺名九品東天滿。佛佛光光相好新。勸請從今千萬歲。隨緣利益濟天人。

(七五七)

寓攝海拜九品佛

二百年前墨。三千里外毫。毫爲天馬製。墨銘叶金號。花下香文字。月前誇絕高。由來問世物。老骨覺肥膏。

大庭氏主人所贈古墨及唐筆一握。墨者係慶元際。筆則以天馬毛製焉。或人曰。兩品併希世之物也。若論價則殆當五拾金云。乃咏一絕謝。

五十年前曾入夢。杖穿嶮石覺崔嵬。本來寤寐是同事。今日登山第二回。

弱齡游學之日。一夕夢上書寫山。爾來五十年。今日始登之。不堪歡喜。乃書拜呈本尊及開山大師影前。

書寫元非塵世境。溪聲松籟盡幽閑。神明早借聖空手。寫得六根清淨山。追蹤五十年前夢。今日躋攀書寫峯。清籟一聲如喝道。法華塔畔兩株松。

船中齋食

人言船內瀆洋食。與我湯波與木瓜。把箸未終三兩椀。既過姬路到高砂。

敬聞巡化防州將就歸途。予明朝發途向竹生島。恐不能謁見。

叙一偈。以爲留別。



雖有一與兼一廢。猶看神鬼護斯文。大教維持存華頂。願扇春風四海熏。

寄人

白髮衰顏窮老容。共在人間亦一奇。曾結同盟和合海。齊規法則遺教兒。別後十年何所見。斯文九鼎繫維絲。六塵界中無用客。再試回瀾未死時。

宿花清樓。曉觀養老瀑。

曉雲埋嶺殆如海。飛瀑似驚濤卷風。霏霏之間何所見。花清亭是一龍宮。

雨中詣勢至堂

霖雨欲晴猶未晴。烟雲暗淡隱樓城。松風適聽似琴韻。憶起舊年絲竹聲。

宿神戶里會于千和老人

淵明歸去妙而奇。人世利名屬腐皮。堪羨此翁多所慰。吟詩才能及園基。

寓東光寺

緣竹元存君子風。直高千尺衝蒼穹。雲圍紺苑隔塵俗。雨洗玉珩裝梵宮。

甲申七月中旬。寓于杭瀨川泰蓮社。時霖雨激浪怒號。遽衝長堤。點火百千徹曉。殆以有壞堤之虞也。翌夕雲散。少見星點。堤上幽寂乃作。

上幽寂乃作。

(七五七)

(七五八)

雨止浪收江上靜。水烟半隱荻蘆青。長堤昨夜百千火。今夕僅看三兩莖。

寓泰蓮衆妙門者數日。書示主僧

千里夢魂無所住。東西南北駕舟車。曉來自怪宿何處。猶是泰蓮臨水家。

七月廿一日雨晴舟行至桑名。尋到四日市光運寺。寺門莊麗乃舒懷

乃舒懷

十里舟行二里車。草田一里駕藍輿。三乘誰道殊其益。同入摩訶般若居。名院

大智梵曰摩訶般若故言

丙戌七月見幻燈會。山川位置。人畜動搖。實奪鬼工。曾聞有待

乳氏數加改良也。蓋比諸時昔影技雲泥尙爲近矣。戲題短篇

幻人施幻是何仙。展轉地球搖九天。萬里未須航海術。一燈點出百山川。

丙戌六月造草庵一字。令岑翁書扁額。乃題寒林二字及神通

遊戲四字。而郵附時翁七十八。勁神餘韻。龍飛鳳翔。賦一偈以

謝。全編冠四友字。

硯池變黑寧稱巧。紙紙寫經亦空空。筆下誰玩遊戲定。墨痕忽視大神通。

丁亥五月出深川隱舍。再向西京臨行。而述懷



出處行藏何足怪。無常佛說不欺人。老僧業報當斯殞。如是之緣如是因。

丁亥五月強起於隱居。來行晉山之式。大野某寄詩見賀。和韻酬之。

五十年前遊此山。再臨祖廟淚浮顏。從今俗諦兼真諦。久任偏存外護間。

富士圖

八面玲瓏玉放光。全身潔白雪為裝。凌天一萬三千丈。恰似老僧一寸腸。

窻梅

十歲文章學。寸陰畏廢頹。春風吹不及。郁郁恥窻梅。

探春

野水殘冰白。橋邊草未伸。曳筇臨酒店。三兩早梅新。

春夜聞笛

聲聲吹覺孤山夢。月色朦朧照小家。莫道梅邨中夜好。不關一曲落梅花。

為故亞相峯巖院殿。二百五十周追資修一七日法。賦野偈一章。

一衰一盛泡有質。萬生萬死夢無痕。彼岸寶諸須到達。晴徹巖公故納言。

凡位行人晉亦退。生生世世大槃同。順逆因緣華藏海。用心尤在禦邪風。

丁亥元旦

手折梅花插水瓶。恭呈三寶念丁寧。改毫洗硯為何事。先寫大乘心地經。

癸未臘末

出家為衲子。瘦鹿脫煩籠。塵事無人語。荒園有鳥通。霜寒獅座石。松動虎溪

風。一歲今將盡。寫經猶未終。

青松寺講遺教經

蘭若門頭三尺雪。皚皚歷盡一枝梅。誰知半偈無常語。忽現青松白玉臺。

題濃洲舍利塔送光堅阿闍梨

捧舍利羅忘老境。開梨宿習不尋常。昔聞八萬四千塔。今見百千高建光。八

部獻花宵與曉。龍天灑水清而涼。濃州千里吾難到。遙拜法身本地場。

贈等象齋介石道人

五大洲中無等象。鬼工神算實耐驚。人間適得佛效力。天地方圓始復正。

恭拜旃檀瑞像

羅什負真日。齋然代像時。威靈今猶古。稽首正徧知。



字字現來金色身。偏傍照曜照天人。卷叙殆入靈山會。金口無聲轉法輪。

喫糜餅丙戌五月喫糜餅吟書呈岑菩薩机下

首陽高矣躋攀難。采薇之歌千歲觀。昔日我試諸日坂。粗製淡泊且小團。倏  
領恩施上上品。亦見調法吐肝丹。兩袋一日供十口。雙筋三椀盡九九。炮鳳  
烹龍吾不識。熟蘇醞醐須比端。嗚呼清味遠勝周家粟。宜乎采充夷齊餐。

寄東海玄虎

盡心竭力盛年事。可惜一秋且一春。八十老僧無所用。空爲半死半生人。

寄玉川里人

白玉川流日日新。誰知此地球磨滾。學而時習君休懈。讀也有書教有人。

移雙松於羅漢堂前

五葉松一株江幡梧樓後改氏那珂翁所贈松山之種也。乃植諸礫

水清淨心院園。凡五十年。今長爲二丈餘。予所居有轉必移

焉。凡四度。方今予八十齡。餘命在旦夕。乃移栽本地五百羅

漢堂前。以爲一莊嚴樹。

五十年前栽與種。與吾久住莫量峯。初疑籬下一根草。漸比床頭三尺筇。清

(五十五)

額未驚雲外鶴。翠鱗既似鉢中龍。誰知千歲凌天日。世上呼言羅漢松。

旭師贈小狗二頭曰願與佛性

前世天王後世人。今生誤入毛衣市。休言佛性有兼無。佛性既爲雙狗子。

送巨寬禪衲

倏聞金錫響。田福出山房。對機演真法。應病解藥囊。花香分術路。月照坐禪

牀。異日人將語。道存東海方

偶述

名利斬身刀。貪瞋煎意釜。釜中煎如鮒。刀劍斬似蠶。非人曾未知。雖知不能  
拘。何故不拘之。由宿習所鼓。習宿是何爲。愛執不可迂。爲妻又爲夫。爲子亦  
爲父。習習爲氣分。世世重劫數。身見常愛身。取見恒執取。煩惱遂爲君。邪魔  
稱天主。作惡爲賢良。修善爲愚魯。前世無少違。今生不能迂。未來渡未來。生  
生唯覺愈。見厄不知遷。食毒不知吐。若非風狂人。抑爲生來瞽。果必生於因。  
此因何處照。所照有三途。各各積大苦。此苦不可癒。三千世界中。誰對治。此  
蠱。唯有佛世尊。破眠叩戶戶。對機說法先。應病與藥祖。一代八十年。天地見  
鼓舞。半備教字懸。開閉各有矩。如君之撫臣。似母之與乳。三草與二木。悉潤

十一



一乘雨。頓漸與難易。成文且殊舖。製削有方圓。無不由慈斧。早屠二執城。而縛降三毒。奏勝唱凱歌。蓋歸正覺府。偶然不用心。誤入六師堵。人身得不具。正法甚難視。我壽不時明。百年誰得帖。願降諸戲命。靜坐菩提樹。佛鬼元如如。迷悟何分炬。僅誤一點語。五百生野狐。

雙

雙病頗省問尋煩。自笑五根為四根。萬籟怒號辭我去。舊交唯有月花存。

河內隱士。被贈墨一函。詩以謝之。

研磨朝與暮。草屋墨痕馨。書寫當須務。大乘一卷經。

青森正覺寺恒務弘通丙戌春贈三世光一部乃附詩

製意文章明且良。悉據經藏與律藏。從是東方千里地。佛佛新新現八相。

和羽前靈山法師。謝三世光書。

一世著書三世光。揮灑經律出尋常。讀來讀去君留定。名句文身照十方。

疊次魔韻

或說四魔或十魔。夙宵三省意云何。人間貧福任天祿。勿數塵埃少與多。

題茗讌讀詩圖

一幅古詩何足呻。茗堂煦煦氣如春。脫然苟解了茶味。猛虎亦為同坐人。

題半月

滿則缺兮盈則溢。老僧悟了守清貧。傲然勿笑如隣女。夜半照窗月半輪。

華頂叙懷書與橘翁

僧伽固不定居。樹下石牀任所臻。無限風雲從錫杖。八旬猶是旅中人。

寄華頂門跡微公

紫金誤見繼期生。况費信施汗梵城。近似山神與獸損。禁聞松籟及溪聲。上界不堪班列星。下方閑欲養餘齡。雙痾幸免聞人事。須向窗前讀古經。

明治癸未四月巡回房總筆記

翠柳紅桃亦白櫻。兩崖春色送舟行。行人非是思鄉客。半弄吟情半醉情。

同贈圓遊翁

紅紅白白又青青。奇艸珍花滿苑局。樂水樂山且樂醉。古稀客在古稀亭。

同九十九翁可庵子書題

妙吉祥家知者誰。五臺雲卷石橋危。水晶巖下瑠璃地。遊戲金毛獅子兒。

藥王寺觀應阿闍梨。贈女仙之圖。作此謝之。



蓬萊闕下八仙女。玉蕊背花臨玉泉。歌舞且休聞我說。長生不死大因緣。我大仙人嘗開會。會滋淨樂我常幽。長生不死妙真訣。不在三山與十洲。

癸未四月。寓下總國運沼極樂寺。見俗真上人之真。左右筆晚鐘庭翠松風六字。風字未及。虫點瞑目云。筆力飛動。非尋常人所及。予也年二十。游京師。與和尚結交者有年。當時可三十餘。博學強記。名聞四方。爾來四十年。今日而對真。頗動懷舊之情。今住持即阿者。則和尚之資也。乃書題用松風及鐘庭。

晚鐘聲欲絕。運沼對浮萍。來語半生夢。牡丹薰滿庭。

右晚鐘庭

勿謂毫無及。永離與世同。七重行樹下。事簡動待風。

右翠松風

題行山願海之語。贈晃榮上人

行山願海語尤奇。百劫三祇是可期。立雪童兒求半偈。出波龍女獻塵尼。一杯汲處潮初減。一費投時既嶮巖。驚敬法門無別說。願為苦海漚魚師。

咏牡丹

沈香亭北草芊芊。萬里橋邊落日懸。但有斯花真富貴。至今千歲保婬娟。

登羅漢山

金環鳴絕頂。合掌似前身。香散花千片。燈殘月一輪。虎巖疑長嘯。龍松黑鐵鱗。靈山高萬仞。踏雲再拜真。

松

露 漢名地賢姑蘇志二月生者名雷驚毀其色赤者名猪血罩

須與茯苓供上仙。淡甘非可比腥羶。首陽早識有斯物。三百篇存松露篇。竹外斜陽赤半窗。松籟親校書終一卷。不似客中人。

癸未五月寓大戶村大開寺。植木復軒寄詩。乃和韻

一笠草鞋已兩旬。雲烟稍覺謝紅塵。寒村叩鉢朝求食。古渡無人夜駭神。愧對總房山水美。未能詩句詠吟頻。適聞玉韻金聲響。明鏡浦邊是有隣。

書晴耕雨讀四字。示植木復軒

出養田園入養親。紅花翠柳自為隣。未知官海波瀾峻。閑屬晴耕雨讀人。

田家

人入羲皇以上班。地隣孤竹探薇山。五風十雨固無怪。擊壤歌存田畝間。堯島舜田山下阿。老翁何事笑呵呵。城中絲竹春如湧。未聽一聲擊壤歌。



書漫遊雜記後

才子漫遊西亦東。千詩何得錦囊中。少年未削少陵骨。鬼氣自存李賀風。

登大莊嚴寺大悲閣

山園三密寺。松響五智聲。曳錫初瞻仰。千光照衆生。

和復軒

摘章尋句幾多年。積雪聚壑勝嬾眠。知否六經之注我。我勘田圃是經傳。

癸未五月。房州笠名邑安樂寺。去寺西十餘町入汐見邑海濱

有一老松。幹大四五圍。橫枝颯蟠。長凡十餘丈。條枝離地者二

三尺。若五六尺。謂六七百年之物也。予曾見唐崎古松。爾來未

見如此者。土人云。房州名木也。予謂此海內名木也。豈止一州

乎。惜乎在小庵塵芥之中。古墓累累之間。非蒼叟養千歲之境。

乃賦古風一篇。

房海之濱夕日輝。適看松樹十餘圍。鐵鱗不動醉臥龍。抱石橫岸伏虎威。羨汝不張垂天翼。蒼蒼閑覆滿地莓。羨汝適屈凌雲氣。蟠根幸免棟梁材。獨恨我無三顧德。欲培枝葉難再來。惜不聞月下清韻。空聞怒潮聲如雷。

光嚴教正巡視手賀沼云書牘

八福田名出大藏。苗從無所得心長。耘耕不拔貪慎莠。粒粒渾爲阿鼻糧。

偶吟

一敗自爲魔屬俘。縱橫六道絆馳驅。今朝借問就何役。頻展臭皮纏罽。雖言待三大僧祇。始坐菩提樹下時。一善事爲一佛事。燈光不使炷油離。

甲申十月入佛供養日寄贈安陀衣一領於勇善上人

弓腰雪鬚老羅漢。臘月安居向北家。重著須防寒徹骨。讓與一肩舊袈裟。

贈正定寺勇善上人

棟梁椽柱一新新。鐘磬改聲轉法輪。和尚與余齡相近。一蓮臺上託生人。

寄高野山隆圓阿闍梨

三密道場天下弘。五瓶智水漱山嶺。仰彌高矣華藏界。一鳥猶呼佛法僧。上求下化入精神。維德不孤必有隣。東海法燈君所挑。無量光佛外無人。

拜邦義堤氏本尊。甚感威靈。乃拈一揭供養之。

救世大菩薩。威嚴非常倫。或三韓所貢。南都古寺珍。千金亦難得。百代幸可寅。靈像奉吾室。頗覺有宿因。望傳子孫久。日日花香新。



題介石翁說教圖

說說亦說說。懸河妙辨舌。富強喻我邦。到處萬人悅。

陸羽肖像

淡香清味源陸羽。珠公利氏弄輕烟。若逢蠻酒牛羹客。須鎖風爐與叡泉。

丙戌秋心法寺常全比丘。携圖畫一幅來曰。願加贊辭。展觀之。

則似百鬼夜行之狀。予有感。乃書數字與。意在策勵比丘之志。

山川列位。日月並明。四時不錯。八極昇平。聖者不說。怪力亂神。端士專愛。孝子忠臣。我問魔鬼。汝任何濱。來往無節。欲與誰親。魔鬼不對。搔首而擯。我為道者。開吻將陳。精神一倒。與鬼為隣。風吹燈炷。雨掩星辰。忽聞步趨。如縮如伸。闕隙窺視。鬼火熒熒。雙角一角。三目半身。叩鐘捧塔。負囊荷鏞。千姿萬態。變不同。君不見維新文明之世。何事獨醜濫僧風。賣佛鬻寺。易酒代饗。携妻懷子。復商歸農。若寫顛倒錯亂趣。殆是如今一畫容。

十僧詠

盲僧

衣內明珠失幾許。空勞暗索獨困貧。適疑浮木爭掃桶。不是盲龜柶象人。

(七律)

雙僧

近來風病聞根損。稍貸筆談領他名。自笑耳輪徒飾面。似休佛殿讀經聲。

啞僧

此人嘗列雜花筵。又對文殊示默然。災禍寧知生於口。破顏指月舉空拳。

畜僧

叢林近日似蟬蛻。人告無遺畜狗彘。人世百年保者誰。不為死計專生計。

狂僧

蔑視佛祖欲加斧。濶步大言勢似虎。自說風狂元屈汝。脫却袈裟擲餐吐。

行脚僧

二百餘城誰示津。炎山水海寧辭辛。一枝鉄杖折三度。當日善財非別人。

富僧

檀波羅蜜魔力厄。仁義禮讓如敵避。須修思惟與觀察。海山成於滴埃積。

寒僧

近休乞食待檀越。檀越多分貪且癡。幾度讀來香積品。渾為書餅不救飢。

病僧



半窓弦月明如燭。一片寒氈煖似春。病覺清閑方丈室。欲招三萬二千人。

山僧

一派清泉洗石枕。半山松籟駭眠時。此中二百七甲子。只許白雲入短離。

送真仰法師歸鄉

君亦道門一比丘。早知三學必當修。堪嗟戒定捐如土。界內渾為名利秋。人世多從一變流。似如大水不能留。僧家或捨三衣篋。奉戴夷冠覆秃頭。門門寺寺說三章。說說章章煩且長。畢竟不能詳四悉。為人對治屬望洋。三學從來磨似壁。今人何事強稱瓊。聖言萬古不能易。天下未廢誦法華。今朝重著一袈裟。多病畏寒爐火加。幸有舌根存一片。講場數起說維摩。

琴

千歲無絃曲。忽存彭澤彈。老僧奏佛讚。九鼎一何寒。

月

佛面比皎月。照耀千歲冥。如今光累盛。難奈下弦燐。

詩

錦繡殆翻覆。譯來難寫真。知者通八轉。漢魏耻為隣。

花

人間花未足。天雨曼陀花。昨日適登殿。一枝枯似菝。

雪

鹿衣凍似刃。珠襖碎彈丸。偶誦雪山偈。凜然毛骨寒。

酒

醒得滄浪客。醉來貪酒泉。不如傾鐵鉢。一掬飲山泉。修羅曠斷酒。未利笑勸杯。得失君休問。醉醒任自裁。

蘭

香染綠苔處。風吹不背時。童子點燈火。幽人讀楚辭。

竹

曉風鳴碧玉。一節凌寒雲。不恨我無友。虛心存此君。

梅

卜屋占梅隣。寒香尤可掬。人間存此花。出定山僧福。

菊

三溪就荒處。東籬發此花。只看傲雪色。不帶後時嗟。



與人

劫前無祖又無佛。元是與吾同肉身。只為知信根無敗。始名阿耨菩提人。  
一由旬內講經場。不就來聽輕垢犯。誰識法輪五十年。音聲佛事固為範。  
蟻駕落葉繞池隅。誇曰乾坤此外無。海術風帆破白浪。一匝地球盡海圖。  
文字葛藤克縛人。一刀兩斷亦非真。牟尼昔日習何道。曾為提婆勞採薪。  
水火風雷保萬全。過而不及豈非顛。教禪若失分毫節。教倒教家禪倒禪。

雙

不翅松聲與鶴噪。人間塵事謝來告。清閑勿使許由誇。未免潁川洗耳勞。  
扶律談常雙樹爛。剋肝銘骨衆傾聽。誰知病室默然跡。亦是維摩遺教經。  
毘那三萬二千人。不二法門次第解。一默無聲響如雷。文殊師利雙耳聒。  
讀經千萬卷。求悟一塵無。蝙蝠責難免。益爾縛已纏。適說一偈去。不如开中  
狐。網羅諸檀越。孰與屋下蛛。

偶成

風熱未醒寒脊梁。石爐時煎葛根湯。小童來告梅花發。強起開窗嗅暗香。  
元是支離無用人。未效世上合離契。經典纔披兩三卷。相對小童搖口唇。

送宗啓禪士行西京

遙看鐵錫向西飛。百尺竿頭進步時。不踏嵩山面壁跡。百城欲學善財爲。  
風說苦空聲有味。月離曉雲玉無疵。獅溪到日君看取。今日猶存蘭若規。

讀鐵翁禪師畫談

久說拈華夢。色香誰得看。問君君不答。微笑畫風蘭。

丙戌一月讀常念長老寄旭法師詩。蓋衣鉢之外。渾屬餘長。僧者之常也。買却云云何足論。乃次韻以慰。

一貧一福弄心魔。業報因緣無奈何。却喜為遭窮鬼迫。世財盡處法財多。  
女媧六萬皆天魔。夜驚車匿意如何。誰知檀特山中客。一米一麻猶風多。  
外物固搖煩惱魔。芥塵拂盡意由何。我道本來無一物。近年蘭若米錢多。  
水至支流多混濁。誰要褰揭溯真源。一千七百碧巖語。無句不歸還滅門。  
甲申臘月專門尊者自北海道還。寓淨運院賦寄。

一往一來寒暑遶。天中天末事相非。自非捨命忘身客。何發堅冰不解機。  
北海三春雪似梅。鳳城臘月梅如雪。縱令雪魄比梅花。孰與冰魂肅割切。  
適出寒鄉遊闕下。風吟勿費弄先驚。此君化境三千里。渴望六環向北鳴。



乙酉試筆

琢文鐫字元非法。無字無文是真道。此妙存於文字中。若離文字總煩惱。

見葛軒老醫乙酉歲旦口號。用先師榛軒翁所贈韻。當時先師年四十八。老醫年十四云。凡人忘舊者多矣。何為懷舊之念如是其深邪。頗不耐感嘆。乃和韻以示

志學之前十四天。書窗既帶老風烟。大名早次回春術。不背先師在世年。  
和雄我法師

年回池水水彌白。春近梅花枝始馨。每夕陪筵聽夜講。解高一卷梵網經。踐行荆路足傷釘。手折梅花衣自馨。如壁寸陰尤可惜。一塵猶出大千經。

乙酉元旦試筆

生命今年當八十。果然須坐鶴林場。青年雄志摧如土。白髮道心散似糠。虛飾三千年弟子。傍觀八萬卷經藏。云何今日悔無及。磨墨徒書試筆章

雪

六塵削跡一塵無。溪谷山川總是珠。足趾何人來按地。白銀世界現須臾。

拜金地院閻魔王像

(廿七)

(廿七)

菩薩易名稱閻魔。久居六道斷正邪。人非朽木如君像。歸命至心供一花。

弔精二居士

早知魔彊不可停。一朝歸去六塵亭。一音演說誰能代。四諦因緣人絕聽。殘枝黃鳥空相囀。荒苑梅花獨自馨。檀香一縷熏烟夕。供養西方蓮胎靈。

答大雲尊者

賀老祝年亦訪寒。感勸稽首拜來翰。對書殆似對君話。千里同心是至歡。送小倉公子定賢沙彌歸省

衰老何期再會時。殿前為栢柳絲垂。府君必有倚門待。拜趨勿令一步遲。

月前竹和歌題

月出琅玕耀。風來搖綠陰。幽窓誰寫影。高節與虛心。

雪中梅和歌題

潔白誰如雪。清香誰似梅。願備無愧筆。來賦雪中梅。

花間松和歌題

嬋娟花發處。松嶺一聲聞。屈曲春烟裏。老龍蹴彩雲。

難波西光尊者贈骨相木魚即題